

流行虎列拉病論序

明治十五年、余乘筑波艦、航新西蘭土、路過新嘉坡、聖及伯帶庇亞港、時聞有虎列拉病、因欲知其病勢流行傳染之狀、就各港醫院訪醫士、如新嘉坡聖之醫、猶有豫防之意、而如伯帶庇亞、看以爲地方病、醫亦不敢介意、實不堪驚駭也、後及達濠洲、茂兒勃倫、荅斯麻尼亞、及新西蘭土、檢疫之法極嚴、其衛生吏記保健證也、必先以虎列拉病爲主、用意於豫防最深切也、旣而投錨新西蘭土、有醫士某者、來談各國之衛生法、語次及虎列拉病、遂質余以流行之有

無、余曰如我國、至近年未能免流行、某愕然變色曰吾雖未審貴國之開化何如、今聞此一事、而知衛生之方法有所未十全、是非司衛生保健者之所須注意者乎、於是余不覺慙汗濡背、竊以此言銘肺肝、且自誓謂他日余務豫防此疾病矣、而未能也、頃友人熊谷幹、譯一書題曰流行虎列拉病論、將上鉛版、携來示余、余受閱之、則嚮余從西洋書中拔萃以授焉者也、其爲書、從虎列拉病之原病、至流行履歷治法、詳說明辨其譯妥帖、行文條鬯、使人易目看而心會、熊谷氏之此舉可謂勤矣、是不啻有裨益於治

療、寔推究豫防法之資也、蓋世之濟生家、由之研覃、取資於此、以擴充其用、實施以矯時之弊、補事之缺、則衛生豫防之方法、庶幾爲十全乎、然則使後之航海外者無所慙、使余之誓不空者、其必在斯編歟、其必在斯編歟、

明治十六年二月

豐住秀堅識

東國醫學

流行虎

列拉病論

海軍軍醫少監豐住秀堅編纂

海軍少軍醫熊谷幹翻譯

其製本ス

ヤ太々猛烈ニシテ極メテ夥シク人命ヲ殞亡セ

ル流行病某地方病ニ在テハニシテ最モ標準トナス

キ症ケレハカニ在テハ其發スルヤ水様液ノ吐下ヲ以テ

兆シ身体作テ虚脱ノ状態ニ陥リ精神非常ニ抑壓セラレ殆

ト全ク生活運營ヲ滅損シ或ハ竟ニ死往々初發ヨリ二十

ヲ致シ或ハ健然ノ反應ヲ生シ或ハ諸種危險ノ繼發症大槪

トス熱徵歸スルモノトス

トス熱徵歸スルモノトス

トス熱徵歸スルモノトス

トス熱徵歸スルモノトス

トス熱徵歸スルモノトス

トス熱徵歸スルモノトス

トス熱徵歸スルモノトス

セシ后全年八月頃セツルソ耕耘ヲ行テ州郡ニ在テ其農民
ヲ侵シ流行數週日ニシテ數千人ヲ勦絶シ大ニ民庶ヲ驚駭
セシメテソリ其後、西、南、東、北、各、方、に、流、行、ス、ル、に、由、リ、
印度ニ於テ以上ノ發起ヨリ遙ニ温德斯坦ノ境界ヲ踰ニテ
東西ニ播衍シ他ノ諸國ニ行スルニヤ較正確ニ之ヲ尋跡ス
ルヲ得ヘシ而シテ孟加拉ヨリ東南方ニ瀾葛スル等左ノ歷
譜的順序ヲ以テス
千八百十八年ボルマフ、アルラカン、及馬刺加ニ流行ス
全十九年ペナシ、ソマトラ、暹羅、錫蘭、及マウリツチスニ流行ス
全二十年支那東京及支那ニ流行ス
全二十二年、二十三年、及二十四年支那全國ニ行スル
全二十八年支那鞏固ニ流行ス

之ヨリ西ニ向テヤ在ノ順次ヲ以テス
千八百二十一年七月モスカ、ト及比耳西亞灣邊ニ流行ス
千八百二十二年此耳西亞ニ發シ二十三年、二十九年、及三十
年尙ホ該邦ニ行ハレタリ
千八百二十三年アストラカシニ流行ス
數年間之ヨリ西ニ播及スルヲナクシテ千八百二十九年ニ
至リ鞏固ヲ涉リテラニシテ同三十年ニ再
アストラカシニ入ル之ヨリ歐羅巴ニ經過セリ
西方ニ向テ行路ハ徐々ニシテ千八百三十一年五月ニ莫
斯科及ワルサウニ七月ニハ聖彼得堡及冕城ニ劇シク流行
シ十月ニハ伯靈及維也納ニ於テ太テ劇甚ナリ英國ニ於テ
ハ千八百三十一年十月ニ初メテソニテラニドニ發シ十

四月間該國ニ流行シ同三十二年太西洋チ横過シテクニサベツ
クニ達ス蓋シ此惡性流行ハ全歐羅巴ヲ荒敗シ竟ニ千八百
三十七年ニ此地方地終末ニ流行セシヲ謝シ去リタリ千八百
十七年以來印度ニ於テハ屢流行シテ太シク人民ヲ死亡セ
シメ竟ニ該病ハ該地ノ固有病ト稱セラレニ至レリ
前ニ揭ケタル初發大流行ノ外西方ノ諸邦ニ於テハ兩回八千
八百四十八年、九年及千虎列刺ノ暴甚ナル流行アリ共ニ千八
百三十二年ニ起リタル流行ノ如ク同一轍ノ方法ヲ以テ東
方ヨリ進行セルニ似タリ
蓋シ虎列拉ハ孟加拉ニ於テ始メテ產出シタル地方殆シト
ニ互リ中央タル流ヨリ東南西北ニ波及シ初頭寬徐ニ流行シテ
連々相繼グトナク太ク不齊ク波搖ヲナシ時アリテハ一時

其進行ヲ阻遏セラレハモ肯テ互塞ノ爲メニ滅絶セラレハ
ナク又更ニ節候、寒熱、土地、大洋モ其進行ヲ阻絶シクハザ
ルカ如ク又其形勢ヲ變セサルニ似タリ故ニ聖彼得堡及莫
斯科ニ在テモ等シク印度ニ於ケルカ如ク暴劇ニシテ露西
亞ノ雪中ニ於テモ亦タ印度ノ炎天ニ於ケルカ如ク猖獗チ
極ハノボルマラノ濕地ニ在テモ尙ホ温都斯坦ノ燥地ニ於
ケルカ如ク剿滅ヲナセリ

病原論

流行虎列拉病ハ何等ノ原因ニ基クモノナル歟茲五十年間
醫士ノ論題トナレリ其素因ハ或ル他ノ流行病ト普通ナル
ヤ疑フヘキニ非ラズ其誘因タル恐クハ「エーリアル」ノ氣狀又
恐クハ財謀、醜義的ノモノトス然レ其物タル孰レカ機關チ

具シタル者歟或ハ有機質タル歟將タ無機質タル歟ヲ識別
シ能ハズト雖トモ諸種ノ事情ニ由リテ察スルトキハ有機
組成物ニシテ其中又機關ヲ賦シタルモノアリトスルヲ以
テ理アリトス然レ從來化學上及顯微鏡上ノ查檢ヲ逸シタ
ルカ爲メニ未ダ該病毒ノ起原、保存、蕃殖及蔓延等ノ理ニ就
テハ甚タ曖昧ナリ然リ而シテ一般ニ該毒ハ尋常空氣ノ或ル
副物タリト擬定セラルレ其記者ハ皆ニ阿曾及電氣ノ變
形ヲ以テ思想シ或ハ某力的ニシテ變化上ニ屬スルモノト
憶想シ又或人ハ此原ヲタルリュリクノ地球的感動上ニ求メタ
リ而シテ先ツ虎列刺病ノ發生ヲ考ゾルニ必ス其病ハ屢流行
性ノ下利ニ前驅セラレテ疾カニ廣ク蔓延シ其發生スルヤ
更ニ警戒ヲサシムルコトナクシテ頓ニ來リ屢卒爾ニ消熄

シ而シテ少時ニ復タ再起シ或ハ毎ニ整然トシテ來リ時アリ
テハ或地ニ於テ一種特異ニ局限シ或ハ其道路ニ當ツテ奇
異ヲ刪滅ヲナシ或ハ風ニ逆ラテ走リ或ハ風ニ順ラテ行ク
等須ク記憶セザルベカラズトシテ
總テ爰ニ諸種ノ論說ヲ攷シ先ツ虎列刺病發育ニ關涉スル
ニ似タル所ノ事件ヲ稽察セシメテ其要ス而シテ其事件ヲ分チ
テ人民ノ共同ニ關スル件又各自一人ニシテ係ル件トス
其甲ニ屬スルモノハ氣象、季候、地質、大氣、食物、飲水、溼潤等
ニシテ乙ニ屬スルモノハ人品、男女、年紀、及職業等之ナリ
大氣ノ狀態「通常」大氣變化ヲ以テ更ニ虎列刺病原因ヲ稽
察スル疑問ヲ解明スル所ナクシテ寒、熱、乾、濕、風、雨、針ノ高低
等霄壤ノ差異ニ該病ノ存否ニ關涉スルコトナシ然レ暑熱ハ

多少流行ノ蔓延及其暴虐ヲ佐クルニ似タリ孟加拉ニ於テ
夏候暑熱ニシテ或ハ乾ニハ最モ猛惡ノ流行ヲ爲セリ孟買
ニ於テドクトル、ギワルト氏ノ製セシ表ヲ閱スルニ八年間
歐羅巴軍ノ苦ミタル最モ劇惡ノ虎列拉流行ノ季ハ四月乃
至九月ニシテ此際ハ健康体ニ就テ入院病者ノ數及受療者
ニ就テ死亡ノ數最モ高ク受療者中死スル者四月乃至九月
ニハ百人ニ就テ五十八、七一〇十月乃至三月ニハ十九人、五
一〇トス又千八百十七年間入院患者三千六百七十六人中
八月乃至九月ニハ二千九百十八人ニシテ十月乃至三月ニ
ハ僅ニ七百五十八人ナリト云フ又ドクトルモルヘット氏ハ
左ノ結果ヲ得タリ即チ孟買國ノヨロロピアン、セチラル、ホ
スビタールニ入院患者ノ最モ多キハ四月ヨリ九月迄ナリ

ト雖ドクトル、リトス氏ハ土人ニ就テ較之ニ異ナル所ノ
結果ヲ得ラレタリト記セリ乃チ同氏ノ說ニ據レバ千八百
四十八年乃至五十二年三年間ニテ死者十月乃至三月ニハ
七千百十二人ニシテ四月乃至九月ノ間ニハ五千百十八人
ナリト報告セリドクトル、ホフマクヘルソン氏ハ甲谷他ニ於
テ歐洲人及土人ヲ論セス虎列拉毒ハ毎ニ暑候ニ在テ最モ
暴シク活潑ナリト雖該病ノ劇惡ナルハ一般ニ一月ヨリ
三、四月ニシテ夫ヨリ八月ニ病勢最モ低點ニ至ル迄ハ下降ス
ト謂ヘリ千八百六十一年印度ノ西北州ニ虎列拉病流行セ
ルニ其檢疫委員ノ鑲行セラレシ報告ヲ閱スルニ北西州
ニ在テ虎列拉流行線彎屈ノ度ハ方今孟加拉國ニ於テ見ル
所ニ一致スルコトナシ歐羅巴ニ於テハ温熱較該流行ニ感

動スルニ似タリ乃チ千八百四十八年乃至四十九年其屈曲
線ノ最高度ハ九月ニ在リ而シテ千八百五十三年乃至五十四
年ニ於テラグラセル氏及其他ノ某醫ハ該病ハ最モ劇甚ナル
ハ最モ高度ノ温熱ヲ有スル季候ニ在リト報告セリ「設令印
度ニ於テハ暑中最モ多ク死亡シ且寒冷ノ季候迄尙ホ頗ル
多ク死セシト雖モ孟加拉國ニ於ルヨリハ北西州ノ寒冷季
ニ於テ死スルモノ最モ少シ亦歐羅巴ニ於テモ千八百四十
八年及四十九年ノ冬ニ在テ較烈シク流行シ千八百卅年及
卅一年冬候ノ間露西亞國ニ在テハ最モ甚シク流行セリ然
ル露西亞國ニ於テハ慣習ニテ冬季ニハ居常家屋ノ室内ヲ
太ク温熱ニ保存スルヲ以テ肯テ此狀態ニ由テ以上ノ理
由ヲ解明スルト能ハズ且ツ今尙シ虎列拉病毒ハ冷寒ニ依

テ壞盡セラレテモト觀察スルハ肯テ室内ノ温熱ヲ以
テ全州ニ瀰蔓セル虎列拉毒ヲ中和スルハ那耶ノ作用ニ出
シテ亦預想シ難キモノトス然レ以上ノ事實ヲ以テ觀察ス
ルニ蓋シ虎列拉毒タル肯テ寒熱ヲ撰ムニ非ズト雖モ
尙ホ暑熱ハ多少該毒ノ勢力ヲ劇勵スルニ似タリ
該病ハ早曉ニ在リテ發始スルモノ多キ所以ヲ察スルニ
凡ソ人身ノ体温ハ此時ニ方リテ下降スルヲ以テ此襲撃ヲ
將來スルノ傾向アルノミナラズ大氣ノ温度下降スレハ其
際馭圍氣ノ地面ニ近ク聚匯スルニ由ルナルヘシ蓋シ早曉
此病ヲ發スルノ傾向アルヤ蘇格蘭ニ在テハハバクトル、ア
ムス氏ニ注目セラレ又印度ニ在テハハミストル、トウフニク
氏、トクトル、モールヘッド氏ソル、アール、マルチン氏及其他ノ

數輩ニ保證セラレタリトス
 「降雨及濕潤」ハ虎列拉病ノ蔓延ヲ阻礙シ得ズ甲谷他ニ在テハ
 最モ乾燥ノ季候ニ於テ多ク流行セリト雖モ印度ノ北西州
 孟買及馬塔喇ニ在テハ否ラズ又北西州ニハ一時暑熱乾燥
 ノ候ニ在テ太々暴劇ナリ然モ其流行甚シキハ濕月ノ季ニ
 アリタルハ千八百六十一年該病検査委員ノ報告セルカ如
 シ方今孟加拉ニ在テハ乾燥ノ候ニ多ク危険ナリト雖モ千
 八百十七年八月セツルヲ荒蕪セシ廣延シテ且勦壞セル流
 行此全世界ヲ驚ハ古來稀有ノ最モ濕霖ナル季候ノ一ニ在
 テ破裂セシハ亦奇ナラズヤ蓋シ大氣ノ太々徐々ニ流動ハ
 全ク流動セスルニ方リ暑熱ト濕潤ノ合致セルモ太々虎
 列拉病ノ蔓延ヲ補佐スルニ似タリ故ニ衆多ク記者ニ據ル

ニ虎刺拉流行ノ時季ハ必ス暑熱濕潤ニシテ大氣氾滯スト
 云ヘリ又此件ニ關シテミストル、ト、ム氏ハ千八百四十六
 年キユルラツキニ於テ著明ナル虎列拉病流行ノ報告中ニ
 載セテ謂ク當時廬所ニテ寒暑針ハ華氏ノ九十度ニ位シ露
 点太々高ク八十シテ身体倦怠神思懊鬱ヲ覺ヘ呼吸ニ抑壓
 ヲ感シ僅微ノ力役ヲモ尙ホ操ルルヲ得ズト然モ此ノ如キ
 倦怠抑壓ハ虎列拉ニ關涉ナクシテ印度ニ在テ雨中屢「ロ」
 ル「雨」後又ハ雨間ノ間之ヲ感ズ故ニ肯テ之ヲ以テ該病ヲ
 發起スベキ因由ナリト觀察シ難シ孟加拉ニ於テ年内某候
 大氣ノ温濕氾滯スルモハ屢特發性虎列拉病ヲ誘起シ又
 此病ノ地方病タル地ニ於テハ其發生ヲ増盛ス魯テ虎列拉
 ハ大雨ノ后ヲ消熄スルモノナリト觀察セラレタルニ千八

百六十一年ニ在テハ反テ大雨ノ后直ニ此流行ヲ來セリ降雨ノ該病ニ感動スルヲ考ルニハ須ク當時ノ温度ト降雨后經過シタル時間ヲ察セザル可ラズ乃チ仮令暴雨アリシモ雨後數時間尙シ吹風ナキハ大氣氾滯シ暑熱濕潤ニ爲メニ人身体ニ抑鬱ノ感ヲ來シ頗ル該病ノ蔓延ヲ補佐スルニ足ル者ナレハ須ク該時ヲ乾燥季候ノ名唱テ以テ誑惑セラル、ト勿レ甲谷他ニ在テハ暑月ヲ乾燥月ト稱シ實ニ一年内ノ最モ乾燥ナル季候ナリト謂フト雖尙ホ多少温暖氣中ニ水分ヲ溶融シテ存シ純然濕氣ノ量ハ英國ニ於テヨリハ大ナリトス千八百五十五年及五十四年ニ英國ニ於テハ大氣平常ニ比スレハ較乾燥月五月及十二月除ク雨度十八度六二ニ位シ即チ平等ニ五度九三ヲ減下セリ

「風」ノ虎列拉病流行ニ感動スルヤ唯「ミヤスマ」ヲ集積シタル地上ヲ吹クヒニ在リテ虎列拉ハ大氣ノ廁所等ノ如キ汚穢ノ地ヲ通過シテ來ル時ニ方リ某地ニ流行セシモノ、如シ而シテ風ノ流過ハ該病ノ鎮靜ヲ伴フタリト云フ千八百十八年馬塔喇ニ在リテ颶風ノ后チ該病ノ流行消滅セリ歐羅巴ニ在テハ風ノ吹來スル方位ト該病ノ劇易ニ關シテ更ニ一定シタル對稱ナクシテ仮令諸種ノ事實ニ就テ察スルニ虎列拉病ハ吹風ヲ以テ旅過スベク見ユルト雖モ恒ニ必ス然ルニ非ラズオルトン氏ハ謂ク該病ハ諸國ヲ横過シテ行クモノニシテ半年間日夜行ハレタル強キ吹風ニ正シク逆フテテリビュッダヨリ孟買ニ行クヤ恰モ軟風ヲ透フテ馬塔喇ヨリコモリノ岬ニ行クト同一般ノ速力ヲ以テセリ暑熱濕

潤ニ合致スル大氣ノ地平運動ニ缺如大氣ノハ既ニ之ヲ論示セリ
 「越列幾、阿曾、風雨鍼的壓重」モ亦該病流行上ニ更ニ確然タル
 感動ヲ起サ、ルカ如ク乃チ種々ノ形狀ヲ以テ種々ノ流行
 時ニ存セシニ似タリ
 從來氣象體景狀ノ虎列拉病蔓延上ニ感動スルコトニ就テ論
 及セル者多シト雖モ多シハ其論說ノ結果ニ於テ頗ル困難
 ナ生シ或ハ判然相ヒ反スルモノアリ「大氣ノ景狀ト流行ノ
 間ニ稍關涉ノ存スルアリト雖モ原因及成績上ノ關涉ニア
 ラズ」蓋シ有機作用及化機變化ヲ補相スル温熱及濕潤ハ虎
 列拉毒ノ蕃殖ヲ獎進シ且穩靜淹滯セル大氣ハ又毒ノ聚滙
 スルコトヲ補佐スルカ如シ所謂暑熱及濕潤ヲ以テ卉樹ノ素

原ナリト觀察スルニアテスト雖モ大ニ其發育上ニハ感動
 アルカ如シヨストル、グラ非セル氏ハ千八百五十三年及五
 十四年ノ虎列拉病流行ニ關シ龍動府ノ氣象體學上ノ報告
 ヲ決定スルニ方リ其注意ハ千八百三十二年及四十八年乃
 至四十九年ノ氣象體學ニ係涉シテ虎列拉病流行時間大氣
 ノ景狀ハ實ニ細慎注意スベキモノタルヲ示セリ曰ク以
 上三四ノ流行ハ一種特異ナル大氣ノ景狀ヲ來シ最モ流行
 劇甚ノ間ニハ著シク稟霧ヲ生シ高處ハ稀薄ニシテ低地ニ
 稠密ナリ加ルニ其際風雨針ノ度ハ著シク昇高シテ大氣濃
 厚ナリ千八百四十九年及五十四年ニ於テハ各次其襲來ニ
 伴フテ氣候中等ヲ超ヘテ熱シ降雨至ク來ラズ而シテ大氣穩
 靜ニシテ殆ソト恬息セリ「河流ニ濱スル地ニ在テハ夜間温

度昇騰シテ日々ノ昇降少ナク、霧稠密加ルニ、大氣中多分ニ河流及其近傍ノ沼澤等ヨリ揮散セル不潔物ヲ籠積シテ、電氣欠損シ千八百五十四年ニ於ケルカ如ク、阿曾全ク欠如セリ、斯ク阿曾ノ欠如セルヤ、是惡クハ以上地面ノ大氣中剩ク有機物ヲ含蓄シ、其有機物ノ溶解ニ據リテ減盡セラレタルニ由ルナルベシ。

千八百四十九年及五十四年ニ於テ該病流行ノ始メテ衰退スルヤ、風雨針下降シ、大氣及流水ノ溫度ヲ減却シ、久シク恬靜ナリシ大氣ハ繼テ強キ南西風ヲ起シ、爲メニ淹滞シテ有毒ナル大氣ヲ速ニ蕩散セシメ、タリ前後共ニ九月ノ末ニ臨ンテ、達迷斯河ノ溫度六十度以下ニ降リタリ、然レ千八百五十四年ニハ風雨針再ヒ増盛シ、大氣再ヒ淹滞シテ該病ノ衰

退著シク阻遏セリ、然リ而シテ設令十一月及十二月ハ殆ント九月ノ如ク、霧多シト雖レ再ヒ漸々衰退ヲナシテ、竟ニ消熄ニ及ベリ。

「氣候」該病ノ劇易上ニ氣候ノ感應アルヲ精密ニ擬算スルコト、克ハス何トナレバ、印度及該世界東部人民ノ戶籍誌ハ未タ充分ニ確實タラサルヲ以テ、其流行ノ劇惡ヲ以テ、歐羅巴ニ於ル流行ノ劇惡ニ比較スルコトヲ得サレハナリ。

故ニ先ツ各次流行ノ劇惡如何ヲ論セス、印度ニ在テハ流行太々頻々ナリト雖レ、歐洲ニ在テハ千八百三十二年來僅ニ兩回劇甚ノ流行アルノミナリ、然ルニ印度ノ或部ニハ恒ニ之ヲ存在セリ、土地ノ泥沼氣ト虎列拉病ノ間ニ何等關涉ノ存スルヤ否ハ大ニ疑フベキニ似タリ、又氣候感動ノ事件ハ

再ヒ死亡及易感性
 「地質」虎列拉ハ斯ク暴シテ殆ソト全世界上ニ流行シテ地質ハ格別ニ感動セサルモノ、如シ或醫ハ馬塔喇及他ノ地方ニ於テモ家屋ノ「ラテラ」非テ「地」印度地方ニアル赤色ニシテ砂礫多キ土質ニ基礎スル所ハ較該症輕易ナリト思考シドクトル、マクレラント氏ハ輕鬆ニシテ多ク砂礫ヲ含有シ容易ニ放乾セラル、地ニ比スレハ硬固ナル粘土ニ於テハ死亡ノ比例多シト謂ヘリドクトル、ロリメル氏ノ曾テ經驗セラレシ流行ノ殆ソト一半ハ黑色ノ軟地「コットン」ニ在リトシ千八百三十二年オーベルギエノ火山地ハ假令虎列拉地方ヲ以テ圍擁セラレタルモ尙ホ之ヲ免レタリト云ヘリドクトル、フアル氏ハ英國ニ於テ第一期地層ヨリ組成シタル地ハ他ノ地層ヨリ成リ

タル地ヨリモ其險害遙ニ少シト云ヘリ

「海面上高擧」全世界上虎列拉ノ最モ多ク流行スル地位ハ河岸及大流ノ口邊ニ瀕シタル海面ヨリ特ニ抽擧セザル地トス龍動ニ在テハ低卑ノ地位最モ危險ニシテ其地位益高上スル所ハ死亡益減少セリ是風雨針的壓迫ノ差異ニ由リテ然ルニ非ラズ蓋シ低卑ノ地ハ一般ニ地面ノ濕潤甚シクシテ排水最モ惡ク空氣ノ疏通及流動最モ少ナシ極メテ不潔ニシテ加ルニ住民ノ稠密セル等許多ノ不良ナル衛生法ヲ合致スルニ因スルヤ疑ナシ龍動及其近傍ニ在テハ殆ソト達迷斯河ト水準ヲ等クスル卑濕ノ地ニシテハ死亡ノ數、人口一萬人ニ就テ百五十六人ノ比ニシテ最モ高位ノ地

トパンニ在テハ人口ニ萬人ニ就テ十五人ナリ然レ其地位
 較高キモ以上ノ例ニ據ラザル地アリ是恐クハ低卑ノ地ヨ
 リモ衛生法ニ不長ナル所アルニ由ルナルベシ虎列拉ハ低
 卑ノ水準面ヨリモ山嶺ノ高處ニ於テ流行ノ罕ナルヤ印度
 ノ山國ニ在テ然リ然レ其流行スルヤ敢テ劇甚ナラザルニ
 非ラズドクトル、チエベルス氏ハ印度ニ屯在スル歐洲兵ノ健
 康ヲ保全セシムル方法ノ查點ニ就テ論ゼシニ虎列拉ハ千
 八百四十五年海上六千「ヒート」ヲ出ルクツソリニ流行シ又
 往時ヨリ六千「ヒート」乃至七千「ヒート」ノ高位ナルモルリ
 ドルムホラ、ダチーリソグ、及ジャカタラニ行ハレ又海上二千
 「ヒート」乃至三千「ヒート」ヲ出ル較卑低ノスト、ハツ、ハツ、
 ラバフ及マハレズナルニモ流布セリト云ヘリ

「不潔大氣汚穢セル野園氣ハ虎列拉病ノ猖獗ヲ獎勵セシメ
 タリシ證據太々多シ千八百六十一年ミーンミールノ軍營
 ニ流行ノ際印度地方虎列拉検査委員ノ報告ニ際カナリ之
 ニ反シテ或ル流行ニ在テハ太々不潔臭穢ナル土地ノ全ク
 流行ヲ免レタルモノアリ故ニ極メテ臭穢ナルヲホル及ダ
 ワリタルハ流行ヲ免レタルモ之ニ接近セルミーンミール
 及モラルノ軍營ハ虎列拉病ニテ荒蕪セラレタリ且ロ下ム
 國ノ不潔ナルシット上ノ此害ヲ遁レタルヤ亦例外トス又時
 トシテハ著シク純清ノ大氣ヲ有セザル地モ之ヲ免レサルコ
 アリ例スルニ千八百四十九年ニ於テミッドルセッキス、ヘルト
 ホルド、ボッキンハ、サ非ル及ケシト之ナリ然リト雖レ其例
 外ヲ論セズ厠、排水渠、腐敗ノ動物及植物ノ殘餘或ハ人民

稠聚及人類以排泄物等法以テ大氣及最甚汚穢セ
 レタル地方ハ一般ニ虎列拉病極メテ險惡シテ最モ汎
 瀾蔓スベキ所トス。其醫ノ説ハ「不潔水」或ハ素因トナリ或ハ誘因ニ隨ヘハ説テ虎列拉
 流行ニ切要ノ地ヲ占ムルヲ疑フヘキニ非ラス。其毒大
 ノ一氏ノ思考ニ隨ヘハ該病ハ榮養管内ニ發生シテ其毒大
 便中ニ現在シ排水渠、厠房等ノ滲瀝ニテ水ヲ汚染シ倘シ其
 水ヲ飲用スレハ此病ヲ感スルモノナリ。蓋シ之ヲ以テ果
 シテ虎列拉病ハ不潔水ニ由テ生スル方法タル歟或ハ否ラ
 ザル歟ヲ知ラズト雖モ乃チ虎列拉病ヲ蔓延セシムルノ方
 便タルヲ駭然タリ其確實タル所以ハゴットルスノ一氏及
 三ストル、シモン氏ニ由リテ引證セラレタリ龍動府ニ流行

セシ最后ノ二次ニ於テモストルス、シモン氏ハ之ヲ不潔水ニ
 由テ感生セシモノトシテ其報告中ニ甲乙水源ヲ異ニスル
 水ヲ導引セル社同時同區ニシテ且ツノ水ヲ消盡セル人民
 中ノ死亡表ヲ示セリ蓋シ兩社ノ水樋ハ頗ル平等ニ同一様
 ノ地面ニ置カレテ往々同一ノ街頭ニ並行シ且之ヲ給セラ
 レタル戸口ハ頗ル平均ニ分配セラレタリ其水社ハラムベ
 ス「オートル、ゴムパニ」及「ソースケルリク及オウキスハトルコムパニ」ナリ
 甲ハ龍動ノ汚水渠及潮流ノ感動ヲ受クル所以上流ニ方ル
 ザットソニ於テ其水ヲ導キ、乙ハオウキスハトル及チェルミト
 ニ近キ河ヨリ給セリ故ニラムベス當水給セル水ハ較純粹
 ニシテオウキスハトルコムパニノ水ハ太々不潔トスラ
 ムベスコムベスハ給セラレ、戸口ニ於テノ死亡ハ各

一萬人ニ三十七人ノ比ニシテソノ大ナルク及オウキスハ
 一ルヨリ給セラル、家口ニ在テハ各一萬人ニ百三十人ノ
 比ナリ故ニ惡水ヲ飲用セル人口ハ清水ヲ用フル人口ヨリ
 ハ此病ヲ受クルハ大約三倍半多ニ及ヘリ
 以上ノ查檢ハ頗ル精覈シモノナリトス而シテ此試驗ヲ行フ
 タル人口四十萬及五十萬ニ就テ甲乙二種ニ關シテ唯異ナ
 ル所ハ供給セラレタル飲水ノ種類ナリゴルデスクーノ廣
 街ニ在ル唧筒ノ水ヲ飲用スルニ由リテ該病ヲ誘發セシ著
 名ノ例ハ尿排泄管ヨリ汚染セラレタル水ハ毒害ノ感動
 ナス精覈タル證トナス又ドクトル、ロース氏ハ露西亞ニ
 在テ冬候虎列拉病ノ劇甚ハ全ク民家ニ接近セル地ヨリ集
 積シタル雪ノ融解セル水虎列拉排泄物ヲ飲用スルニ基

原ゼリト云ヘリ但シ單ニ不潔ノ水ヲ以テ必ズ該病ヲ生ズ
 ルモノナラズ故ニ前篇記載タル汚穢ノ大氣ト同一般ノ
 方法ニ由リテ惡水ヲ供セラル、地モ亦全ク該病ヲ免レタ
 ル例ヲシトセズ
 編者云テ明治十二年東京府下ニ虎列拉病ノ流行セシ因
 由ヲ考ルニ其始ニ罹リタルモノハ濱町三丁目十一番地
 伊東七六及繪物町二十六番地藤根彦太郎ノ二人ニシテ
 共ニ神戸港當時該港ニハ該病盛ニ流ヨリ解纜シタル瀛
 船ニテ來着セシモノナリ伊東氏ハ六月十七日該港ヲ發
 シ同十九日ニ着府ニ凡ソニ時間ノ后發病シ藤根氏ハ同
 月三十日該地ヲ開帆シ二十二日ニ着京ニ同二十四日
 ニ發病セリ以上ノ狀態ニ由リテ察スルハ兩人共ニ神戸

港ニ於テ病毒ニ感染シ其潜伏期中本府ニ來着シテ后發
 病シタルハ明瞭ナリ然レ而シテ此兩人發病后當府ニ於テ
 病毒ノ蔓延セル緣由如何ヲ明言スル克ハスト雖モ其據
 ルヘキ事件ヲ以テ考ルニ固ヨリ兩人ハ羈客ニシテ親戚
 ノ之ニ侍ルモノナク且發病後數時ニシテ病院ニ送輸シ
 尋テ死亡スルニ由リテ更ニ其精密ノ履歷ヲ跡スルヲ
 得ス今之ヲ傳播セシハ病毒飲水ノ媒妁ニ由ルトセン歟
 然レハ繼テ發患スルモノ濱町近傍ニアラス又空氣ヨリ
 蔓延セシトセシカ其形迹漠然トシテ之ヲ原スルニ由ナ
 シ只藉リテ以テ其緣由ニ係涉スヘキハ墨陀江水是ナリ
 蓋シ伊東氏ノ投宿セシ旅亭ハ江水枕ミタレハ發患ノ時
 吐瀉物ヲ江中ニ投棄セシ歟或ハ汚染物ヲ水中ニ濯洗セ

シカ未ダ知ルヘカラス蓋シ江水ハ許多ノ有機物ヲ含蓄
 シテ病毒ヲ蕃莖スルニ容易ナルモノトス而シテ其繼テ發
 病セシ地位ヲ察スルニ深川及築地等ニ住スルモノニシ
 テ江中ニ往來セル船夫漁師ニ多シトス然レモ檜物町近隣
 ノ地ニ續テ患者ノ出現セシハ恐クハ飲水ノ浸淫汚染ス
 ルニ基クモノト如シ
 「粗食」千八百四十八年及四十九年流行ノ際ニストル、公ラサ
 シセル氏ノ論載チミルニ虎列拉病ノ暴シク發起スルヤ腐
 敗セル魚肉、不食ノ醜藏猪肉、腐壞シタル乾酪等ノ食用ニ判
 然尋跡セラレタル種々較著ノ例ヲ注目セリト「下クトル、カ
 ルペントル氏」曾テ學校生徒ノ幾許人腐敗ニ傾キタル此
 颯ヲ多ク食シテ虎列拉病及虎列拉性下利ヲ起シ就中十一

八、其命ヲ殞シタリ云々「往時印度ニ在テ虎列拉病ノ
 發起セシ頃多クハ病ニ罹リタル米穀ヲ食スル由リテ起
 ル者ト思考セリ」余ハ曾テ貴族ノ密封セシ魚肉ヲ食
 スルノ后チ數時ニシテ該病ヲ發シタルヲ目撃セリ尙ホ以
 上諸症ノ外當時醫療ノ爲メニ投與シタル下劑ノ障害ヲ算
 入シテ可ナルハシ印度ノ記者不多ク下劑ノ誤用ニ由リテ
 該病ヲ生シタル害ヲ知ル察スルニ其害啻ニ蠱類及利水下
 劑ニ以テ限局スルニ非ラザラシキ何トナレハ曾テ緩和
 劑ヲ用ヒテ虎列拉病ヲ誘發セシモノアリタル、ア、
 十、
 十、
 種ノ下劑ヲ論セズ之ヲ用ズルヲ禁ゼリ但シ早晨ニ般
 三、虎列拉病初發徵ヲ發スル時間トス

「行軍」ロセルス氏、ロリタル氏及ハルフ、
 馬塔喇ニ於テ行軍ハ太ク虎列拉病ヲ生シ易キモノタル
 ヲ示セリ千八百二十八年及四十四年來馬塔喇軍ハ旗兵ニ
 就テドクトル、ロセルス氏ノ亞細亞虎列拉病報告ヲ閱スルニ
 歐洲兵及土人兵ニ在テ共ニ行軍ノ害有ルヲ證セリ又歐
 洲新徵兵ノ本隊ニ合致セント欲シテ來リシ巨大ノ隊ハ太
 タ多ク之ニ苦メリ之ニ反シテ其員寡ナクシテ十人或ハ二
 十人多キハ百人或ハ二百人ヨリ組成シタル銀庫ノ衛兵ハ
 此害ヲ冒ムルヤ極メテ些少ナリトシテ而シテ歐洲兵ノ該患ニ
 罹リタル平均數ハ百人ニ就テ二十三人、九五ニシテ小隊ニ
 在テハ百人ニ就テ二人、七二トス但シ士官ハ準ニ之ニ罹ル
 モノ鮮シ又ドクトル、ロリタル氏ノ報告ニ隨ハテ遠キ行

軍ハ近キ行軍ヨリモ太ク危険ニシテ天行軍ノ遠近ト罹病者
 八間、對稱アリテ證セリ馬塔喇ニ於テ士人ハ軍ヲ察スルニ
 六百里乃至八百里ヲ行軍スル所ハ百人ニ就テ四十六人ニ
 至テ八百里乃至千三百五十里ヲ行軍スル所ハ百人ニ就テ
 七十五人ノ比例ナリト云フ上ル、且セルス氏ニ隨テハ其罹病
 ノ差異ハ疲勞、胃露、群聚及他ノ素因ニ基クモノニシテ行軍
 ノ小隊ニ在リテヨリハ大軍ニ在テ特ニ暴劇ナルハ其理ニ
 基クモノトナセリ行軍ニ虎列拉毒ヲ附着スル弊害ハ虎列
 拉流行ノ際既ニ犯サレタル軍隊ニ於テ其營所ヲ謝出セシ
 ムルニ由リテ屢目撃スル所以有益ナル結果ト相敵スルカ
 如シ蓋シ其差異ハ尋常行軍ノモテヨリハ既ニ犯サレタル
 軍營ナリ一時謝出セル兵ニ於テハ其疲勞、群聚俱ニ寡ナク加

ルニ遙ニ佳良ノ保護ヲ得テ大ニ精神ニ愉快ヲ感スルヲ多
 キニ基クナラシ曾テ聽ク所ニ據リテ行軍中陣營ニ在テ暴
 シク虎列拉ニ苦ミタル兵モ既ニ之ヲ去テ他^{バラス}兵舎ニ達
 スルニ臨シテ該病ハ消失セシト往々之ヲ云フ又「エツチ、エム」第
 六十三番隊ノ「フナフヨ」ハ悉ルラリトシ行軍ノ際非常ニ
 該患ニ苦ミタリト雖モ不健康ナルベシト云フ其地ニ營ニ
 タル兵舎ニ達セテ後反テ二三日ニシテ該患全ク消熄セシ
 著名ノ例アリ以上ノ状態ヲ察スルニ恐クハ八月ノ候帳幕
 中ノ劇熱、群聚及疲勞等最モ有力ノ素因ヲナシテシルモノナ
 ラズ千八百四十六年甲谷他ニ在テ「エツチ、エム」八十六番隊ノ
 最モ劇甚シ虎列拉病ニ苦ミタルハホッペ^{ハッペ}ニ於テ遠キ
 疲勞ノ行軍ヲテ後ニ謝出セリト云フ

「各身ニ属スル感動」(男女)ハ唯僅ニ感動ヲ有ス千八百四十九年龍動ニ在テ死者ノ比例男子ハ百人ニ就キ零六七ニシテ婦人ハ零六五トシ養狂院ニ在テハ男子ハ六人、四婦人ハ六人、六ナレトモ患者ハ男子ニ在テ八人、九婦人ニ在テハ十一人、六ナリ」印度ニ在テハ唯歐洲兵ノ年報ヲ得ルノミナレハ恐クハ男女ノ罹病比較ヲ算セシモノハ其例些少ナラシキワルト氏ノ表ヲ見ルニ健康体ニ比シテ入院ノ數ハ百人ニ就キ常兵ベロトニハ一人、七四婦人ハ一人、五八ニシテ健康体ニ死亡ノ比ハ常兵ニ零七〇ニシテ婦人ニ零五〇ナリ(年紀)ニテハ、クラフ井マセル氏ノ說ニ據ルニ男女共ニ五十歳以上ニ至リテハ危篤症ニ罹リ易クシテ五歳乃至四十五歳ノ年紀ニ至ルニ死亡ノ數少ナリ」千八百六十一年印度ニ

在テ年紀又感動ハ殆シト辨明シ難ク又「テ」トル、台「ル」氏ノ說ニ英國ニ在テハ二十歳以下及五十歳以上ノ者ニ於テ最モ多ク此病ニ死ス然ヤ恰モ英國ニ般他病ニ由リテ死亡スルノ比トシテ致スル云々」中「」ハ最モ難クシテ「」ニ歸ス「印度住居ノ長短少時印度ニ住スルモノ久シク之ニ住スル者ヨリモ多ク此患ニ罹ルモノ又「」思察セテ「」然「」其意見タル肯テ判然審認セラレタル事實ニ基クモノニ非サズ如シ千八百六十一年流行ハ際該委員ハ其發起ニ關スル事件ヲ審檢スルニ方ツテ之ニ移住セシ精密ノ時日ヲ覈認シ得ザルヲ以テ竟ニ意見ヲ決定スルニ克ハサリシ故ニ其表中ニ書クタル數ニ就テ更ニ確乎ニ決定ヲナス能ハス而シテ該處ニ役スル歲月ノ益短キモノハ最モ甚ク以テ該患

ニ苦ミタルハ判然タリ乃チ健康者ニ就テ死亡之比例二年未滿印度ニ服役スル者ニ在テハ百人中七八七ニシテ十年以上勤役シタル者ハ百人中三八五ナリ但シ該件ノ精覈ナル審察ハ他日ノ検査醫ニ讓ラントス蓋シ印度ニ住居スル歲月長短ノ虎列拉病ニ感動スルハ以上揭示シタル素因ニ比スレハ肯テ緊要ノ件ニアラス

「既往ノ健康虎列拉病ハ體格ノ強實孱弱ヲ論セス之ヲ犯スモノニシテミストル、ドナルム氏ノ診セシ所ニ據ルニキニルラッキトニ在テ第八十六番隊ノ中多クハ最モ強壯ノ者ニ發病セリ甲谷他ノ病院ニ於テハ強實ノ稟賦ニシテ容貌ハ蓄薇色ヲ呈シ筋肉發育ヲ充全セル「アッファン」人ノ該患ニ罹ルチ屢目撃セリ又既往ノ衰弱ヲ來セシ疾病ハ死亡上ニ感動スル

ヤ疑ナシ飯倉ドナルム、モルヘツト氏ハ惡液質及衰弱病ハノベテノ病院ニ於テ該患者ノ素因ニ有力ナル感動ヲ有スルニ似タリト謂ヘリ雖モ肯テ該病ニ罹ルベシ性ヲ增加スルヤ未ダ確然タラズ蓋シ失荷兒陪及下利ハ素因ノ感動ヲ有ストドクトル、ゴトル氏ノ報告ヲ閱スルニ僅微ノ素質ハ既往ノ疾病ヲ以テ誘生スルニ似タリ而シテドクナルム、ガトル氏子ル氏ハ依甸堡ニ於テ該病ノ死体ヲ剖檢セシニ其体中未ダ僅ニ疾病ノ痕ヲ示セシト云ヘリ千八百六十一年印度ニ於テ健康体ニ就テ發スル該患者ハ百人中入院患者ヨリハ十三人、五ヲ給セリ然ルニ兵舍ノ軍卒ヨリハ僅ニ四人、七ナリ然レ是恐クハ單ニ素質ニ因ルモノモ他ニ因由ニ基クナリトシテハ

「慣習」ハ虎列拉病ノ罹否ニ感動スルハ曾テ預想セラレタルヨリモ遙ニ微少ナリ慣習放逸ヨリ肝臟及腎臟ニ有形病ヲ生シタル病者ハ該病ニ罹ルニハ恢復本ルヤ太難シト雖モ其放逸ヨリ誘フタル易感性ニ關スル確乎ニ其度ハ未ダ充分ニ推究セラレザリシハ千八百六十年印度ニ於テ放蕩無頼ノ者ハ飲食甚廉節スル者ニ比テハ該患ニ罹ル者多シ然レ既ニ罹リタル者ハ恢復ノ機會ヲ得ルヤ尙ホ佳良ナリ但シ之ヲ試驗セシ員數ハ極少ナリ猶ホ其詳ハ未ダ明カニ「職業」ハ更ニ特別ノ素因ニ生シテ其病ニ罹ル者ハ如シ雖モ不健康ノ害ニ冒觸シ及不健康ノ住所ニ在ル者ハ其危險ヲ增加スルヤ論ヲ俟タズ故ニ列細綿篤ニ常兵非職士官ニシテコソソノ下オヒハ在役士官ヨリモ之ニ罹ル者多シ疲勞、恐クハ最有害ナリ

ノラ 乏食、悲歎、驚怕ハ較素因ニ感動スルハ大ニ疑ヲ容ルベキニ非スト雖モ確然其度ヲ算定スルヤ太難シトモハ概シテハ以上列次シタル諸因ハ大概素因トシテ可ナル如シ就中不潔ノ太氣及飲水ハ誘因ニ運輸論次ニ復タズルヨリ依命以上諸因ハ虎列拉病ノ危險ヲ屬マズベシト雖モ未ダ獨己ニ該病ヲ發生スルニ足ラザルニ似タリ虎列拉流行ノ前後共ニ以上揭示シタル状態ノ尙ホ虎列拉病ヲ生ズルヨリナクシテ現存スルハ是必ズ虎列拉病ヲ醸生スルニハ他ニ一種特別ノ某因有リテ存セズンハアルベカラザルヲ指示スルモソトス然レモ今其特別ノ因ヲ示スルニ先ツテ宜シク未ダ前ニ論及セザル所ノ虎列拉病天然ノ履歷數件ヲ左ニ記載セシトス

「虎列拉病流行ノ前及其間世上ノ健康」歐羅巴ニ於テ該病流行ノ間ハ種々ノ財謨的病殊ニ泰裏土熱流行感冒及不利ヲ現セリ故ニ英國ニ於テハ千八百四十八年虎列拉病流行ノ際之ニ先ツテ久シク不利症行ハレ爲メニ其流行ヲ予想スルニ至レリ加之泰裏土熱亦増盛シ千八百三十二年及四十八年ノ流行ハ危篤惡性ノ流行感冒症之ニ前驅セリ但シ下利症ハ虎列拉流行毎ニ存在ス又千八百四十九年龍動府ニ於テ三月間虎列拉病ニ死スルモノ夥多ナルニ關セズ其際泰裏土熱ヨリ死スルモノ其數殆ノト之ニ等シカリシト云

「印度ニ於テハ該病流行ノ際斷々不利症ヲ現スト雖トモ他ノ財謨的諸病之ニ前驅又或ハ之ト平行スルハ未ダ曾テ能ク檢出セズト云フ然レモ虎列拉病ハ肯テ他ノ財謨的

諸病ヲ驅逐セザルカ如シ

以上ノ事情ヲ以テ察スルニ虎列拉病流行ヲ補相スルノ事件ハ亦他ノ財謨的諸病ノ蔓延ヲ獎勵スルモノシテ可ナルモノトス

「虎列拉病流行地ノ限界」ハ時トシテ奇異ニ突然限畫ヲナス

アテテ往々市街陣營或ハ都府等一側方ノニテ分界ス千八百四十八年及四十九年アルゲル州ハ小邑阪ニ在テ其一側ヲ襲ヒ井然之ヲ區畫セリ但シ其市街タル唯一道ノ本街ヨリ成立シ高キ一關門ヲ以テ之ヲ平等ノ二部ニ區分シ其市民斷々相ヒ互ニ往復スルニ其門西ノ部ハ人モ此病ニ罹ルモノナシ甲谷他ハ距此七里ニシテモトムト稱スル地アリ屢流行スト雖モ甲谷他ニ於テ以テ否ラテ還テ甲

谷他ニ流行スルハ之ニ反シテドントム地方ニ之ヲ見ズ
 船艦ノ一部分ニ之ヲ發スルモ他ノ部ニハ否ラザルアリ又
 家屋 謂クハ所ノ一側之ガ爲メ壞滅セラル、モ他側ハ之ヲ
 免ル、アリ州郡ニ限局ズルハ時アリテ較著ノ状態ヲナス
 アリ千八百四十二年ガノジスヲ通行セシ第九番鎗隊ニ就
 テ瞭然タリ一ノ列細綿篤アリ其頃左右兩翼時日ヲ異ニシ
 テ航行セシニ左翼軍ノモシタル 更ニ濱港トニ達スルヤ船
 中虎列拉病ヲ生シ之ヲ隔距シテ十二日間尙ホ連綿發起セ
 然ルニ其感染地方ヲ越テ去ルニ臨ンテ全ク之ヲ消熄セ
 而シテ后右翼軍ノモシタルニ達スルヤ亦之ニ侵サレタル
 ニ恰モ左翼軍ノ此病ヲ消滅セシ地方ニ達スルニ及ンテ又
 之ヲ消滅セシニ感染ノ限局面ハ此流行ニ際シテ軍ヲ移轉ス

以テ其例報告書中三種々アリ就
 中千八百六十三年流行シテ虎列拉委員報告書中ニ詳ナリ蓋
 之ヲ移轉スルニ一般ニ數里ニシテ足リタルニ至リ
 「各地侵襲」ノ方法印度及歐洲ニ在リテ善履下利症ニ前驅セラ
 時下シテ千八百四十九年英國ニ於ケル流行時ノ如ク
 數月間之ニ前驅ニ至ル、トアリ又時出シテ初メ二三
 不虎列拉症ヲ現シ尋テ暫時ニ劇シク流行ヲ始ムルアリ又
 他ノ時ニ在テハ數日間數人ヲ侵襲スル后頓ニ奇劇ノ流行
 ヲ來スアリ恰モキニラッキニ於ケルカ如シ此流行ニ就
 テニタルト、ト、氏ノ曰ク數時間ニシテ各歐洲列細綿篤
 陣營又兵舍各帳幕及各家屋ニ發現シ次テ四十八時ニシテ
 流行ノ極度ニ達シ后其地播延セズシテ漸次減少シ斷續數

週間キルラキ土人ノ市街ニ數症ヲ散發ス後復々卒然再
 起シテ全衢街ニ布蔓セリ千八百三十二年ドクトルバ
 氏ノ記セルニハ巴黎府ニ於テ初頭ヨリ十八日ニシテ其極
 度ニ達シ既ニ該府ノ邊隅ニ亘リ七千人ノ命ヲ殞亡シ又千
 八百十七年ハスチンク侯ノ陣營ニ於テ初起ヨリ五日間ニ
 五千人ヲ斃セリ
 「虎列拉流行ノ消熄」虎列拉病ハ屢急次ニ消退シ時トシテハ
 俄然大氣變化ノ後ニ終ル千八百七十九年ドクトルムニ於テ
 ドクトルホフマクヘルン氏ノ報告セルヲ看ルニ一ノ暴
 劇ナル流行發起シ全ク兵舍内ニノミ局限シ僅ニ十日間ニ
 シテ寡兵ノ一隊及其家族ノ六分ニテ死亡シ后又初メ襲
 來セシ如ク卒然消熄セリ又前ニ載セシ歐洲兵ノ第二番馬

塔喇隊ニハ暑熱鬱蒸ノ候凡一月間該病流行セシニ亦卒
 然消滅ヲ來セリ大風及暴雨ノ后時アリテ卒然消滅ヲ來ス
 日アルハ既ニ示シタリ一般ニ虎列拉病流行ノ衰滅スルハ
 多少漸次ニシテ始メ死亡ノ數ヲ減少シ次ニ較恢復者ノ比
 例ヲ増加シ后竟ニ消失ニ歸ス千八百四十八年及四十九年
 英國ニ於テハ流行ノ減衰ヲ始ムルヨリ其消熄ニ至ルヤ凡
 シ三月間ニ及ビ之ヲ精算スレハ前後無慮十六月間流行セ
 リ「虎列拉病」一時其處ヲ謝去シテ后更ニ回歸スルノ性ア
 リ且初次ニ於ケルカ如ク再來ノ流行モ暴劇ナルヨアリ千
 八百四十八年及四十九年ソノ「タル」ニ於テ十月ヨリ
 一月ヨリ輕微ニ流行シテ后一月間消熄シ更ニ暴劇ニ回
 歸シ又二月間減衰シテ復再ヒ尙ホ劇シク發起セリ凡ソ流

行ハ全國中同時ニ發起スルヲ示シ然レ屢隔絶セル處々ニ於テ同時ニ散發スルヲアリ故ニ千八百四十八年及四十九年ノ流行ハ始メ其發スルヤ依何堡、ソノテラシド及ホンスロ、日ヲ同フセリ又ヤ、パレル及ゴ下ツリニ發起スルヤ同時法ハ虎列拉流行ハ四方凡ソ同時ニ其極度ニ達スルニ性ヲ有スルニ似タリ、パレル日氏以謂ハ其同千八百四十八年及四十九年流行ノ最、極度ニ達シタリ時季ハ大半八月及九月ニ在リ故ニ侵襲セラズカ地ニ百二十六箇所中六十三箇所ニ八月ニ於テ最ニ劇烈シタリ百十八箇所ハ九月ニ甚シ然レ其全數三百二十六所ニ就テ百七十九所ハ以上ノ兩月ニ在リ亦時季ニシテ流行中較僅微ノ極度ヲ見ルヲ示シ尙其時ヲ同クスルニ傾向

アリ千八百四十八年及四十九年ノ流行ニ在テハ四十九年ハ一月ニシテ尋テ一般ニ流行減衰セリ、虎列拉病ハ汎ク四面同一様ニ擴延スルヲナクシテ始メ襲來シタル某地ノ中央ヨリ播延シ屢道路ヲ取リテ地方ヲ陟リ隨テ其部ヲ荒敗スルモノ、如シ時アリテハ仮令其道路ニ中スル某地モ全ク之ヲ免ル、パレル又該病ハ多少歲月ヲ經ルノ后ニ更ニ同一ノ衢街ニ於テ同一ノ家ニ回歸ノ再發スルノ傾向アリ故ニ千八百三十二年劇烈ク苦ミタル某地ハ亦千八百四十八年及四十九年ニモ同一様ニ侵襲セラレ又千八百三十二年初メテ侵襲セラレタル家屋ハ千八百四十八年ニ於テモ亦初メテ此病ヲ生スル所タリ、パレル編者云フ前ニ等シキ景況ハ吾邦ノ流行ニ於テモ目錄シ

「既往の侵襲他日流行の防禦タル状態凡此病タル一回患
 へタルヲ以テ他日其感染ヲ防禦セザルモノ如シ何トナ
 レハ報告上一回以上該病ニ罹リタルノ例鮮シトセズ凡テ
 人民ノ久シク虎列拉菌氣ニ胃觸シテ犯サレザルキハ其
 易感性ヲ減スルモノナリト臆測セシモノアリト雖モ敢テ
 確手タル據アルモノニ非ザルニ似タリ
 「該毒ノ人身ニ侵襲スル道路吾曹ハ未タ其毒性ヲ詳ニスル
 能ハザルヲ以テ其病毒タル如何ノ方法ニ據リテ血液中心
 侵襲スルヲ識ラズト雖モ恐ラクハ呼吸系或ハ腸胃ノ粘膜
 面ヲ通過シテ入ルナルベシ
 「潛匿期」ハ大概太ク短少ナルカ如ク恐クハ二三日又或ハ尙

ホ之ヨリ短暫ナルベシ然レ左ニ揭示スル所ノ虎列拉性下
 利及其他初發ノ全身不和ヲ算入スルトハ較之ヨリ多キ時
 日ナルベシトクトル、ハルリト氏ニ由テ報告セラレ且傳染
 ノ條下ニ説ク所ノ症ニ在テハ潛匿ノ時期タル曾テ四十時
 ヲ超過セザルニ似タリ設シ艦船ノ港ヲ距リテ后數日ヲ閱
 過シテ虎列拉病ヲ發起スルモノハ恐クハ新タニ作爲スル
 原因ニ基クナラン
 「人口ニ比較スル死亡數」ハ每次ノ流行及種々ノ州郡ニ於テ
 差異アリトクトル、ハルリト氏ノ報告ヲ看ルニ千八百四十八
 年及ヒ四十九年英國及威勒士ニ於テハ人口毎一萬人ニ死
 者三十人ノ比ニシテ其死亡數タル各處平等ナラス内地ハ一
 萬人中十七人ニシテ海岸地方ニハ一萬人ニ就テ五十八人

リ而ノ四百零四ノ地方ニハ七人ニシテ他ノ八十五郡ニハ
 更ニ發生スルナシ平方里中人民ノ群聚益盛ナル所ハ死亡
 ノ比較愈大ナリ故ニ平方一里中九百十五人ノ人口中ニハ
 一萬人中六十五人ヲ斃シ二百三十五人ノ人口ナル所ハ一
 萬人中七人トス「井ワルト氏ノ説ニ據ルニ印度ニ在テ歐洲
 兵卒中七年間健康体ニ死者ノ比較年々一萬人ニ就テ七十
 人ニシテ士官ニハ一萬人中十二人ナリ」印度人ノ該病及他
 ノ疾病ニ死スルノ數ヲ究明スルコトヲ得ズ且人民ノ該病ニ
 罹ルノ數ヲ推究スルハ太々難シ仮令該病ニ罹ルモ必々毎
 ニ危険ナルモノニアラザレバ隨テ報告ヲ免ル、モノ多シ
 故ニ軍卒ノ他ハ更ニ據ルベキ報告ナキモノトス「ドクトル、
 井ワルト氏ノ説ニ據ルニ歐洲兵ノ此病ニ感スルヤ兵卒ニ

在テハ歳々一萬人中百七十四人ニシテ士官ニ於テハ七十
 三人ノ比例ナリ但シ印度ニ於テ罹病ノ比較ハ之ヲ土人ニ
 比スレバ歐洲人ニ太々多シ又當時虎列拉委員ノ記載ヲ考
 ルニ土人ノ獄舎ニ在リテ此病ニ罹ルハ殆シク歐洲兵ト同
 等ノ數ナリ
 「虎列拉病ノ蔓延」ハ大緊要ノ件トス先此章ニ於テハ傳染ノ
 論題ヲ講ゼズ唯人類ノ交通ニ由リテ此病ヲ傳播スルノ事
 由ヲ推究スルヲ良シトス蓋シ其交通ニヨリテ該病ヲ蔓延
 セシムルノ證據古來既ニ夥多之ヲ見ルヲ以テ更ニ疑惑ヲ容
 ル、ニ足ラヌ千八百五十四年「ドクトル、ハル」氏ノ印度
 年史ニ載セタルニハ同年八月廿七日始メテ「ゴトウ」氏
 ノ陸軍病院ニ虎列拉病ヲ發現シ后チ幾多ク人民ヲ侵シ

タリ但シ其初患ハゴウウハテノ分隊ヨリ到着セシセボ
 集シタル英兵ノ一人ナリ蓋シ本人ノ出發スル時ニハ
 未ダゴウウハテニ於テ一ノ虎列拉病ナク又到着ノ際ゴ
 ーワルパラフニモナシ然レ四十時前該隊ハ當時虎列拉病
 ノ暴行スルパラスハルリト稱スル地ヲ通過セリ故ニ此
 患者ハ其病種ヲ該地ヨリ將來シタルモノト擬定セラレシ
 此時竟ニ蔓延セシト雖モ格別急速ナラズ蓋シ初頭ゴウワ
 ルパラフニ於テ之ヲ生シタルモノハパラスハルリト通
 過セシ此此地ノ病院ニ同僚ノ病ヲ伺候セシ者ナリト云フ
 千八百四十八年「ツィンク」ニ虎列拉病ノ暴シク
 流行セシ爲メニ之ニ入校セル少年兒ヲ分散セシニ繼テ其
 分散セララル少年中或ハ之ニ罹リ或ハ之ニ死セリ而シ

后其少年ノ接待セラレシ屋舎從前此屋舎及其近ノ寄住人
 中ニ該患ヲ傳染セリ千八百六十一年流行ノ際印度虎列拉
 委員ノ報告ヲ看ルニ千八百五十二年「ゴルハル」及「マオ
 シ」ニ虎列拉病ノ侵入セシトニ關涉シテ著明ノ事故ヲ記シ
 タリ曰ク「マオン」及「英領ゴルハル」ハ「ロヒル」トノ疆
 界ニ於テ全ク喜馬拉山ノ中ニ在リテ一萬二千平方里面ヲ
 覆ヘリ住民甚々篤疎ニシテ往々廣大ノ山林ヲ阻隔シタル
 小邸ヲ撒在セリ但シ該地方タル北方印度ノ平原ヨリハ人
 家ナキ一帯ノ森林トテラキト稱スル沼澤多クシテ殆ント
 寥々タル土地ヲ以テ拒絕セラレタリ而シ其土地ハ大略二
 十里ノ廣キヲ有シテ能ク山中ノ住民ヲ平原ノ人民ヨリ隔
 絶シ其間ノ交通常住甚々疎ニシテ漸ク僅少ノ香遊巡禮或ハ

商估等ノ通行アルヲ爲メニ該地方ニ在テハ尙ホ歐洲ノ如ク虎列拉病ハ一般ニ殆シト全ク流行スルコトナシト雖モ稀ニハ暴シク其人民中ニ擴延スルコトアリ千八百五十二年虎列拉委員長タリシミストルセ、ストラキ、氏ノ自ラ検査セラレタルニ同年ノ初頭テハボル山地平原ヲ阻隔ノクオンニ在ル山麓ニ於テ灌水渠ヲ造成スル業ヲ起始シ數千ノ工夫ヲ近隣山脈ノ諸部ヨリ募集セシニ虎列拉病暴シク其役夫中ニ發シタルヲ以テ各自驚駭シテ皆深山中ノ家郷一般ニ數日ニ遁レタリ蓋シ當時ニ至ル迄未ダ曾テゴルハル及共近隣ノ山中ニハ此病ヲ知ラザリシ以上ノ事實ハモラレタル而ルニ其役夫多クハブハボルノ歸路ニ於テ死亡シ其他ハ家郷ニ達シテ之ニ罹リ尋テ他ノ村民ニ傳播ス

ルモ概シテ該病ヲ麓下ヨリ負來シタル役夫ノ家族ニ殆マリタリ爾后久シク此患者ニ交通スル者ニノミ限局セシト雖モ數週ヲ閱過スルノ后以上交通ノ關係ヲ尋跡スル能ハザルニ至リ竟ニ山中一般ニ流行セリ之ニ由リテ初發ノ患者ヲ細慎検査スルニ曾テ此山谷中ニハブハボルヨリ役夫ノ歸來スル迄ハ更ニ該患ノ現在セザルヤ疑テ容ルヘキニアラズ何トナレハ從來全ク虎列拉病ノ現出セザル地方ニ於テ人民ノ交通ニ由ルノ外更ニ此病ヲ誘導スルカ如ク疑想スベキ事件ヲ檢出スルコトナシ

縱令虎列拉病ハ人民ノ交通ニ由リテ播延セラレ、ヤ信據スベシト雖モ從來更ニ感染セル者ト交通スルノ踪跡ヲ檢究スル克ハザル地方ニ該患ヲ生ズルノ説モ亦駭スベカラ

ザルモノニシテ都府及大工業場等ニ該病ヲ發起スルニ於
 テ最モ勉メテ其原ヲ探究スルモ更ニ從來感染毒ニ胃觸セ
 シコトヲ解明スルハ證ヲ檢出シ能ハザルヲ屢之アリ曾テ蘇
 格蘭ノ西嶋ニ在ルシトキルダニ虎列拉病ノ發現セシハ
 以上ノ確例ナリ該嶋ハ大陸地ヨリ全ク交通ヲ阻絶シ且輸
 入ノ痕跡ナクシテ卒然此病ヲ發現セリ又千八百四十八年
 ドクトル、パイクス氏ハ龍動ニ起リタル初患ノ傳染源ヲ更
 ニ探究シ克ハザリシニ此病ハ龍動ニ起リタル初患ノ傳染源
 「虎列拉病」ノ傳染ハ民ヲ交通ニ由リテ虎列拉病ヲ蔓延セシ
 ムルノ實事ハ竟ニ余輩ヲ誘掖シテ其作為如何ヲ論究セシ
 ムルニ及ビ兼テ虎列拉病傳染ノ論題ニ至ラシメタリ蓋シ
 傳染ニ由リテ此病ノ蔓延スルモノトナスハ感染ニ關セ

ズシテ恐クハ該病ヲ發生スルノ擬說ヲ排斥シナサズ故ニ
 印度ノ醫ハ大概年々歳々恒ニ此病ヲ診療スルモ亦役夫等
 ノ斷ヘズ之ニ接近セルモノモ一般ニ此病ニ罹ルモノ稀少
 ナルヲ以テ竟ニ此病ノ傳染性ヲ有スルコトヲ疑フ然レ或醫
 ハ之ト其說ヲ異ニス其傳染ニ病者直ニ發散スル揮發
 性毒ノ形狀ニ存シ以テ倏忽健康体ニ感傳スルモノナリト
 證セラレタルカ如シ然レ其毒タル或ハ揮發性ニテアズ或
 ハ揮發性トナリ或ハ其有毒ノ性質ヲ發育シ以テ病ヲ感染
 セシムルニ適スルニハ多少時日ヲ要スベキニ種ノ毒物ヲ
 ラザルコトヲ駁スルハ太容易ナラズ凡ソ揮發性ノ
 毒ハ其作用最モ劇烈ナルモノニモテ疾病ニ關シテ最モ危
 險ナルベシ然レニ印度ニ於テハ醫師、看病夫、病院ニ役夫、掃

除夫及他ノ斷ヘズ病者ニ接待スル者ト雖モ肯テ他ノ人民ヨリモ多ク此病ニ犯サル、ニアラザルカ如シ加之此病ハ稀ニ病室ノ臥牀ヨリ臥牀ニ傳播シ或ハ之ニ反シテ倘シ此病ノ病室内ニ發スル時ハ一般ニ隔離シタル座隅ニ傳ニ或ハ他ノ病室ニ發起スルヲ屢目撃セリ且曾テ數年間甲谷他ノ醫學校附属病院ニ兼務シタル醫士ノ説ニ更ニ此病者ニ最モ接近シタル患者ニ播延セシコトヲ認メシコトナシ又躬ヲ經驗セシ所ニ據レハ虎列拉病ノ急速ニ感動セルヤ排泄物ニ由リテ病者ヨリ他人ニ傳播シチカヌモノナリト察知スルニ足ル又ドクトルモルヘツト氏ノ注意ハ傳染作用ニテ病院中ニ虎列拉病ノ傳播セザルヲ説ニ左祖ス以上ノ注意ハ皆細慎シテ三次ボシベトニ行ハレタル流行ニ於テ查檢

セリ佞令同氏ハ確乎タル定説ヲ示シ難シト警戒セシト雖モ其實事ハ凡テ傳染説ヲ扶持セザルモノスト不但シ同氏ノ注意ハ印度ニ於テ躬ヲ病者ニ就テ稽察セラレタル貴重ナル病牀記録上ニ明カナリ「ソルヲ防ル」ハ、マルチン氏ノ記載ニ關スルニ甲谷他ニ於ケル「ヨロピアン」セチラルホスビ「ソル」衣服ヲ蓄藏シ又之ヲ洗濯スル五人ノ婦アリト二十五年間總テ病院ノ衣類ヲ斯ク處置セシ五人ノ虎列拉病ニ罹リシモノナシ又之ト同一様ノ状態ヲ看護夫及掃除夫ニ就テ目撃セリト「又英國ニ於テハ汚穢シタル衣類及牀蓐等ヲ洗フ者モ更ニ他人ノ比例ヨリモ多分ニ此患ニ罹ラザルニ似タリト謂フ較疑フベキ件ナリトドクトルモルヘツト氏ノ報告ニハ以上ノ原由ヨリ此病ニ罹リタル患者ヲ精密ニ查檢セシ

二三十五人中唯七人ハ傳染スルノ説ヲ扶持スルニ似タリ
 ト云フ又千八百四十九年所々ノ大病院ニ於テ虎列拉病者
 ノ汚穢シタル幕布ヲ洗濯セシ者ノ更ニ太クシク之ニ罹ラ
 サリシハ最モ著明ノ事件ナリトス同年ドクトル、ワル、レ
 レウ、^サ氏ノ衛生局ニ報告セルヲ看ルニ汚穢セル幕布ヲ洗
 フカ爲メニ比病ヲ得タルモノナリト報告セラレタル夥多
 ノ濯夫アリ由リテ自ラ之ヲ查檢セシニ其傳染ノ確定ハ誤
 解タルヲ證セリ
 以上論説ニ反對セシ證ハ一ニ前條揭示セシドクトル、バル
 リ、^ト氏ニ依リテ報告セラレタルモノトシ又一ハ千八百六
 十一年檢疫委員ノ報告トス之ニ載スル所ヲ看ルニ當時流
 行ノ際ニ於テハ在院患者ハ他ノ健康人ニ比スレハ此病ニ

罹ルモノ多シトス乃チ病院外ニハ健康人百人ニ就キ虎列
 拉患者四人、七死者二人、九ニシテ患者百人中死亡六十二人、
 七ナリ病院内ニハ健康人百人ニ就キ虎列拉患者十三人、五
 死者十人、六ニシテ病者虎列拉百人中死者七十八人、五ナリ以
 上ノ比例ハ虎列拉流行ニ苦ミタル十三箇所ノ屯營ニ於テ
 皆ナ然リミシトミル及モラルハ尙ホ其比例大ナリ今若
 シ以上ノ兩所ヲ加ヘテ算スルキハ該病ニ罹ルモノ十四人、
 七死亡十一人、六ニ當リ受療者虎列拉ニ罹ルモノ就テハ死亡七
 十九人、二ナリ故ニ該委員ノ檢査ニ據ルキハ入院患者中ニ
 ハ此病ノ劇惡ナルヲ列細繇篤中ノ健康兵ヨリハ判然ニ倍
 ヲ超ヘタリ然ルニ醫師ハ全ク之ヲ免レ又他ノ醫療ヲ介シ
 テ殆シト恒ニ病院ニ寓居スル者及他ノ患者ヨリモ尙ホ親

ク該病者ニ接近スル看護夫ノ如キハ唯僅ニ之ニ罹リ又八月廿四日流行極以來虎列拉病者守衛ノ爲メ日々送ラレタル第三十一番士人歩卒以三十八人中廿八人モ此病ヲ感ゼシモソカシ流行時ニ於テ傳染ト他ニ報告セラレタル流行時ニ在テ病院内ノ傳染ノ差異ト組織アルヲ解明スルハ實ニ容易ニ事件ニアラズ而シテ病院外ト比較シテ斯ク病院内ニ多ク該病ノ蔓延スル所以ヲ解明スルニハ病院自己ノ位置ニ何等ノ事情有ラズ然ラズ又數流行テ病院中ニ發起スル有ルニ似テ今病院ノ内外ニ在テ虎列拉病感受性北較ニ定説ナク要定法ヲシメテ未ダ此病毒ヲ冒觸セシ病者ノ員數尙ホ僅少ナルカ如シ然レバ曾テ某列細綿篤ヨリ呈シタル報告又以テ考フルニハ其差異過度ニ大ナルハ

入院患者ノ數些少ナル院ニ在リ而シテ其數多クシテ百十三人及百十七人ノ病者ヲ有セシ院ノ比例ハ各異ナリ甲ハ列細綿篤ノ列伍ニ在テ就役スル兵ヲ侵シタル員數ノ上ニ位シ乙ハ其數ノ下ニ在リ
曾テ屢死休ヲ剖視シ或ハ腸内ノ諸物ニ就テ種々ノ檢査ヲ行ヒシ醫士ノ未ダ該病ニ罹リタル證ナシ仍テ考フルニ蓋シ感染ヲ屍体ヨリ發生セシトナキカ如シ

「虎列拉毒ノ運輸セラルベキ性」ハドクトル、ケ、マッキンソン氏ノ撰ハレタル一般衛生論書中ニ的例ヲ載セタリ曰ク某列細綿篤アリ田舎ノ河流ヲ下リシキ又某分隊ノ河流ヲ溯ルニ遇ヒ其乗船ヲ買換セシニ病毒船内ニ潛藏シ始テ流行セシ分隊ヲ離レ却テ健康證ヲ持シタル列細綿篤ニ傳染セリ

ト又數日海ニ航ス船中ニ虎列拉病ヲ發生スル者亦該毒
 ノ運輸ニ係ルニ示スニ足然其毒必シモ病者ニ
 據テ運送スルニ輸ラレ非ズ何トナレバ該毒ハ那處ニ在リ
 テモ或ハ諸物ノ面ニ附着シテ運去セラレ或ハ室内ノ壁等
 ニ粘附遺殘シテ何等事物ノ之ヲ觸起センコトヲ虞ツル
 之若シ運動スベキ物質ニ附着セシモ往々遠隔ノ地ニ
 搬去セラレ或ハ人民ノ交通ニ由リテ蔓延スル一ノ便路
 ナルモノアリ然レト雖モ病者ヨリ傳染スベキ排泄物ヲ發
 出スルハ何等ノ期ニ於テスルヲ知ラスト雖モ該毒ノ便中
 ニ存有セラレハモスル信據シタル醫ニ在ラハ必ズ比毒ハ
 米泔汁様便ト共ニ排泄セラレモスルヲ稽察スルナラ
 スト云ハル、其之ヲ、ボツ氏ハ說ニ同氏ハ恢復期ニ於テ感

染スハキチヲ指示スルノ一症ヲ見タリト曾テニ貴人アリ
 龍動ニ於テ虎列拉病ニ罹リ恢復期ヲ初頭ゾカス際洋ルニ
 歸リ慈母ニ看護セラレゾカスト、爾中高燥開豁ニシテ
 空氣疏通ノ佳良ナル住居ニ占メ三四日ヲ經テ他ノ阿
 嬢アリ更ニ虎列拉ニ罹リテ死セリ其時ニ方該病ハタリ
 ト、爾中隔離シタル地方ニ於テハ三三人ノ該病ヲ治ス雖
 モ更ニ近傍ニ此病ヲ傳下云々、
 近頃クワフトシテ下カ、
 物ヲ媒介ヲ以テ虎列拉病ノ傳染スル說ニ左袒セリ其陳說
 左ノ如シ(第一)該病ハ必ズ傳染ヲ以テ播延スル事ナリ(第
 二)該毒ハ特ニ患者ノ腸管ヨリ排泄スル液物ヲ以テ播衍ス
 同氏ノ信用ニ下カ、下カ、
 スル所ト信

ハ該毒ハ人身中ニ於テ速ニ蕃殖セラレ所謂米泔汁様ノ排泄物ニハ斯ク蕃殖セル物質ヲ有シテ感傳ノ原トナルベシ故ニ一人ノ虎列拉患者アルニキハ其毒ヲ以テ夥多ノ人民ニ該病ヲ染移スルニ足ルモノナリト又同氏ノ謂ラク該毒ハ左ノ主タル方法ヲ以テ傳播スト即チ(第一)看護者ノ汚穢セル手足ハ恐クハ家族間ニ此病ヲ相通スル太々普通ノ方法トス(第二)米泔汁様排泄物ニ汚染シタル蓐牀布、襯衣及他ノ器具(第三)地面ノ媒介ニ由ル何トナレハ排泄物ハ常ニ液体ナルヲ以テ必ズ地面ニ其多分ヲ滲淫スレハナリト(第四)トクトル、ドブル、ホッド氏ノ考定ニ隨ヘハ該毒ハ以上ノ如ク沈積シタル面ヨリ或ハ自ラ蒸發ニ伴フテ氣中ニ揮散スルアリ或ハ飲水中ニ滲淫シ或ハ乾涸体ニ變化スルノ后極メ

テ幻微ナル塵埃ニ形狀トナリテ大氣中ニ飛揚シ以テ四方ニ蔓延スルモノトナセリ故ニ同氏ハ該病ハ地質ヲ汚染スル疾病ナリト稽察ニ及又同氏ノ辨論セラルニハ此毒タル乾涸ノ形狀トナレバハ菌筭或ハ水蟲ニ如ク數月或ハ數年ノ間蓄積セラレ倘シ好機會ニ遭フキハ條々活動シテ人身ノ機關中ニ受容セラレ太々短暂ナル潛匿期ノ后該病ヲ發生シ極メテ急次ニ蕃殖シテ以テ廣大ナル播衍ヲナスニ足ルベキ性ヲ具備スルモノナリ然レ之ニ反シテ設ク機會ニ遇セザルキハ其胚種タル急ニ腐敗シテ消盡セラレ斯クシテ流行熄止スルコトアリト乃チ之ヲ單簡ニ論ズルキハ該毒タル生活体中ニ甦生スベキ不可測力ヲ以テ恒久睡着狀ヲ生テ活ヲ備具スルコトヲ得ベク復々恰好ノ機會ニ遇フキハ急速

ニ腐壞スベキモノト想像セラレタリ以上ノ鑒定ハ太々簡
易シモノニシテ決シテ汎ク流行病ノ比喻ヲ越スヲ探究シ
タルモノニアラズト雖モ大ニ英國ニ在テ貴重セラレ又大
ニ確證ヲ以テ扶持セラレタリ曾テ虎列拉病ノ暴シク工業
場ノ一側ヲノミ侵セシトアリ蓋シ其所タル男女相偕ニ同
一ノ屋梁ニ力役シ纒ニ一壁ヲ以テ阻隔シ同一様ノ空氣ヲ
嘔噓シ同一般ノ食ヲ食シ同一井ノ水ヲ飲ミ啻ニ相異ナル
所ハ男女ノ間廁房ヲ別タルノミナルカ故ニ初頭發セシ病
人ノ排泄物ヲ棄擲シテ爲メニ其廁房ノ一ヲ汚穢シタルヲ
以テ男女二列ノ間罹病性ヲ異ニスルノ理ヲ解明スルヲ
得ベシ

ヤ病者ヨリ發散セル揮發蒸發氣斯ノ作爲ニ據ルヨリハ太
々異ナル所ノ形狀ニ由リテ傳播スルモノトス然ルモハ果
シテ通常一般ニ認得セラレタル傳染性毒トナスノ意見ヨ
リモ尙ホ恰當ノ方法ヲ以テ其病ノ播衍ヲ解明スルヲ得
ベシ今同氏ノ引證セラレタル實事ヲ稽察スルモハ以上ノ
警戒スベキ件ヲ怠リテ之ヲ實地上ニ處置セザルハ乃チ錯
誤ナリト云フベシ然モ虎列拉病特異ノ誘因ハ啻ニ其排泄
物中ニノミ認得セラレベキモノトシテ以上ノ説ヲ保證セ
ント欲スルニハ尙ホ夥多ノ證據ヲ得ズンハアルベカラズ
但シ此論説ヲ以テ必ズ每次該病ノ蔓延セル現像ヲ盡ク解
明スルハ難カルベシ譬ハロセル氏ノ記載セラレタル第二
番「マドラス、ヨウロビヤ」卒伍ノ中迅疾ナル該病ノ蔓延

前ニ揭ケタル千八百四十六年キルラッキニ、千八百三十二年巴黎ニ於ケル急次ノ蔓延及セムソノ氏ノ報告ニ書セル一種奇異ノ流行アリ某カストンメシト隊伍中未ダ曾テ該病ノ萌起アラザリシニ其列細綿篤ニ在テ一夜倏然十人ヲ侵シテ各斃レタリ然ル后其列伍中更ニ一人ノ新患ヲ生ゼサリシ是ヲ以テ以上ノ十人ノ至軍中ノ易感性ノ人ナリト擬定スルヲ得ズ然レバ何等ノ論說ニ據ルモ此發起ヲ解明スルハ困難ナリ故ニ爾他ノ論說ニ據リテ之ヲ解明スルノ困難ナルヨリモ更ニドクトル、ボッソ氏ノ說ニ據リテ解明スルノ肯テ容易ナルニテ又流行ノ衰退期ニ於テ較テ虎列拉病ノ輕易ノ比例ニハ死亡ノナル所以ヲ説明スル能ハザルカ如シ某醫ニ流行益増進スルハ其毒益増量

シテ益濃厚トナリ又益猖獗トナルベキモノト思想スト雖モ肯テ否ラズ且ツ人民之ニ罹ルモノ夥多ナルヲ以テ世上易感性ノモノハ尙ホ非常ニ遺餘スルニ似タリ然レ其病勢較輕易トナル又察スルニ病毒ノ勢ハ易感性人ノ全ク滅絶ニ至ル迄ハ斷ヘズ増進スベキモノト稽認セラル、ヲ以テ虎列拉病種ノ腐壞スル論說ヨリハ更ニ他ノ解明ヲ要スルニ似タリ蓋シ虎列拉病流行ノ廣大ナル地面上ニ擴延スルノ方正ニシテ順序アルト其極期及衰退期ニ達スルノ四方同時ナルヲ以テ考ルハ或ル定規ノ存スル有ルニ據ルモノニシテ嘗ニ其蔓延ハ排泄物傳染ノ偶然的機會ニノミ屬セザルヲ示スニ似タリ而シテ多ク虎列拉症ヲ診セシ醫士ハ皆ナ何時ノ流行ニ在リテモ新鮮ナル虎列拉排泄物ニハ

甚キ毒力ヲ有スルモノナリト觀察セザルカ如シ又毎
 流行ノ際ニハ牀蓐、蓐布、看護夫ノ手掌及牀板等ノ恒ニ排泄
 物ヲ以テ染穢セラル、モ毎次新タニ毛布、牀蓐等ヲ備具ス
 ル能ハザルヲ以テ排泄物ヨリ該毒ヲ播衍セシムベキ機會
 ヲ屢目撃スト雖モ未タ病室内ニ劇シク虎列拉病ノ蔓延ス
 ルヲ視ザリシ傳染篇中ニ揭若シ新鮮虎列拉排泄物ノ斯ク
 劇惡ナルモノト看做スルハ虎列拉病者ノ便器ハ次々入來
 スル病者ノ爲メニ虎列拉ノ病種タルベシト雖モ親シク注
 意セラレタル所ニ據レハ更ニ斯ク如キ成果ヲ見ズ又日常
 病室内ヲ掃除シ恒ニ百般ノ排泄物ヲ除去スルコトヲ掌ル掃
 除夫モ敢テ他人ノ比例ヲ超ヘテ此病ニ懼ルニアラズ然モ
 腐敗セル虎列拉排泄物ハペーテンコッヘル氏ノ擬定セルカ如

ク較多ク傷害ヲナスコトアリ然モ若シ下クトル、ホヅ氏ノ擬
 定セシ如ク其毒タル急次ニ蕃殖シ迅速ニ病毒ノ播衍ノ種々
 行ニ如クテ在テ來スニ足ルモノトナスモハ病室内ニ於テモ
 一様ニ強方ナルベシ印度ニ於テ濕潤ノ候虎列拉病ノ蔓延
 セシ方法ハ排泄物ニ由リテ播衍スルノ説ニ相反スルカ如
 シ蓋シ強風アリテ乾燥セル季ニハ虎列拉塵埃ノ非常ニ遠
 隔セル地方ニ播延スルコトアリト預想スルハ容易ナリト雖
 モ熱帶地方及之ニ境スル近邦ノ雨中ニハ此ノ如キ蔓延ノ
 方法ヲ尋跡スル能ハス都テ土地ヲ汚染スル物質ハ必ズ暴
 雨英國ニ在リテハニ由リテ洗除セラレベシ然レテ某醫ノ
 想像セシ如ク其物質稀釋セラレテ澗流及河流ニ入り竟ニ
 洪河ニ掃盡セラルベシ時トシテ然モ其物質溜溜中ニ溢流ス

ルコアリ然レオッアル、インギヤノ諸部ニ於テハ飲水ハ恒ニ
 深井ヨリ資給ス而シテ多ク滯溜ヲ設クル地殊ニヒンニ於テ
 ハ注意シテ之ヲ清潔ニ保存スルニ汲々タリ故ニ其滯溜ハ
 數汚穢セラレベシト擬定セラレ、カ如ク然ルニアラズ又
 北西洲ニ在リテ最モ猖獗ナル流行ノ發起スルハ濕雨ノ候
 ニ在リタリ設令虎列拉ノ特異毒ハ米泔汁樣液中ニ現存セ
 ザルコアリト雖モドクトール、ボツツ氏ハ自家ノ説ヲ扶持セン
 カ爲メニ判然タル證據ヲ引證シ且之ニ附會セシ實事ノ許
 多之アルコヲ示セリ故ニ先ツ方今ノ智識ニ由リテ論ズル
 事ハ虎列拉患者ノ排泄物ハ某ノ状態ヲ以テ虎列拉病播衍
 上ニ感動アルモノト認可セザルベカラズ之ニ加ルニ虎列
 拉ノ毒タル特異ノ病種ハ單ニ米泔汁樣便中ニ含有セラレ

ハモノトナス時ハ其人体中ニ蕃殖スルヲ證スベキ説明ヲ
 要スル數點アリ其便タル直達ニ毒ノ原ヲ示シ且其將ク之
 ハ蕃殖セシムルニ備ヘタル同性ノ培養地タルカ如シ蓋シ
 ドクトール、ドブルユ、ボツツ氏ノ意見ヲ以テ正確ノモノトナス
 事ハ人族ヲ爲メニ幸福ニシテ此畏懼スベキ流行疫ノ播衍
 ヲ預防スルハ準リニ容易ノ事件タルベシ
 今虎列拉病毒ノ飲水ニ達スル那麼ノ方法ニ據ルニ那邊ヨ
 リ來ルヤ又其毒ハ何物タルヤヲ察スルニ虎列拉病毒ハ虎
 列拉病者ノ大便中ニ含有セラレ、モノニマテ尙少量ノ米
 泔汁樣排泄物ヲ以テ穢染セラレタル飲水ハ該病ヲ生スヘ
 キモノタルコヲ指示スル種々ノ證據アリ乃チ曾テ龍動府
 ニ在テ東部龍動社ノ給セシ飲水ノ如キハ隱渠ノシヨエヨリ

汚染セラレ然シテ其隠渠ハ該病者ノ排泄物ヲ含有シタル
 ノ證アリ仍テ該社ノ水ヲ飲用セシ部ニ於テ此病流行アリ
 然レ亦之ニ反ソ新タニ利シタル便ハ格別ニ毒勢甚シカラ
 サルヲ信スヘキ理アリ之ヲ證シタルハプロヘツル、シル
 ス氏ニソ其後英國ノドクトル、サンデルソン氏ニ試ミラレ
 タリ其精密ナル成績ヲ得テタル經驗ハ豚鼠ニ試ミラレ
 タルモノニソ乃チ虎列拉排泄物ヲ以テ豚鼠ヲ育フキハ疾
 ニ危険ニ陥リ其徵候及死后剖檢微ハ人体ノ虎列拉病ニ太
 タ密似シタル兆候ヲ呈シ其最モ類似セル所ノ主徵ハ疾病
 ノ急速ナルト諸症ノ苛劇ナルト体温ノ著シク下降スルト
 シテハ攝氏ノ二ト「バクテリヤ」及他ノ下等有鬮動物又加ル
 ニ利多ノ剝脫細胞ヲ含有セル稀薄液ノ腸中ニ蓄積スルト

兼テ肛門ヨリ滑軟ノ液便ヲ排泄スル等之ナリドクトル、サ
 ンデルソン氏ノ行フタル方法ハ新タニ排泄シタル虎列拉
 排泄物或ハ該病ニ死シタル体ノ腸内ニ蓄藏セル液中ニ紙
 片ヲ蘸漬シ之ニ粘附シタル固形物ノ量ヲ檢センカ爲ニ此
 紙ヲ一手方應埵ノ大ニ剪截シ又之ヲ豚脂中ニ蘸シテ豚鼠
 ニ食セシメタルニ豚鼠ハ嗜ンテ之ヲ食シタリ其結果ヲ檢
 スルニ利シテ后二十四時以内乃チ一日間放置シタル便ニ
 蘸シタルモノヲ食シタル豚鼠ハ百匹中十一匹ヲ感染シ通
 利后第二日ノ便ヲ以テ製シタルモノニテ試ミタルモノハ
 三十六第三日ノ便ニテ檢スルモノハ各個皆之ヲ感染シ第
 此四日ノモノハ七十一第五日ノ便ニ在テハ四十ナレ第
 六日后ノ便ヲ以テ試ミタルモノハ更ニ感染スルコトナシ

經驗ニ由リテ察スルニ虎列拉排泄物モ新鮮ナルハ其毒勢肯テ有力ノモノナラザルモノナレニ漸次第三日ニ至ル迄増盛シ第四五日ニ於テ減損シ其后ハ全く特異ノ毒勢ヲ失フカ如シ又以上ノ方法ヲ以テ感染シタル豚鼠ヨリ排泄シタル便ヲ以テ之ヲ他ノ豚鼠ニ試ミタルニ恰モ真性虎列拉毒ノ豚鼠ニ就テ生シタル成績ト同一般ノ結果ヲ得タリ又同氏ハ以上ノ他季候九月ニ際シ同一様ノ試験ヲ行フタレニ温度下降ノ時ナルカ爲ニ其成績ヲ錯リタルト云フ「虎列拉病」ノクリプトガミック^ト花^ノ種類ニシテ漢人之ヲ隱花^的ト^ト說^ハ化學^的の上^ノ大氣^分拆^ハ更ニ虎列拉病ノ原ヲ明カナラシムル所ナシ然レバ^ハ氏^ノ法^ノ如ク濾過シタル大氣^ヲ鄭重ニ顯微鏡下ニ照檢スルヲ以テ大ニ長績ヲ得ル

スリドクトル、ゴトテル氏ハ該病ノクリプトガミック^ト原^ヲ左袒セリドクトル、ブルツン氏ハ虎列拉患者ノ寓スル室ヨリ採リタル大氣ヲ注意シテ試檢セルニ中ニドクトル、スツ^ト井^ノ氏及同氏ノ糞汁排泄物中ニ檢出セシモノニ類似シタル所ノ某体ヲ發見シ又ドクトル、ドブル^ニ、ボツ^ト氏ハ虎列拉毒ニ感染セラレタル地方ノ水中ニモ之ヲ檢出セリ其后ニ至リミストル、ボス^ト氏ハ之ヲ以テ澱粉ノ顆粒及一種^ノオ^ル種^ト或ハ「アラ^ト」^ト共ニ極微ナリト觀察セリミストル、ラ^ト井^ト子^ト氏^トドクトル、ア^トル、デ^ト、ソム^トン^ト氏及ドクトル、ハ^トサル^ト氏ハ千八百五十三年及五十四年ノ流行ニ於テ大氣ヲ試檢セリ飯食以上ノ注意家ハ饒多ニ有機ノ物形ヲ檢出セシト雖^レ其中何等特別ニ虎列拉病原タルベキモノヲ檢出シ得サ

リシ然リ、「ヒ」ク「ク」ア「ク」ア「ク」ニ於テ「シ」ク説チ扶持スベシ、「ク」モ多ク
 シテ、概近バステニル氏、ハ行ハシ、然ル吟味ヨ、大ニ利益ヲ
 添ヘタリ、就中有要ナル知識、印度ニ在テ流行ノ存否、問
 ハズ行ハレタル査檢ニ由リテ得ラレタリ、以上流行ノ際注
 目セラルル現像ノ多クハ、他ノ論説ヲ以テ解明スルヨリハ
 實カニ能ク誘因ノ擬定ヲ解明スルコトヲ得ベシ、蓋シ其誘因
 タルモノハ、大氣ノ運動ニ隨シテ動搖スル所以有機小体ノ
 塊ニシテ、恰當ノ巢（厠房ノ空氣、腐敗物ノ揮發氣ニ富ミタル
テ不潔ノ空氣ニ遇フニ、忽チ蕃殖スルコトヲ得ルモノトス、加
之ナラス虎列拉排泄物中ニハ、不可思議ノ蕃殖ヲナシ爲メ
ニ其便ニ感染性ヲ賦與シ能ク、如シキニシテ、
人民ノ交通ノ直達ニ大氣ヲ要シテ、働ク瓦私狀揮散物ニ因ル播衍

或由ハ虎列拉排泄物ニ由テ虎列拉病ノ播延スルモノナリ
 ト之ヲ推過スルモ、尙ホ夫ノ一某處ニ此病ヲ發生シテ、竟ニ
 全邦ニ播延スルノ實事ヲ全ク解明スルコトヲ得ズ、今之ヲ單
 簡ニ論ズルハ、尙ホ虎列拉病ハ、或ハ病者或ハ保温物或ハ
 虎列拉排泄物等ニ何等ノ尋跡スルキ關涉ナクシテ、發起ス
 ベキモノタルコトヲ揭示スル實事ノ解明ヲ要スルモノナリ
 其毒タル全邦ニ擴延スル雲霧或ハ「ミヤスマ」ナリ、上擬定ス
 ルモ、彼一種奇異ニ某地ニ限界ヲ或ハ一種特異ニ道路ヲ取
 リ、某地ハ荒蕪セズニ過キ、或ハ斯ク保存シタル地方ニ流行セ
 方ヲ超ヘテ他ノ地方ニ暴行スル等ノ現像ヲ充分ニ解明ス
 ルモノトナシ難シ故ニ、唯此猛惡奇怪ナル作用ヲ解明シ能
 フニキ方法ハ、其毒タル某物ノ雲霧細菌及ハ水蟲（水ノアヒ）

ノ雲霧ニシテ大氣ノ流動ニ由リテ其蔓延ヲ限局セラレ時
 アリテ壓搾セラレテ縦形ヲナシ而シテ單ニ薄線トナリ或ハ
 帶狀層トナリテ地面ニ達シ或ハ大氣ノ上昇ニ隨ツテ升揚
 セラレ爲メニ遙ニ高ク某所ノ上ヲ掠過スルノ擬定トス然
 レ仮令此物タル大氣ノ衝進ニ隨フベキ有機小体ノ一塊ヲ
 見下允可スベキモ未タ曾テ斯ノ如キ有機小体ノ諦認セラ
 レタルナリ且該病ノ強烈ナル吹風ニ逆ラテ進行スルハ
 此説ニ相反スルカ如シ蓋シ此特異ノ原因ハ或ハ外ニ生シ
 空氣中ニ飄揚シ某疆ニ達シ而シテ后テ自ラ際限ヲク蕃殖
 セル單純ニ物体ナリト觀察シ或ハ局部ニ發育シタル病種
 ニテ幾許地面ヲ局ニ播延スルモノナリト看做スルハ誤謬
 ナリト云ハルニ歎ハ又外ヨリ來ル「ミヤス」ニスラズ又内ニ

生ズル「ミヤス」ニ「ア」ラズシテ獨リ一種奇異ノ毒分ヲ有ス
 然レモ「ミヤス」ノ擬定スルハ較實事ニ一致シ充バザル歟或ハ
 又「ミヤス」ハ氣中ニ産スル物質ニシテ乃チ外ヨリ來ル成分又某
 方尙「ミヤス」變化ヲ受タル物質トシ一ハ或ハ局處ニ元質ニ
 添テ互ニ親和共合スルニ非レハ孰レモ獨立ニ活動スル充
 バザル所ノ二物質ヲ要シ得ザル歟彼一種特異ノ團氣ハ這
 處那邊ヲ掃去シ而シテ其毒ヲ釀成スルヤ必ズ他ニ一種特異
 ノ物質ト邂逅スルニ非ズニ在リ蓋シ虎列拉排泄物ハ專テ
 其一種特異ナル局部ニ在リシ者ニシテ生殖スル地ナルベシ
 虎列拉病流行ヲ支配スルハ毎ニ一般ニテ法則アリテ
 存スルニ似タリ故ニ虎列拉排泄物ヨリシテ數傳染來ス
 一アリト雖モ尙ホ其他必ズ何等事物ノ存セズシハアル

カラス又傳染病ハ仮令同一ノ地方ニテモ毎時流行スルモ
 之ニ非スロトエル、ベシカニ於テハ毎歲種痘醫ノ巡回シ
 テ種痘ヲ行フアリ爲メニ痘毒ノ蔓延スルヤ稀有ニシテ數
 年間平易ニ經過シ更ニ制伏シ難キ播延ヲ來サズルモ時ト
 シテハ甚シキ流行ヲ將來シテ全州ニ布蔓スルトアリ然リ
 ト雖モ其流行年モ亦更ニ至年ト異ナル事情ノ發見セラル
 ヲナシ乃チ同一様ノ人民同一般ノ風俗同一形ノ地方同一
 様ノ清潔或ハ同一様ノ不潔ナリ而シテ始終季候ニ該毒アリ
 又始終季候ニ易感性ノ人アリ然ルニ何カ故ニ斯ク其成果
 ヲ異ニスルヤ蓋シ稠密痘ノ時ニ在リテ生シタル毒分ノ多
 寡ハ單ニ此差異ヲ生ズルモノナリト擬定セラレザルカ倘
 シ之ヲ以テ此差異ヲ生ズルモノトナスモ何カ故ニ某年ニ

ハ皆チ稠密痘ニシテ他年ニハ撒在痘ヲ流行セシムル歟又
 何カ故ニ種痘毒ハ平年ニ惡性ノ流行ニハ斯ク其毒勢ノ限局
 セラル、歟倘シ虎列拉排泄物中ニ毒ノ存スル者トナスハ
 其毒ト虎列拉流行ニ關係スルヤ恰モ健康年ニ痘瘡ノ接種
 毒ト非常年ニ惡性流行ノ壞滅性流行ニ對シテ有スル關係ト同
 一様ノ關係ヲ有スルナルベシ乃チ某ノ事情ニ邂逅スルキ
 ハ十分ノ理由ヲホスモノトス但シ之ヲ以テ一已獨立ノ原
 トナシ難シ
 設令方今ニ於テ未ダ虎列拉病誘因ノ何物タルヤチ詳悉ス
 ル能ハザルハ實ニ懺悔セザルベカラズト雖モ肯テ其法則
 ノ一二ヲ領解セザルニ及ズ夫ノ傳染ニ據ラズシテ遠ク
 四方ニ蔓延スルノ説ハ擯斥スヘカラズ然レ又某ノ方便ニ

由來テハ往々社會ノ交際ヲ以テ播延シ得ルモノナリ。其認
 可セザルベカラズ蓋シ以上ノ説ハ他ノ傳染説ニ據ヨリハ
 ドクトル、トブル、ホツツ氏ノ意見ヲ以テ解スルヲ較恰當
 ナリトス。素因ハ感動ハ確實ニモシニ其感動タル之ヲ制
 スルキハ必ず其勢力ヲ減殺スルヲ得ベキハ疑ヲ容ルヘ
 キニ非ラズ。方今印度ニ於テ陸軍ノ衛生事務ヲ擔任スル委
 員ハ德通ニ由リテ恒ニ印度ニ設成セラレタル衛生局ハ後
 來大ニ虎列拉病ノ死血數ヲ減少セシメルノ真績ヲ來スナ
 ズ。其徵候ハ、（此處ニハ、
 虎列拉病ノ徵候ハ、
 喉痛、
 腹痛、
 嘔吐、
 下痢、
 等ノ徵候ヲ呈スルモノニシテ、
 今左章ニ掲クル症狀ハ則チ尋常
 徴候ヲ呈スルモノニシテ、
 今左章ニ掲クル症狀ハ則チ尋常
 都テ虎列拉病ノ標準トナスベキ症ニ在テハ判然較著ナリ
 徴候ヲ呈スルモノニシテ、今左章ニ掲クル症狀ハ則チ尋常

一船ノ流行虎列拉病ニ恰當スルモノトス。凡ソ襲來ノ始ニ
 方ツテ最も著明ノ徵候ハ胃腸及腸管ノ不和ニシテ急次ニ必
 左ノ順序ヲ逐ニ血行系呼吸系、筋肉系及神経系ヲ逐フテ侵
 襲ス。劇症ハ尋テ暴シク百体ノ生活機能ヲ抑壓シ數死ヲ招
 來ス。蓋シ此諸徵ハ自然ニ襲來、發生、虛脱及反應ト稱セラレ
 タル諸期ニ分別スルヲ得ベシ。
 「襲來期」ハ特ニ著明ノ徵候ヲ呈セサルモノナレトモ一般ニ前
 驅セル腸管不和ノ徵アリ。其他時トシテハ較著ノ症ニ達ス
 ルル前數時（加之日）間病者躬ラ感覺スベキ前驅徵ノ存在
 スノモノナシトセストウニング氏、アンチトリ氏、オルト
 シ氏及爾他ノ數輩ハ前驅徵中ニ倦怠、心下壓重、精神抑鬱、顔
 色蒼白、憂鬱及悲歎ノ容貌、疲憊ノ感覺、眩暈、耳鳴、頭痛、顫振及

衰弱ノ感覺等ヲ算入セリアンチスリ氏ハ某患者ノ自ラ感
 得セシ所チ外科醫ミストル、コルレギ一氏ニ語リシ其言ニ
 曰ク「余ハ既ニ業ヲ探ル克ハザルニ至レリ然レモ何カ故タ
 ルヲ知ラズ管ニ微々胃ニ疼痛ヲ覺ヘ腸内雷鳴ヲ感スルノ
 ミ」トミストル、コルレギ一氏ノ説ニ據レハ溜息、疝氣、及淹悶
 等以上ノ徵ニ伴フト云ヘリアンチスリ一氏ハ曾テ某患者
 ノ容貌ヲ望認シテ虎列拉病ノ既ニ發センコトヲ知シ病ニ
 能ク之ニ注目セルニ擬定后九時間ヲ經テ竟ニ吐瀉、掣急等
 ヲ發起セリ都テ虎列拉流行ノ際ハ妄想及恐怖等ノ行ハル
 ベキ者トナスモ必ス神経系ノ前驅不和徵ヲ發スル者ナレ
 ハ須ク忽ニスベカラズ然リト雖モ肯テ每症必シモ此警報
 ノ發現スルニアラザレハ又預メ之ヲ推察セズンハアラズ

先ツ虎列拉病流行ノ間醫療ノ加フベキ前驅徵ハ下利症ニ
 ヲ屢俄然瀉下、吐逆等ヲ以テ始ムルモノアリト雖モ多クハ
 眞然全發スルニ先ツテ數日或ハ間腸管ノ弛縱アリ大便ノ
 形狀水様或ハ半水様ニシテ其色時アリテ赤ハ鉛白トナリ或ハ
 否ラズ而シテ二十四時間三、四回更衣スルヲ常トナスモ或ハ
 尙ホ之ヨリ頻數ニシテ恐クハ絞痛ヲ兼テ時トシテハ虚憊
 感ヲ伴フコトアリ凡ソ虎列拉流行時ニ在テハ大ニ下利症
 ノ傾向アリ、仮令某症ニ在テハ無害ニ經過スルモノアリト
 雖モ亦往々虎列拉病ニ轉移スルモノアリ此等ノ下利ヲ抑
 止スルノ切要ナルハ能ク治療家ノ銘肝スベキ件トス
 「發育期」泄瀉期一般ノ注意ニ隨ヘハ此期ノ發スルヤ早晨瀉下
 ナリ以テ始マリ吐逆ハ較之ニ後レテ來リ其泄瀉ハ多量ニシ

テ液体ナリ一般ニ初頭ノ便ハ常ニ腸中ニ蓄フル物質ヨリ
 ナリテ多量ノ液体ヲ混シ屢シ患者ノ懇フル所ヲ聞クニ大便
 暴ニ肛門ヨリ噴射スト云フ其量極メテ大ニシテ間液量數
 巴(或ハ數コイルトヲ瀉スル迄尙ホ厠房ニ在ルモノアリ通
 例泄瀉反復頻數ニシテ倏チ虚憊ノ感ヲ來シ病者ハ再ビ病
 牀ニ就クヲ以テ大ニ歡喜ノ狀アリ此ノ如キ多量ナル水様
 ノ洩瀉ハ乃チ虎列拉病初發ヲ徵スルモノニシテ多クハ疼
 痛ヲ欠如スルモノナリト雖モ每症必シモ然ルニアラズ故
 ニ扭痛ヲ欠如スルモノヲ診シ爲メニ虎列拉病ニアラズト
 視察スルコトヲ得ズ蓋シ其量太ク夥多ナルヲ以テ二三時ニ
 シテ殆ト通常大便器ヲ盈滿スルニ及テ而シ初頭瀉スル
 便ノ他ハ薄濁色或ハ鉛白灰色ヲ常トス但シ蓄積セル便ニ

微々色彩ヲ賦スルカ爲メニ該症ヲ疑惑ヲナスベカラズ何
 トナレハ初頭瀉下シタル便ヲ投棄スルモ能ク之ヲ洗滌ス
 ルニアラザレハ尋テ通シタル便ヲ染ルニ足ルヲ糞質ヲ殘
 スモノナリ大便ノ分量及形狀ト脈搏上ノ影響ハ其色彩ヨ
 リハ復ニ切要ノ件ナリ米泔汁樣便トハ初頭兩三回瀉下セ
 シ后チ更ニ別個ニ受容シタル純然諸物ヲ混セザル便ヲ名
 クルモノナリ其便タル實ニ米ヲ煮沸シタル液ニ密似スル
 モノニシテ稀薄、鉛白、微々曇暗或ハ僅ニ溷濁セル液ナリ之
 チ放定スルトハ恰モ久シク煮沸シ壞碎セル米粒ノ微細ナ
 ル片狀分子ヲ如キモノヲ沈澱ス又稀ニハ泄瀉期ニ在テ微
 白色ヲナシ或ハ略乳汁樣ヲナシ又ハ之ト前ニ掲ケタル糞
 色ノ間ニ變化スル色彩ヲ賦スルコトアリ一般ニ泄瀉ハ吐逆

ニ前驅スルモノナリト雖モ亦之ニ伴フテ發スルモノアリ
 吐出シタル液ヲ吐出スル固形物ト混淆セザルモハ清
 水様ニシテ一巴以上ヲ吐スルアリ通常之ヲ吐スルニ苦惱ヲ
 伴フ都テ吐逆ハ泄瀉ニ比スレハ暴劇ナラス往々太々輕微
 ニシテ不齊ノ時間ヲ逐フテ來リ容易ニ藥液或飲液ノ嚥下
 ヲ以テ誘起セラル通例米泔汁様便ヲ瀉スルモニ急ヲ始
 ト雖モ間之ニ前驅シテ來ルコトアリ其變急多クハ指趾、腓腸、
 股ニ現レ又時トシテハ肚腹ニ生シ屢次期虛脫ヲ超ヘテ持
 久ス吐瀉漸ク基始スルモ先或ハ之ニ及ビ容貌變易シ稍鉛
 色ヲ呈シ肌表ニ褶皺ヲ生ズル傾向ヲ有シ容貌石ノ如ク眼
 相睽々トシテ毛細管ノ循環遲慢ス斯ク相貌ノ變スルモハ
 患者尙ホ未タ何等ノ症狀ヲ惹ヘザルモ現令數時間既ニ該

病本然ノ性質ヲ指示シタルモノトス仮令容貌ノ狀態那耶
 ノ變化ヲ來スニ關セス尙シ吐瀉頻數ナルモハ神思抑鬱ノ
 諸徵ヲ生シ脈搏力ヲ失シ半實ノ性ヲ損シ肌表ノ溫度下降
 ス而シテ泄瀉ノ初頭ヨリ六七時或ハ之ヨリ早クニシテ脈搏微細系
 ノ如クニシテ弱ク或ハ往々數時間ニ腕關節部ヨリ全ク消
 滅スルアリ又時アリテハ能ク判然發育セル症モ較輕易ノ
 症タルモ決シテ腕關節部ニ於テ全ク觸知セラレザルニ
 至ルモノナシ蓋シ該時期ハ最モ醫ニ一大緊要ノ時ナレハ
 須ク焦思服膺シテ時々脈力或ハ凋衰ヲ來ス歟或ハ依然タ
 ル歟或ハ恢復スル歟ヲ察セズンハアルヘカラス蓋シ脈搏
 ノ依然トシテ維持セルハ該期ノ幸福ナル結果ヲ指示シ尙
 其力漸ク消滅セルモハ次期虛脫ヲ終ルコトヲ反應ノ最大

危險ヲ預メトスルニ足ル某症一在テハ數時間稍諸症ノ進退アリト雖モ到底諸徵不幸ニ變シテ血行益虧損シ容貌枯槁体温愈減損シテ虛憊劇甚ナルモハ乃チ病者虛脫期ニ轉移スト云フ

(虛脫期) 寒慄ハ前期ニ比スレバ危險尙ホ甚ク大ナリ該期ニ至リテハ胃腸ノ排泄益數ヲ減シテ其量モ亦減少トナリ一般ニ洩瀉中液分ヲ減却シ時トシテハ每行尙ホ數汚テ瀉スルモノアリト雖モ多クハ唯僅微ノ清液ニ粘膠ナル粘液樣ノ細片或ハ塊混ズ胃ハ往々尙ホ暴劇ニ憤勵スルモノアリト雖モ吐出物ノ量ハ減少ス虛脫劇甚ノ度ニ達スルモハ患者恰モ屍體ニ類似スル狀態ヲナシ最モ抑鬱ヲ極ム尙シ此期ノ充分ニ發育スルモハ反令屢俄然狂癡狀ノ激動ヲ以テ轉

輾反側シ身體ノ劇熱ニ苦ムヲ以テ涼氣ヲ求ムルカ如ク突然被衣ヲ投棄スルモ既ニ病牀ヨリ起ツ克ムズ往々或ハ病牀ヨリ半ハ起テ拘急筋抽ノ苦楚ニ由リテ驚喊シ或ハ尙ホ甚ク不規則ニ發スル痙攣狀抖ノ氣ヲ以テ衰憊ヲ來シ而シテ竟ニ永久呼吸ノ擾亂ヲ來スモノアリ或ハ遺悞シテ牀上ニ通利スルモノアリ此時ニ臨ンテハ面貌縮埋シテ青白色ヲ呈シ眼球變小シテ眼窩中ニ埋没シテ下眼瞼下垂シテ兩眼半開ス肌表死者ノ如ク冷徹時トシテハ前頭或ハシ舌體ニ觸ルニ恰モ氷片ニ接スル如ク寒冷ノ氣ヲ呼出シ口内ノ溫度ハ華氏ノ七十九度乃至八十八度ニ降リ腋下ニハ九十度乃至九十七度トス皮膚ハ白色紫暗或ハ青白トナリ屢饒多ニ冷汗淋漓スルカ如シ於テ手足萎凋シ手掌ハ恰モ久

シク水中ニ潢カ如キ摸樣ヲ呈シ脈搏腕關ヨリ欠亡スレモ
 太テ惡症ニ在テハ上膊動脈ヨリ欠如ス之ニ刺絡ヲ行フニ
 血液ノ流出太々困難ニシテ往々全ク出ツル能ハザルモノ
 アリ倘シ流出スルモ太々稠厚ニシテ爹兒様ナリ精神無
 情トナルカ故ニ拘急ニ由リテ醒覺セラル、ノ間又ハ不隨
 意的煩悶ノ間隙ニハ或ハ側臥シ或ハ仰臥シ更ニ周圍ノ事
 物ヲ識別スル克ハス然リト雖モ肯テ死ニ至ルマテ昏睡ス
 ルモノ稀ナリ煩渴及心下ニ熱ヲ感ズルヤ往々苛酷ニ頻
 々熱心シテ冷水ヲ求メ倘シ之ニ氷ヲ與フキハ瘧瘵狀ニ眩
 臂ヲ以テ起テ暴ニ其水ヲ飲下スルモ恐クハ即時ニ之ヲ吐
 ス音聲衰弱シテ或ハ低々細語的トナリ或ハ抑遏ス筋肉ノ
 力ハ殆ント常ニ減退スレモ或症ニ在リテハ尙ホ非常ニ存

シテ且ツ諸徵ニ對稱セザルト往々之アリ時アリテハ既ニ
 腕關節部ニ脈搏ヲ觸知シ克ハザルモ尙ホ病室ヲ步行シ或
 ハ病褥ニ起坐シ或ハ起ツテ更衣スルアリ非常ノ虛脱症ニ
 在リテハ血行極メテ乏シキ衰落ニ陥リ心音殆ント全ク認
 聽シ難ク呼吸窒礙セラレ或ハ平易ノ呼吸ト困難ナル發作
 ナ交番シ而シテ危篤症ノ末期ニ臨ンテハ常ニ困難ナリ蓋シ
 肌表ノ曇暗色、冷徹及呼吸困難ハ都テ肺脈管内ニ血液ノ太
 シキ氾滯アルヲ指示スルモノトス初期ニ於テハ体中ノ小
 窩或ハ内ニ蓄滯スル液類ヲ吸盡スルニ足ルノ吸収力モ今
 ニ至リテハ殆ント抑止セラレ亦諸腺ノ分泌モ閉塞セラレ
 ヲカ如シ汗假令哺乳スル婦人ニ在リテ一時尙ホ乳勝ノ排泄
 汁分泌スルモ今時ニ至リテハ閉止ス成リ便中
 モ減少シテ其液漸ク前ニ滲出セシ液ノ剩餘ヨリ成リ便中

ニハ少量ノ液体ト些少ノ粘液ヲ有スルモ尙ホ且腸中ニハ
多ク便ヲ蓄藏スルコトアリ然レ腸壁既ニ衰弱シテ之ヲ排出
スル勢力ナシ「胃ハ既ニ刺戟性ヲ減シテ嘔吐減少シ口内津
唾ヲ欠亡ス」大氣ト血液間ノ變化及血液ト組織間ノ變化ハ
生活力ト共ニ減衰シテ肺臟ヨリ呼出スル炭酸瓦斯ノ量乃
チ百分中四ニ達セズシテ凡ソ一、五トス「大便ハ一般ニ惡臭
ヲ有セズト雖レ經延彌久スル某症腸内ニ秘ニ在テハ末期
ニ於テ太ク惡臭ニシテ恰モ變敗スル魚肉ノ臭氣ニ類似ス」
凡ソ百般ノ疾病虛脫ニ陥リ窘迫凄愴ノ状態ヲ呈スルモノ
多シト雖レ未ダ曾テ虎列拉患者ノ虛脫期ニ於ケルカ如キ
劇烈殘虐ノ状態ニ陥ルモノヲ看ズ「數時前患者ノ呈セシ状
態ト卒爾ナル朋友及親族ノ悲歎ト現在ノ外見、絶望ナル患

者ノ形状等ヲ比照スルキハ實ニ人ヲシテ痛哭セシムルニ
足ル然レ肯テ必シモ此状態ヲ以テ全ク絶望スルヲ要スル
ニアラズ往々脈搏腕關節ニ於テ消失セルモ又加之ナラズ
上膊動脈ノ搏動ヲ失スルモ尙ホ數時間其生命ヲ維持シ或
ハ恢復スルモノナシトセス又或ハ上膊動脈ノ既ニ脈搏ヲ
失シテ恒久肺循環ノ妨碍セラレテ曇暗鉛色ノ相貌ヲ呈ス
ルモ稀ニ恢復セザルニアラズ然レモ大概之ニ先ツテ斃ル
ヲ常トス
虚脫期ノ十二時乃至四十八時間極メテ稀ニハ尙ホ之持久
スルニ尙ホ恢復ヲ來スコトアリ或ハ三四時ニ死スルアリ或
ハ維持シテ二十四時以上ハヲ經ルアリ脈搏更ニ回復スル克
ハズシテ呼吸益阻碍セラレ腦髓愈遲鈍トナリ昏睡ヲ始メ

呼吸嘆息狀ヲナシ竟ニ死ニ終ル或ハ五時、十時、二十時乃至
二十時已上ノ時間ヲ持久スルノ后病者苦悶ヲ減シ煩渴ヲ
寛解シ而シテ轉輒反側及憂鬱ノ状態轉シテ平易恬靜トナリ
穩靜容易ノ呼吸ヲ以テ靜カニ睡睡スルアリ之ヲ以テ最モ
佳良ノ初兆トス腕關ノ脈搏ハ進退アリ初頭更ニ搏動ヲ感
ゼザルモ次ニ其感觸ヲ覺ヘ又次ニ搏動正シク基始シ肌表
ノ靜脈手背ニ於テ盈張スルヲ認メ皮膚ノ冷徹漸ク減却シ
テ微温ヲ來シ容貌益々自然ノ性ニ復スルノミナラズ或ハ紅
色ヲ潮シ呼吸恬易トナリテ齋整シ体温亢盛ス之ヲ正シク
反應期ト謂フ

「反應期」既ニ虛脫期ヲ經過スレバ多クハ殆ント自然ニ回復
ス或症ニ在テハ其恢復スルヤ衰敗ニ赴クカ如ク迅速ナル

アリ此期ニ至リテハ諸分泌機能容易ニ行ハレ勢力復歸シ
健康速ニ恢復ストウヰニング氏ノ説ニ隨ヘハ虎列拉病者ノ
恢復スルヤ多クハ急次或ハ最悪ノ諸徴ヲ呈シタル攻撃ノ
后三日ニシテ全愈シタルヲアリトミストル、グラサソセル
氏ノ所説ニ據ルニ月曜日ニ在テ充分虛脫期ニ苦シメル病
者ノ木曜日ニ至リテ自ラ門衛ニ佇立セシモノヲ看タリト
蓋シ此等ノ諸症ハトウヰニング氏ノ時代ニ於テハ印度ニ普
通ナリシモ方今甲谷他等ニハ斯ク急次ナルヲ聞カズ蓋シ
諸症全ク虛脫期ヲ經過セシモ尙ホ醫士ノ掛慮未ダ全ク収
尾セルニ非ラズ次ニ要スル所ハ諸分泌ノ充分ナル基始ナ
リ前ニ論ゼシ如ク虛脫期ノ際ハ諸分泌閉止スト雖モ反應
期ノ起來スルトハ再ビ發現スルモノトス先ツ此期ニ至リ

タル變化ヲ始メテ兆示スルモノハ排泄物ノ性狀ト色彩ナ
 リ之ニ投與スル藥品ノ作用ニ關セズシテ排泄物ハ乳汁様
 即チ淡白色トナリ次ニ灰白様色次ニ曇暗渾濁トナリ而シ
 竟ニ褐色ニ變ズ但シ以上色彩ノ變ズルハ全ク肝臟ノ運爲
 ニ由ルモノナルヲ知ル又之ニ加ルニ細慎シテ通尿ニ注意
 セザルベカラズト雖ヒ十時、十二時乃至三十時間ハ尙ホ猶
 豫スベキヲアリ通常初頭吝畜汚一ニシテ深ク色ヲ染メ酸性
 ノ反應ヲ呈シ烈ナル一種動物ノ臭氣ヲ有シ而シテ恐クハ尿
 素ヲ欠損スルモ他ノ動物成分ハ否ラズシテ一般ニ多量ノ
 透明ナル「カスト」チ有シタル蛋白質様質トス倘シ蛋白或ハ蛋
 白同質ノ合体ヲ存スルモ必シモ恒ニ硝酸ヲ以テ檢出セラ
 ル、ニアラス假令屢熱チ加ヘテ然ルキハ硝酸ニテ溶解セ
檢スルヲ得ベキモ

ラレザル一種ノ沈澱チ含有スルニ基ク者トス通常硝酸ヲ
 加ラレハ屢淺紅色ニ變ズ蓋シ尿ノ分泌饒多トナルキハ恐
 クハ百体ノ官能常ニ復スルモノトス
 以上記載スル所ハ方今普ク印度ニ於テ見ル所ノ能ク判然
 確著シタル泄瀉期及寒冷期チ有シタル通常ノ劇症ニ恰當
 スルモノニシテ每症必シモ以上ノ諸徴ヲ有スルモノトシ
 又毎次恒ニ平等ニ能ク之ヲ發生スルモノト擬定スベカラ
 ズ往々諸期同一様ノ虛脫ヲ備具シ又同一様ニ經過シ又同
 一樣ニ泄利スルモノナシトセズ先ツ上ニ揭示シタルモノ
 ハ六八時或ハ下利期ヲ有シ決然十全ノ虛脫期チ隨發セル
 頗ル本來ノ性ヲ具シタル症ナレバ其變形諸症ハ左ニ之チ
 掲載セントス

既ニ示セシ如ク反應期ハ恒ニ必シモ安全ノ時期タルニ非
 ラス尙シ寒冷期ハ八時乃至十時ヲ超シテハ乃チ整然
 タル恢復ヲ得ベキ冀望アリト雖ヒ之ヲ超テ十四時或ハ二
 上持重スルキハ愈反應期ニ臨ンテ第二期的ノ危険ヲトセ
 ズンハアラズ
 從來印度ニ於テ知ラレタル流行ニハ健康ノ反應期ヲ有シ
 急次ニ恢復シテ繼發症ニ移ルノ比例ヲ察スルニ方今ニ於
 ルヨリハ大ナレカ如シ千八百六十一年ノ大流行ニ危險症
 百人ニ就テ凡ソ二十二人ハ反應期ニ死セリ英國ニ於テ行
 ハルノ說ニ據レバ繼發症ノ危險ハ歐洲ニ於ルヨリハ印度
 ニ於テ較些少ナリト然レドクトルモルヘット氏ノ說ニ隨
 ハ之ヲ非ナリトシ印度ノ治療家ハ尙歐洲ノ治療家ニ同ク

皆ナ反應期ニ發スル疾病ヲ熟知セリト察スルニローエ
 ベンガルノ醫士ハ多ク此說ニ左祖スベシドクトル、セマク
 ヘルソン氏ノ「シンデアン」年代記上ニ示セルニ十年間甲谷
 他「ゼテラル、ホスピタル」ニアリテ虎列拉ノ危險症五分ノ一
 ハ虛脫期ヲ經過セシ后ニ斃レシト假令往昔ノ景况如何
 ニ拘ラズ方今甲谷他ニ於テハ俱ニ歐洲人及土人ニ就テモ
 第二期の病ノ多キコトヲ保証ス千八百五十三年及五十四
 年ノ虎列拉病流行時ノ衛生局報告ヲ見ルニ死亡千七百七
 十七人中二百四十九人即チ百人ニ就テ大略十四人ハ隨發
 スル熱症ヨリ死ス下又ドクトル、ゴール氏ノ說ニ據ルハ恐
 クハ千八百四十八年及四十九年ニ於テ殆ソト十分ノ二ハ
 隨發症ニ死亡スト千八百六十二年印度ノ北西州ニ於テ

既ニ記載セシ如ク其比例百人中二十二人ニシテ英國ニ於ケルヨリモ尙ホ大ナリトス故ニ余ハ印度及ローエル、ベノカルニ於テハ反應期ニ繼發スル疾病ノ夥多ナルヲ尙ホ英國ニ於ケルカ如ク夥多ナルベキヲ信ズ今虛脫期ニ繼發スル疾病ヲ序列スルノ左ノ如シ

(第一)不充全ノ反應、再回及尋常恢復ノ失路稀ニ有ルトス

(第二)尿毒症、虛性熱、腸胃熱、下利及諸般虛性ノ繼發等ニ終歸スル複雜性ノ反應ナリ

血行ノ大略恢復セラレタル后ノ再回ハ肯テ太ク普通ナルニアラズト雖モ亦必ズ之ナキニシモアラズ尙シ其再回スルキハ吐瀉、虛憊ヲ起シ而シテ數時間或ハ二三日ニシテ甦ル實テ余カ診セシ一症ハ樹脂裂ノ極メテ緩和ナル下劑ヲ處

セラレタル后更ニ再發セリトクハ、シヨントシ氏ハ病後梨子ヲ食シテ再發セシ一症ヲ記載セリ又余ハ一貴女ノ該病ニ罹リシハ親ク下利期ト寒冷期ヲ注意シ安全ニ之ヲ經過セシメタルニ次日暴シテ呼吸困難ヲ來シ全ク虛脫期ノ諸徵ヲ具シテ死ヲ致セリ恐クハ此症ハ斯ク甚シク呼吸ノ擾亂ヲ起セシハ全ク肺臟組織ノ虛脫ニ歸スルモソナルヲ信ス

通常一般ノ恢復ヨリ失路スルモノハ輕微ノ熱發、頑固ノ嘔吐、吃逆、消化不良、及不眠等之ヲ認ム

輕微ノ熱症「某症」在テハ虛脫期ニ繼テ怠惰懶眠ヲ來シ假令容易ニ動作シ能フモ常ニ靜息セシコトヲ好ミ兼テ屢々微々体温ヲ昇降スル舌背ノ中心乾燥シ口唇ノ表皮及兩頰ノ粘

膜變厚シテ暗透明トナリ而シテ最モ隆突スル齒牙ニ對シテ
表位ノ剝脫ヲ生ズ分泌尙ホ行ハルカ如シト雖モ食欲常
ニ欠損ス然レモ大概以上ノ状態ヲ以テ四五日ヲ過シテ連
綿スルコトナシ而シテ竟ニ十全ノ恢復ヲ繼クアリ或ハ熱候多
少弛張及間歇ノ性ヲ資リ尙ホ數日ヲ經過スルアリ或ハ時
アリテハ昏睡ニ終リ或ハ判然タル泰裏土徵ヲ生ズルアリ
又時アリテハ較、蕁麻羅斯ニ類スル發疹ヲ終リ某症ニハ「非
リセマ」ヲ發テ全身ニ隆起シ二三日間持久スルノ后輕微ノ
燥熱性鱗屑狀剝脫ヲ以テ終フルアリ該症ハ危險ナルニア
ラズ一般ニ發疹消散スルニ隨ツテ恢復ス或症ハ蕁麻羅斯
ノ隆起ヲ生ゼズシテ一二日間赤色ノ「エキサンセマタ」狀發
疹ヲ生ズルモノアリ又時トシテハ熱症ノ胃粘膜ノ刺戟及

輕微ノ下利ヲ伴フアリト雖モ肯テ緊要ノ事故ニ非ラズ
「嘔吐吃逆等」胃ノ刺戟ハ次急性胃炎ニ向ントスル胃粘膜ノ
血積ヨリ生ズルコトアリ蓋シ其血積ハ或ハ頻々發セシ強伸
「ストレ」ノ「努力」ヲ云フ及嘔吐ニ基キ或ハ不注意ニ與
ヘテ「レタル」衝動物ニ因ス每次必シモ熱候ヲ兼スルコトアラ
ズト雖モ一般ニ口渴及胃管或ハ心下ニ嘈雜アリテ病者初
頭ハ滋養物ヲ胃中ニ保存スルコト能ハズ極メテ少量モ直ニ
反逆ス此徵屢數日瀰久シ大ニ細心注意セシコトヲ要スルコ
トアリ然レモ余ハ曾テ該症ノ危險ニシテ命ヲ殞シタルモノヲ
知ラズ尙シ其獨立シテ唯一個ノ徵トナリテ現ハルベキハ
已甚ノ衰弱之ニ伴ヒ而シテ其持久スルカ爲メニ永ク恢復機
能ヲ怠ラズムルモノ屢之アリ時アリテハ變シテ危險ナル

胃腸炎ニ徙ル下アリ「吃逆ハ静息ヲ妨碍シテ大ニ病者ヲ煩
 擾セシメ一般ニ食欲欠損ニ徴ス伴フ但シ此徴ハ毎ニ持久
 スルニアラス時トシテ數時間休歇ヲ導テ再ビ發作シテ
 復々休止ス通常煩シク暖氣ヲ伴フモノナリ稀ニハ否ラ
 ザルアリ假令該徴極危険ナラスト雖恒ニ太々病者ヲ煩
 擾苦悶セシムルガ爲メニ可能的熱心シテ之ヲ寛解セシム
 ラ要ス

「睡眠ハ飲乏尙シ經日瀰久シテ睡ルヲ得サルハ太々煩
 擾ナルモノニシテ往々二三日乃至以上在薄トシテ不眠シ
 爲メニ劇ク睡眠ヲ冀望シテ煩擾シ懇々麻醉藥ヲ要求
 セル者アリ然レドモ此種ニ對シテハ余ガ再回ト稱セシ症
 「不充全ノ反應」較再回ニ類ス下雖恒余ガ再回ト稱セシ症

ノ如ク其抗抵更ニ増進セザルモノトス該不充全ノ反應症
 ニ於テハ太シキ虚脱ノ諸徴或ハ過去シ或ハ减退シテ脈勢
 改復スト雖恒尙ホ天然ノ勢力ニ至ラズ体温在薄トシテ下
 降シ泄瀉減退スルモ尙ホ持續シ假令排泄物中往々微々膽
 汁ヲ混スルモ尙ホ水様ニシテ吐逆持久スルヲアリ或ハ胃
 弱及太シキ虚弱ノ存スルアリ小便自由ニ利シテ外見常ノ
 如シ而シテ假令數日ヲ經過スルモ病者尙ホ十分ノ体力ヲ得
 ズ三四日ノ后生力沈衰、呼吸擾亂、及昏睡等ヲ以テ虚脱ニ陷
 リ竟ニ死ヲ致スニ至ル尙シ其症久シク持久スルヲ得ハ
 到底泰衰土狀ニ轉徙スルヲアリ但シ此ノ如キ切要ノ反應
 ニ伴フテ更ニ肌熱昂盛セザルモノトス該症ハ常ニ必シモ
 危険ナルニアラスト雖恒亦死ニ陷ルモノナシトセス

「尿毒症」ハ太ク普通ノ症ナリ。諸徴經過シテ若シ尿ノ
 分泌復セザル時ハ必ズ其害ノ徴ナクシテ然シキヲ瀰ル
 ヲ有シテ一般ニ草綠色ナリ。須臾ニ尿毒症ヲ繼發シ鼠蹊部
 ニ重壓ヲ感シ煩懣、譫語、困眠、昏睡、兩眼血積、曇暗、舌背乾燥、齒
 牙汚穢ス。但シ昏睡ノ始ルニ先ツテ數、筋肉ニ一種奇異ノ反
 應アリテ筋肉本性ノ収縮ニ勝ヌシトスルノ力ニ抗ス。乃チ
 眼瞼ヲ開擴シ下顎ヲ壓下シ或ハ前膊ヲ伸直セシメテトス
 ルノ力ニ抗抵ス。但シ其力尙ホ抗抵ナリ。トクホ、蓋ルハ
 下氏ノ記セルニハ尿毒症ハ非常ナル脈搏寬徐ノ症ニ前驅
 セラルハモノナリ。設シ腎臟泌別ノ基始セラレザルハ昏
 睡愈増劇シテ反應十分ニ振起セシ后四十八時間内ニ死ス。

致スアリ然レ一般ニ之ヨリ久シク怠慢スルヲ常トス加之
 泌別判然回復セラレ、之后更ニ泰衰土狀ニ變スルヲアリ
 虛脫期ノ長短ハ果シテ腎臟泌別ノ歇止上ニ關涉チ有スル
 モ、之ニシテ虛脫期ノ愈短暫ハ八時乃至十時ヲナルキハ恐ク
 ハ腎臟二十四時間ニシテ自由ニ運爲スルモトス然リト
 雖レ尙シ反應振起后泌別二十四時間加ニテナラズ怠慢セラ
 レ、モ肯テ必シモ望チ失スルニ足ラズ非常ノ劇症ニ在
 テハ尙ホ此限ヲ過クモソアリト云フモ、蓋スト氏ノ說
 虛脫期ノ十八時以上間持久シタル時ハ必ズ欠損セル
 泌別上ニ屬スル繼發病ノ危險太ク大ナリ而シテ瀰久セル虛
 脫ノ后血液循環愈速ニ回復スルヲ維持セシ泌尿秘閉ヨ
 リ誘來セシ危險益大ナリト昏睡症ハ太ク數危險ナリ。雖

其運爲恢復シ能ハザルキハ概ノ死亡ヲ免レ難シトス然リ
 而ノ亦ドクトル、モルヘット氏ノ示セル如ク尿ノ泌別ハ恒ニ
 腦ノ所患ヲ寛解スルニ非ラス腸ハ時アリテハ弛縦シ時ア
 リテハ秘結ス大便ハ黃色ニシテ糞渣ヲ混シ時アリテハ尿
 素ヲ搬去スルコアレハ宜シク之ヲ制止スルコ勿レ凡テ尿
 毒症諸徴ハ尋常一般ノ尿毒症徴ニ同一ナレハ肯テ爰ニ枚
 舉スルヲ要セズ但シ該症ニハ熱候ヲ呈スルコナク或ハ之
 ナ呈スルモ只僅微トス
 「虎列拉泰裏士」恒ニ該症ト尿毒症ノ間ヲ區別スルコヲ要セ
 ズ尿毒症ハ泰裏士狀ニ徒ルコアリ然レ尿毒症ニ係涉ナク
 或ハ全ク尿ノ秘閉ナク又蛋白様ノ尿ナクシテ繼發的ノ熱

ナ發スルコナシ血液充分ニ尿素ヨリ清滌セラレザルベシ
 故ニ「コ」シチチ「グ」井「ベ」チ「ガ」シ「ン」ヲ測量上ニ尿
 以テ其尿ヲ檢セハ尿素ノ泌別欠乏スルコヲ證ス然レ或症
 ニ在リテハ顯微鏡用玻璃板上ニ於テ自由ニ結晶スルニ足
 ルコ尿素ヲ發見セリト雖レ未タ二十四時間貯積シタル尿
 ノ分量上檢査ヲ行ヒシコナシ蓋シドクトル、リセビ「氏」ノ
 記セシ如ク血液中尿素ノ外他ニ老敗物ヲ籠積シタルコヲ
 指示スル諸成分ノ存スルアルベシ續發的熱症ハ病者虛脫
 ノ后兩三日間順次ニ恢復スルカ如ク排泄及分泌モ充分ニ
 運營セラレ、ニ似タリ然レニ尋テ舌背乾燥ヲ始シ某時ク恐
 ハ日ニ脈搏較亢進シ頗ル井然トシテ熱候ノ症狀ヲ發作シ
 精神ノ衝勵肯テ太クシカラズ脈搏急數ニ至ルモ一般ニ弱

且小ナリ暫時ニシテ病者泰裏土狀ニ變ジ時トシテハ全ク
 極劇ナル虚性ノ危険徴ヲ經過スルアリ但シ此症モ亦毎次
 必シモ危険ナルニアラズト雖モ命ヲ殞スモノ太ク多シ熱
 症ノ經過種々一様ナラズ曾テ一症アリ虚脱全ク經過セシ
 后腎臟及肝臟ノ分泌始終平常ノ如クナリシニ二十日ヲ經
 テ死セリ恐クハ大半八日乃至十二日ニ斃ルモノ多シ此熱
 症ハ通常虚性熱ノ諸證ヲ全備スルモノニシテ乃チ沈衰譫
 語、昏睡、舌背枯燥、口唇焦燥、脈搏弱數、眠瘡、血液溶崩、紫斑等ノ
 徴ヲ呈シ尙ホ其他泰裏土熱ノ諸徴ヲ備具スルモノトス病
 者或ハ以上ノ徴ヲ以テ斃レ或ハ徐々ニ恢復シ或ハ貧血衰
 弱ノ状態ヲ以テ久シク遷延スルアリ昏睡ハ時アリテ抗抵
 ノ后初日又ハ次日ニ生シ或症ニハ卒爾尿素ノ中毒ニ因ス

然モ多クハ分泌ノ傷損セラレザルニ似タリ一般ニ該症ハ
 危険トス

「角膜潰爛」角膜ノ壞爛症ハ印度ニ在リテ往々虎列拉病ノ續
 發タリ最モ數々土人ニ在リト雖モ亦歐洲人ニモ之ヲ生ス
 通例反應徴基始シタル后數日ニ於テ始メ然ルモハ必ズ全
 身ノ虚性徴ヲ伴ヒ一般ニ泰裏土徴ヲ兼併ス然モ恒ニ虚性
 熱症ノ最惡徴ヲラズ之ヲ生ズルヤ初メニ角膜ノ下半ヲ侵
 シ毎ニ焮衝ヲ以テ基始スルニアラス故ニ初期ニ膨大スル
 脈管ノ痕跡ヲ認ムルコトナシ蓋シ虚脱期ノ最惡時ニハ下眼
 瞼ハ上眼瞼ヲ離隔シテ下垂シ爲メニ角膜ノ下半ヲ曝露ス
 此時ニ方ツテ細胞層ノ被覆セラレザル部分ハ枯燥シテ恰
 モ羊皮紙狀ヲ呈ス是恐クハ隨發ノ壞爛症ヲ誘導スル因ナ

ラシ然此症ノ該因ニ基クヤ否カ問ハズ此患未發生スル
 主因ハ角膜榮養ノ欠損トス此症タル抗抵ノ后四五日或ハ
 以ニ於テ一側ノ角膜下片ノ或部ニ曇霧ヲ生シ其曇霧面判
 後タル區域ヲナサズハ未タ認ムベキ壞爛ニ至ラズ尋テ二
 十四時間ニ於テ翳斑部上ノ細胞層剝脱ヲ呈シ或ハ較深層
 ノ織質ヲ虧損シテ角膜縁ヨリ凡ソ一尹地二十四分ノ一ヲ
 距タル点ニ織細ノ彎狀溝ヲ生ズルヲアリ其溝ハ恒ニ曇霧
 部ヨリ小ナリ一般ニ此時ニ臨ンテ前日一眼ノ經過セシ方
 法ヲ逐フテ復タ對側ノ角膜ニ曇霧ヲ始ム二十四時ニシテ
 初頭犯サレタル眼中ノ彎狀溝益々生大シ往々前日ニ一倍ス
 ルアリ眼鏡ヲ以テ之ヲ掩スルニ溝面汚穢セル灰色ノモノ
 ニシテ暗透明トナリ眞ニ微細ナル腐肉ノ性狀ヲ具フ此潰爛

間、擴延スルアリ或ハ角膜ノ全厚ヲ穿ツアリ或ハ其縁ニ達
 スルアリ然レ大約此等ノ症ニ在リテハ斯ク擴大ニ壞爛ヲ
 來スニ先ツテ死スルモノ多シ通例該症ハ左右並行スト雖
 且后ニ侵サレタル眼ハ前者ニ比スレバ増進少シ倘シ病者
 恢復ヲ得ルハ一般ニ眼中較著ノ畸形ヲ遺スナクシテ
 痊ルモノニシテ全身恢復スルニ隨ツテ潰瘍モ亦減少ス乃
 ナ初頭潰亂作用遏止シ次テ曇霧及暗透明ヲ減褪シ又次ニ
 潰瘍面ノ透清ヲ來シ竟ニ玲瓏透明トナル癍痕ヲ隨發スク恐
 ハ急ニ而メ恢復モ一般ニ充全ナリ故ニ潰瘍ノ太タ深大ナル
 ニアラザレバ屢數日ノ後傷害ノ那邊ニ在リシヤヲ認ムル
 克ハザルニ至ル故ニ恒久性曇霧、虹彩、歇兒尼亞或葡萄腫等
 ハ預想スルヨリモ稀有ナリ或ハ末期ニ至リテ結膜又ハ鞏

膜ニ血積ヲ認ムルコトアリ然レ是畢竟潰瘍ノ成果ニ出ルモ
 ノニシテ更ニ原由的ノモノニアラズ蓋シ角膜潰亂症ハ印
 度ニ於テ數慢性下利及他ノ衰弱病ニ繼發スルアリ肯テ虎
 列拉病ニ固有特異ノ繼症ニアラズ
 「諸部之壞疽」最モ稀有ノ繼發症ニシテ曾テ孟加拉ノ土人ニ在
 テ陰莖及陰囊ノ全ク壞疽トナレルモノト及陰囊ハ一部ト
 鼻尖ノ壞疽ヲ生シタルモノアリ又口内粘膜ノ表位壞疽ヲ
 發シタルモノアリト雖モ未ダ腸管ノ壞疽ヲ生シタル者ナシ
 蓋シ其壞疽部尙ホ小ナルモハ剝脱シテ治スルモアレモ陰
 莖及陰囊ノ擴延シタル壞疽ニ在リテハ毎ニ死ヲ將來スル
 モノトス

「耳下腺」ノ腫大及焮衝ハ往々之アリテ屢膿化ス爰ニ該患ノ

諸徴ヲ論ズルハ又有要ニアラズ但シ此症ハ第二週乃至第
 三週ノ間ニ發シ虛性熱ヲ伴フ通常左右ニ逐次焮腫シ病者
 其經過中ニ沈衰ス毎ニ該症ハ身体ノ太々虛衰セルヲ徴ス
 ル危篤徴ニシテ大ニ食機ヲ妨礙スルモノトス
 「眼瘡、癩瘡、潰瘍、肺臟及肋膜等ノ虛性焮衝等」ハ數病者ヲ困苦
 セシメ且大ニ恢復機能ヲ怠ラシムルモノアリト雖モ肯テ
 特別ノ記載ヲ要スルニアラズ
 特異諸徴
 前章說示シタル諸徴ノ一二ハ猶ホ充分精密ノ説明ヲ要ス
 ルモノアリ就中腸管排泄ハ尙ホ密ニ論究セズハアルベ
 カラズ其排泄セラレ、分量ハ一般ニ非常ヲ大量ナリト雖
 モ病院患者ニ在テ之ヲ精密ニ察知スルヲ難シ蓋シ其量

屢排泄期間八十汚百汚乃至百五十汚ニ至ル便中糞渣分ヲ
 通去セシ后ハ感得スヘキ臭氣ヲ放タズ然レ前ニ記載スル
 如ク末期ニ於テ倘シ腸内ニ秘閉蓄積セラル、キハ屢悪臭
 アリニ非ラズ虎列拉便ノ成分ヲ化學上及顯微鏡上ニ検査
 セラレタルニ虎列拉便ト死后腸内ノ蓄積物トハ其性狀一
 様ナラズ而シテ虎列拉便ハ放定スルノ后稀薄ノ「ホキ」乳汁
 分 樣液ト沈澱物若干量トニ分離ス其液分ノ各種重量ハ一
 千〇〇五乃至一千〇十ニ其沈澱片及分子ハ「パークス、ゴ
 ール、カ非ルドチル及其他衆醫ノ説ニ據レバ左ニ列次スル諸
 品ノ「ハキアリンベシス」^{玻瓈狀基}礎ノ義ヲ資リテ存在スルモノトス
 (一)無造構ノ顆粒質及較大ナル顆粒体トス過多ニ存スル
 屢之アリ

(二)直徑一腺二百五十分一乃至百八十分一ノ大サヲ有セル
 尋常一般顆核ノ性ヲ具ヘタル小体アリ
 (三)微細ナル顆粒胞球ニシテ或ハ較大ナルアリ或ハ膿球ニ
 類ズルアリ
 (四)極メテ少量ノ鱗屑狀内皮細胞ニシテ一般ニ容易ニ檢出
 セラレ難シ

ドクトル、パークス氏曰ク眞ニ渣滓ノ量ハ太ダ僅少ニシテ
 虎列拉便一^{バイント}巴ヨリ得タル乾渣ハ僅ニ四氏ナリ便中固形物
 即チ膠ノ成分ヲ存スルノ説ハ稍疑フベシパークス氏ハ之
 様質ヲ纖維素ノ變形トナシガイルドナル氏ハ之ヲ以テ粘液ノ
 反應ヲ呈スルモノトナセリ是恐クハ粘液ノ變形物ナラシ
 以上ノ掲載ニ反シテ死后抽出シタル腸内蓄積物ノ顯微鏡

上ノ形狀ハブーム氏ニ由テ始メテ記載セラレタルカ如ク
 多量ノ内皮細胞蕃殖々々ヨリ分離セル細胞体及細片着セル
 塊ヨリ成リ中ニ織毛巔頂ノ如キ細小ノ覆被物或ハ織毛ノ
 全形及其基礎ノ覆被物等種々ノ量ヲ含有ス内皮細胞蕃殖
 ノ状態或ハ其明不明ニ關シ及右体ノ溶解セラレタル液量
 ニ據リテ其全量ノ状態ハ米泔汁或ハ乳汁様ヨリ「クワーム」
 様、膿様、「フロクレン」ト綿屑或ハ「オートメール」粉燕麥ノ濃稠ニ
 變化スル「アリド」トル、パークス氏ハ尙ホ此便中ニハ之
 ニ混淆セル他ノ有機形ヲ認ムト謂ヘリ結腸内ノ蓄積物ニ
 ハ太々僅微ノ内皮細胞アリ顕微鏡上ノ査檢ニ於テ虎列拉
 便ト死后小腸内蓄積物間ノ主トシテ異ナル所ハ便中ニハ
 殆ント全ク内皮細胞分子ヲ欠如スルニ在リ之ニ由リテ考

ルニ内皮細胞ハ生前ニ於テ剝脱ヲナサスト雖モ死后斯ク
 剝離セルハ全ク死后ノ瀰爛ニ由テ剝脱セルモノトス
 「排泄物ノ舍密」泄瀉期ノ極度ニ於テ液分ノ各種重量ハ一千
 ○十二ヲ超過スルモノ稀ナリ反應ハ微々亞兒加里性又ハ
 中和性トスドクトル、パークス氏ハ千八百四十九年二月發
 行ノ龍動醫學日報ノ紙上ニ於テ大便ノ成分ニ關涉シテ切
 要ノ報告ヲ書シ而シテ其液分ハ血中ノ漿液ニ一様ナラザル
 ヲ示シ兼テ其液分タル唯僅微ノ蛋白ヲ含ミ多クハ鹽類
 及動物質量ヨリ組成スルヲ指示セリ左表ハ該新誌ヨリ
 騰出スルモノニシテ一目ノ下ニ排泄物ノ眞成性質ヲ示ス

大便ヲ利 セシ時期	各種 重量	一千分中 蛋白質ノ量	一千分中抽 出物ノ量	一千分中可 溶鹽分ノ量	一千分中固 形物ノ全量
泄瀉期	千〇十二、九	〇四六六	三、八四六	九、〇四	十三、九
泄瀉期	—	〇、二九	六、八二	五、九九	十三、一
寒冷初期	千〇〇九、〇	—	一、三七	十、九八	十四、六五
寒冷極期	千〇〇九、五	—	一、二八	〇、五五	九、一四
寒冷極期	—	—	—	—	—
寒冷極期	—	—	—	—	—
寒冷中	千〇〇八、三	〇、二七	二、二三	八、三三	十、八三
寒冷中	千〇〇五、八	—	—	—	—
反應期初頭	千〇十四、〇	—	—	—	—
反應期初頭	千〇〇八、九一	—	—	—	—
虛脫期	千〇十七、八三	〇、八五五	十七、三五五	—	十八、二一
虛脫期	—	—	—	—	—

⊕寒冷中トハ劇甚ナラズ緩和ナラサル期ヲ云フ

稀ニハ該液ニ硝酸ヲ滴入スルニ赤色ノ反應ヲ生ズ恐クハ
 是少量ノ膽汁何等ノ方法ヨリ排泄物ニ混セルナルヘシト
 雖未タ判然之ヲ確定スル能ハズ
 血液ハ極メテ稀有ナリト雖時トシテハ共ニ大便及腸内
 ノ蓄藏物_后死中ニ認ムルヲアリ屢觀ル所ノ淡紅色又赤色ノ
 便ハ血液ノ色素ヨリ組成シテ通常赤血球ハ缺如ス
 假令蛋白質及動物質ヲ便中ニ見ルヲアリト雖其量太々微
 少ナリ而シテ鹽類ノ量ハ頗ル多シ血液ノ最モ損失スルハ其
 水分ニシテ泄瀉期中排泄スル液百汚毎ニ血液ヨリ損スル
 水八九十八汚乃至九十九汚ニシテ殘餘ノ殆ント一汚ヲ盤
 類トス斯ク排泄セラレタル共盤類ハ「コロイド」化會實母、及
 剝篤亞失母、磷酸會達、炭酸會達及硫酸會達ニシテ一千分中

七分或ハ八分ノ比較ヲ有シ殆ソト脈管中ニ存セル血液ノ量ニ類似スル比例ナリト雖モ土質磷化物ハ健康体ノ如ク粘膜ヲ透過スル能ハズドクトル、ギソンプソン氏ノ行ヘル三分拆ニ於テハ有機質ノ較多量ヲ檢出セシト雖モドクトル、パーリス氏ノ試檢ヲ以テ恐クハ諸症ノ過半ニ適當スルモノトス察スルニ腸管面ハ血液ヨリ水ノ大量ヲ抽除シ有機質ノ少量ト攪類ノ多量ヲ排擢シ血液及其諸成分各自相互ノ行動ニ大變化ヲ生ズルヤ驟然タリ吐出物ノ化學ハ尙未ク查檢ヲ行ヘシト少ナシベッケレル氏ノ查檢セシ六症ニ於テ一千分中固形物ノ比例ハ六、三七乃至五十四、七〇ニシテ蛋白ハ秤衡シ難キ少量ヨリ三十一、五〇ニ至リ、コロール化會實謨ハ二、三五乃至八、二四トス但シ胃ノ蓄積恐クハ及吐出

物等ヲ抽取シタル時期ニ關シ精密ニ記示セシ者更ニナシ「血液」寒冷期ニ於テ血液ノ粘膠トナルハ既ニ記載セシモノ、如シト雖モ之ヲ化學的ニ檢スルニ非常ノ變化ヲ受タルトテ示ス最モ普ク世上ニ知ラレタル分拆ハソル、ドブルニ、サウチン、シ、ドクトル、パークス氏ガルドッド氏及スチミツド氏ノ分拆ニシテ水分ノ減少シテ固形体比例ノ准リニ増加スルヲ示スガルドッド氏ノ説ニ固形物ノ量男子ニ在テ一千分中二百四十分及婦人ニ在テ二百七十七分タル健康体ノ量ヲ高度トシテ測リシニ七八ニ就テ固形ノ全量ハ二百五十一分、三百六十分、二百七十一分、二百七十五分、二百八十二分、及二百八十四分ニシテ血球及蛋白ハ増加セリ纖維素量ノ變易ハ尙未疑フベシト雖モ稍凝固性ヲ減少スレ

ハ恐クハ其性質ニ變アルナラシメ又死後心臓及近傍ノ大脈管ヨリ抽取シタル血液ニ就テ試験サレシニ鹽類ノ比例ニ關シテ同氏トドクトル、ヲソフチン、氏ハ其說ヲ異ニシ甲氏ハ鹽類ノ量健康体ヨリハ其比例大ナルモノト觀察シ乙氏ハ減退ストセリドクトル、スチミッド氏ハ刺絡ヲ以テ抽取シタル血液ニ就テ注意セシニ其結果ニ於テ血液稠厚愈増加スルヲ示シ又兼テ腸管面ヨリ排泄運爲ノ行ハル、時間ノ長短ニ準シテ「モルホロシカル、エレメント」成形ノ稠厚ヲ増スヲ示セリ加ルニ血中固形物ノ准リニ増加シテ排泄運爲ノ三十六時間持續セシ后ニハ平常ノ量ヨリハ增添スルヲ略半量ナリトスチミット氏ハ無機鹽類ハ排泄運爲ノ末期ニ於テ減少シ爲メニ漿液中有機物ノ比例ハ一倍スル

血液

モノト思量セリ該液ノ各種重力ハ一千〇六十二乃至一千〇六十九ナラズシテ一千〇七十六乃至一千〇八十一ナリ時トシテハ酸性ナルヲアリドクトル、ガルロット氏ハ是即チ有機酸ノ排泄阻碍セラレタルニ因スルモノト思考セリ尿素ハ時々虚脱期ニ在テ少量ヲ檢出スルヲアレヒ一般ニ反應期ニ在リ今以上諸分拆ヲ括論スレバ虚脱期ニハ血液ノ稠厚増加シ諸種有機固形質ノ比較高クシテ纖維素ノ凝固損減シ各種重量増加ス時アリテハ酸性ヲ呈シ時アリテハ尿素ヲ存シ非常ニ無機物ヲ含ムモ之ニ關涉ナクシテ恐クハ鹽分ノ總計量ヲ減退セリ抗抵期ニ在リテハ屢尿素ノ多量ヲ有シ而シテ血液凝固性減シテ軟柔セルヲ示セリ

種類

前ニ記載セシ如ク以上諸徴ハ普通一般ノ虎列拉症ニ恰當
 スト雖此時アリテハ之ニ異ナル状態ヲ現スコアリ或症ハ
 太ク急次ニ經過ス故ニ某症ハ泄瀉期短暫ニシテ只二三時
 間持續スルノミコシテ胃腸ヨリ特ニ排泄ヲ起サズシテ乍
 ナ虚脱期ヲ來スコアリ又某症ハ尙ホ之ヨリモ急速ニ命ヲ
 殞スモノアリ千八百四十六年キユルラッキニ於テハ該病ニ
 襲來セラレテ未タ一時間ヲ出テズシテ死ヲ致シタルアリ
 ドクトル、ミルロイ氏曰ク千八百四十六年チーラニ在
 テ此病ニ襲來セラル、ヤ突然轉倒ノ臍剛狀ヲ呈シ更ニ播
 擲及吐逆ヲ起サズト雖此血液ノ全ク汚穢セルヨリ二三時
 ノ終ニ死セリト是等ノ症ニ在リテハ病毒ノ量極メテ大且
 猖獗ニメ未タ滲出ヲ來ス時間ノ猶豫アラザルニ先ツテ既

ニ死ヲ將來スル者ト謂ヘリ又ミストル、ソム氏ハ始メテ現
 レタル一百人中多クハ數時ニ斃レ或ハ尙ホ之ヨリモ短暫
 ニ死シ就中一人ハ一時間ニ及ハズシテ既ニ斃レタリト是
 等ノ症ハ常ニ吐逆及泄瀉ヲ起サズシテ饒多ノ脱汗ヲ以テ
 終ル所ノ卒爾タル虚脱期ヲ以テ最モ卓偉タル徴トシテ既
 ニ「アスヒキシア」ヲ現シタリ且未タ身体常ノ色彩ヲ變シテ
 驚クベキ鉛白色ノ該病較著トナラザルニ前ツテ脈搏腕關節
 ニ於テ絶止シ眼球上竄聲音嘶啞衰弱等ヨリ即時ニ生力ヲ
 遏止セリ又次ノ諸症ハ其襲來セラル、ヤ尙ホ初頭ニ罹リ
 タル者ノ如ク倏忽ニ來タリシト雖此虚脱期ハ吐瀉ニ前驅
 セラレタリ而シテ是等ノ症ハ眩暈、耳聾、視力失亡、音聲變化
 或ハ虚浮ト呼吸微弱或ハ緩徐暗昧狀又ハトナリ卒然昏到ヲ來

シ生力虚脱、及懊惱煩懣アリ。次ニ嘔心吐逆及昆設兒狀ノ便チ瀉シ心部ニ燃クカ如キ熱ヲ感シ煩渴引飲冷涼ノ諸物ヲ要求セリ。

以上ノ諸症ニ由リテ考ルニ血液ヨリノ泌別ハ肯テ虎列拉病ノ要用ナル点ニ非ルコヲ解明スルモノ、如シ然レハ泄利シタル排泄物ノ量ヲ以テ生前血液ヨリ泌別セラレタル液量ヲ覈實ニ測定セラレザルモノト想像セズンハ有ルベカラズ何トナレハ生活間太々大量ノ液ヲ腸中ニ秘閉スルコト屢之アリ但シ此件ハ再ヒ下ニ論及スベシ。

某症ニ於テハ嘗テ標準トナスベキ症ニ於ケルカ如ク肌表面ノ皺理チ生セズ身体尙ホ豊肥シテ皮膚乾燥セルアリ然ルニ是等ノ症ハ却テ虚脱チ來スコト速ナリ。

又稀有ノ症ニ在リテハ假令虚脱期且充全ナリテノ初頭ニモ皮膚尙ホ温カニシテ蒸發氣ノ持續スルモノアリ。

ミストル、トウニシク氏及他ノ或醫ハ方今一般ニ診スル所ノ者ヨリハ尙ホ初期ニ陽性ヲ現シテ恐クハ上ニ列序セシ分類ニ算スルヨリハ痙攣性虎列拉ノ名ニ恰當スベキ症ヲ記載セリ但シ是等ノ症ニ於テハ身体ノ運營顯然熱性ニシテ該病ノ發熱期ニ至リテハ暴劇痛楚ノ筋抽、肌表ノ温熱及自由ノ血液循環ヲ伴フモノトスドクトル、モルヘッド氏ハ印度西部ニ於テ斯ノ如キ症ハ太々稀少ナリシト云ヘリ。

ドクトル、ケ、マッキノン氏ハチルフォルノ獄舎ニ於テ猖獗ナル虎列拉病流行ノ際目撃セラレタル一種奇異ノ症ヲ記載セリ即チ吐瀉閉止セシ后、音聲、呼吸、及皮膚ノ温度自然ニ復

シ顔面更ニ特異ノ徵ヲ呈セズシテ運動ヲ試シ或ハ食餌ヲ要求シ自ラ疾病ノ恢復ヲ覺フト云ヘリ然ルニ其脈ヲ檢スルニ僅微ニ觸知スルノミ又某症ハ全ク之ヲ觸知シ能ハザリシ斯ノ如キ非常ノ状態ニ陥ルモ尙ホ二日間生活セシモノアレモ皆ナ竟ニ死亡セリニ由レリ斯ク筋肉ノ力ヲ存シ全軀ノ恢復スルカ如キモ尙ホ脈搏ノ弱又ハナルハ實ニ著明ノ件トス又スコット氏及他ノ某醫モ之ト全一樣ノ症ヲ診セシト問々之アリト云ヘリ

ドクトル、ジョン、マクヘルソン氏ハ胃血症ヲ反應期ニ發生シタル二人ヲ診シ就中一人ハ下血ヲ兼併セリト云ヘリ

「虎列拉性下利」ハ假令虎列拉病ノ種類ナラズト雖モ能ク該症ニ密似セルヲ以テ爰ニ之ヲ論及スルヲ至當ナリト看做

ノ可ナルカ如シ該下利症ハ殆ント常ニ虎列拉流行時ニ於テ流行シ往々或地ニ在リテハ數週間或ハ數虎列拉病ニテ前驅ス其初頭ニハ屢虎列拉病ト區別シ難ク且往々虎列拉症ニ轉移ス時トハ虎列拉徵ノ極メテ輕易ナルヲ以テ該症ト眞症ノ間ニ分界ヲナシ難キモノアリ曾テ巴黎ニ於テ虎列拉ノ名稱ヲ此下利症ニ附セラレタリ此下利症タル恐クハ其毒少量ニシテ未タ眞症ヲ生ズル能ハザルニ由ルナラン此症ノ最モ卓絶シタル徵ヲ下利ノ諸徵トス通例何等ノ確認スベキ原由ナクシテ夜間或ハ早曉ニ始リ其下利二十四時間三四回又ハ六七回ニ至ル努責或ハ絞痛等ナクシ洩瀉シ大概疼痛ナシ恐クハ精神ノ無情之ヲ以テ屢病者自ラ意ニ介セザルトアリ大便多少糞尿ヲ含有スルモ大約液

百四十
体ニシテ且夥量ナリ其色褐色ヨリ薄黄色或ハ淡褐色ナリ
倘シ病已ニ虎列拉ニ轉ズルキハ泄瀉増加シ米泔汁様ノ性
ヲ資リ隨テ吐ヲ起シ或ハ搖擗筋抽等ヲ現ス「アリ」一般ニ
頗ル虚憊ノ狀ヲ呈シ衰弱ノ態ヲ表シ食欲稍損シ多少疾病
ノ苦惱アリ下利ハ十二日乃至十五日間連續スル「アリ」ト
雖且又竟ニ虎列拉ニ移遷スルモノアリ諸徴克ク醫療ニ制
服スルニ似タルモ更ニ虎列拉ニ變セズ又虚脱ヲ來サズシ
テ竟ニ疲勞ヨリ死ヲ致スモノアリ但シ此患ノ死亡數ヲ算
定スルハ太々容易ナラズ何トナレバ此症ハ間單純ノ下利
症ヲ以テ始メ而シテ虎列拉症ニ徙ルキハ虎列拉症トシテ報
告セラレハナリ單ニ下利症トシテ分類セラレタルモノ
ニシテ死亡數ハ特ニ大ナラズ千八百五十四年虎列拉流行

時ニ於テ下利症ヨリ死スル者ハ一千人中六人ヨリ十八人
ノ差異アリ斯ノ如ク結果ノ全良ナルヲ以テ考ルニ肯テ此
下利症ハ制止スルコト能ハザルモノニアラザルカ如シ故ニ
能ク其功ヲ逞シテ其下利ヲ療スルコトヲ得ハ隨テ多少虎列
拉症ヲ抑壓スルノ効アルヤ必セリトス
「虎列拉的熱」虎列拉病流行ノ將ニ消退ニ赴カントスル時ニ
方ツテ虎列拉性下利ノ虚性熱ニ轉移スル「屢」之「アリ」ミ
「ト」ル、ト「ム」氏ハ「キ」ル「ラ」ッキ「ー」於テ虎列拉病流行ノ状態ヲ記
セルニ虎列拉流行ノ將ニ進行ヲ終ントスルニ隨テ漸々其摸
樣ヲ變シ熱症ノ性狀ヲ得テ四五人中一人ハ痙攣性虎列拉
ニ變シ其他ハ眞ノ熱症ニ歸シ都テ虚性弛張熱ノ性質ヲ徵
セリ故ニ之ヲ熱病トシテ記錄セラレシ「ソ」ル、レ「イ」ナル「ド」、マル

ナン氏ハ千八百三十四年甲谷他ニ行ハレタル虎列拉熱ヲ論シ又他ノ虎列拉流行ノ際下利症較著ニ現レ特ニ夜間鹽類及峻下劑ヲ投ズルニ由リテ大ニ虎列拉症ニ變化スルノ傾向アリ蓋シ此等ノ熱症ト虎列拉症ノ間其關涉如何ヲ覈定スルヲ能ハズト雖モ甲谷他ノ虎列拉流行ニ於テハ最モ屢下利ヲ以テ始ムル熱病アリ又時アリテハ猩紅熱ノ流行セル地方ニ於テハ往々下利症ノ該症ヨリ始ムルヲアリ特ニ小兒ニ在リテ斯ノ如キ方法ニ由リテ熱症ヲ發スルモノ又稀ナルニアラズ以上狀態ノ虎列拉時ニ行ハル所以ハ恐クハ當時大氣ノ成分ニ感動アルモノニシテ肯テ熱症ハ虎列拉ノ一種ナリト看做スルノ理アラズ以上ノ事情ニ據リテ考ルニ虎列拉流行時ニハ尙ホ熱症ニ於ケルモ必ず下劑

ヲ投與スベカラザルノ實驗ヲ得タリ特ニ鹽類及利水下劑ヲ禁忌シ且ツ何等ノ下劑モ夜間或ハ早晨ニ功ヲ要シテ之ヲ處スベカラザルヲ戒ム

今虎列拉的下利及之ヲ兼併セル熱病ヲ算入シ虎列拉病ヲ分類スルト左ノ如シ

- (一) 十全ノ虎列拉期ヲ來サザル症
- (二) 吐瀉后較著充分ノ虛脱ニ陥ル症
- (三) 微々下利シ或ハ更ニ下利ヲ來サズシテ虛脱ニ陥ル症
- (四) 陽性症

以上四種中第二症ヲ最モ屢見ル所トス
 經過續發症ヲ
 算入ス
 最モ惡性ニシテ急劇ノモノハ三時乃至三時ニシテ終ル第二期

的疾病ニ由リテ遷延セラレタル症ハ數週ニ瀕ル虎列拉下利ノ初徴ヨリ反應期ニ至リ經過スル時限ハ較判然限局セラル千八百五十三年乃至五十四年ノ流行時ニ衛生局ノ報告ヲ閱スルニ危險症即チ死亡者千七百四十四人ノ經過ヲ均算スルニ六十四時ヨリ短暫ナラズシテ快復者千八百五十六人ノ經過ハ九日〇六トシ又死亡者ノ統計表ニ由ルニ九千五百九十人劇惡ハ均算二日三九ヲ經過セリ諸期ノ經過ハ既ニ論及セリ而シテ下利期ヲ算入セズハ或ハ稀ニ漸ク現在シ或ハ二十四時ニ及ビ虛脫期ハ危險症ニハ二時ニ終リ非常ノ症ニハ七、八十時ニ瀕久シ反應期ハ良性ニ六、四十八時ニ終リ或ハ熱症又ハ他ノ繼發諸症ヲ兼併スル症ハ數週ヲ跨ルアリ

虎列拉死亡數

虎列拉病ノ死亡數ハ太々夥多ニシテ其均算ハ季候及地方ヲ異ニスルモ粗相ヒ近似ス人口中健康者ニ比較シタル死亡數ハ大ニ差等アリ然レ英國ニ在リテハ健康不健康ノ地方ニ拘ラズ罹病者ニ比較シタル死亡數ハ殆ント同等ナリ蓋シ是等健康不ノ地方ニ死亡數ノ差異ヲ生ズル理由ハ病勢ノ劇易ニ關スルヨリハ健康地方ニ住スル人民ノ該病ニ感染シ難キ所以ニ屬スルモノトス印度ニ在リテハ罹病者ノ死亡數ハ軍伍ノ階級ニ隨フテ異ナルカ如シ故ニ士官ハ兵卒ニ比ズレバ死亡數少シトス先ツ之ヲ概シテ論ズレバ罹病者百人ニ就テ五十人以上恢復スルヲ得ベキ者トシテ可ナリ某流行ニ於テハ死亡數太々多キモ又某時ニハ些少ニ

シテ甲ニハ百人中七八十人ヲ斃シテ乙ニハ二三十人ナリ
 亦流行ノ時期ニ隨ツテ較其死亡數ヲ異ニスルモノニシテ
 一般ニ流行ノ末期ヨリハ初頭ニ太ク大ナリ亦疾病ノ諸期
 ニ隨ツテモ其數ヲ異ニス乃チ虛脫期ニハ最モ夥多ナリト
 ス
 以上ノ比較數ヲ解明スヘキ算計ハ左ニ記載スルモノ、如
 シ乃チ英國ニ於テ千八百三十二年ノ流行ニ罹病者ニ比較
 スル死亡ハ百人ニ就テ四十七人千八百四十八年及四十九
 年ニハ四十五人又千八百五十三年及五十四年ニハ四十六
 人トス千八百五十三年乃至四年ニ終ル八年間印度ニ役ス
 ル歐洲兵ニ就テドクトル、サワルト氏ノ製セラレタル表ヲ
 閱スルニ兵卒ニ在リテハ百人中四十人、七四士官ニハ十六

人、六六婦人ニハ三十一人、七四ニシテ小兒ニハ三十九人、一
 六三ナリ又三所ノ土人兵ニ就テ數年間均算セシニ孟加拉
 ニハ百人中三十人、五四孟買ニハ三十三人、〇六馬塔喇ニハ
 四十二人、九一ナリ千八百六十一年流行時ノ虎列拉委員ノ
 報告ニ據レハ歐洲兵ノ死亡數ハ其他州郡ノ死亡數ヲ超ヘ
 テ復ニ大ニ列細綿篤中諸士卒ヲ均算スルニ六十三人、八
 トス但シ印土人ノ罹病者ニ比準シタル死亡數ハ確知スル
 能ハズ千八百五十三年ニ終ル廿一年間獄舎ノ囚人土人ニハ
 百人中四十二人、六ナリ流行ノ初頭死亡數ノ夥多ナルニ關
 シテ檢スルニ千八百五十四年英國ニ於テ七月十六日ヨリ
 二十九日ニ至ル十四日間ニ於テ百人中多キハ五十九人ニ
 シテ少キハ四十八ナリ然レ之ニ次グ二十八日間 九月十六
 日ニ終ル

ニ八百人中只僅ニ二十三人、二一ナリ曾テキョルラッキーニ在
 リテ劇惡流行ノ初頭ニハ每症殆ント常ニ危險ナレモ其後
 漸々緩和トナリテ治療ニ制伏セラル、至レリ斯ノ如キ
 例ハ殆ント流行ノ毎次ニ認ムル所トス虚脱期ニ死亡數ノ
 大ナルハ千八百六十一年印度流行ノ結果ニ於テ認知スル
 一ヲ得ベシ其流行ニハ死者九百廿七人中七百十七人即チ
 百人ニ就テ七十七人、四ハ虚脱期ニ死亡セリ
 往時ニ比スルニ虎列拉病ハ方今印度ニ役スル歐洲軍ニ於
 テ益、危險ナル一説アリドントル、キワルド氏ノ表ヲ見ルニ
 假令該病ハ往昔ヨリモ稀ニ行ハル、ト雖モ罹病者ノ死亡
 數ハ大ニ増加セリ故ニ孟加拉ニ於テ千八百十八年乃至卅
 五年ノ十八年間健康者ニ比準シタル入院病者ハ百人中三

人、二五トシ入院者ニ比較シタル死者ノ數ハ二十六人、三六
 ニシテ乃チ罹病一千人ニ就テ二百六十三人、六ナリ然ルニ
 千八百三十六年乃至五十三、四年ニ至ル十八年間ニハ健康
 者ニ比シテ入院スル者二人、六二トシ入院者ニ比シテ死者
 ハ三十九人、七五乃チ罹病者千人ニ就テ三百九十七人ナレ
 ハ乙ノ十八年間ハ甲ノ十八年間ニ比スルニ罹病者中死ス
 ル者百人ニ就テ十三人強ヲ増加シ乃チ一千人中百卅四人
 強ヲ増加セリ馬塔喇ニ於テ千八百二十九年乃至三十八年
 間千人毎ニ死者二百七十一人ニシテ千八百四十二年乃至
 千八百五十一年、二年間ニハ千人ニ五百二人ナレ、乃チ千人
 毎ニ二百三十一人ヲ増加セリ、斯ノ如キ増加ハ他ノ地方ニ
 於テモ皆ナリ、雖モ特ニ馬塔喇ニ於テ太々大ナリトス

但シ此増加ハ恒久然ルモノニアラズノ其均算再ビ下降ス
 ルコアルガ如シ蓋シ死亡數ノ差異多クハ報告方法ノ異ナ
 ルニ隨テ自ラ差等ナキヲ得ズ輒近ニ至リテハ疾病ノ諸徵
 判然決定シタル者ノミヲ虎列拉病條下ニ篇入スレハ從前
 該條下ニ算入セラレシ者モ方今下利症ノ分類ニ加フドク
 トル、非ドワルト氏ノ第二十九表ヲ檢スルハ乃チ各地方
 ニ於テ下利症ノ増加スルヲ認ムベシ故ニ孟加拉ニ於テ千
 八百十二年乃至三十二年ノ申報ハ百人ニ就テ十一人、五五
 ニシテ千八百三十三年乃至五十三、四年ノ申報ハ十二人、一
 五ナリ孟買ニ於テ健康者ニ比較シタル入院患者ハ千八百
 ○三、四年乃至二十七、八年ハ八百人ニ就テ六人八五ニシテ
 千八百二十八、九年乃至五十二、三年ニハ十二人、九七トス而

ノ馬塔喇ニ於テ千八百二十九年乃至三十八年ハ百人ニ
 就テ七人、八ニシテ千八百四十二年乃至五十一年ニハ十八
 三トス之ニ據レハ孟買及馬塔喇ニ於テ虎列拉病死亡ノ増
 盛ハ著シクシテ下利症ヲ以テ入院セル病者ノ比例モ亦三
 所中最モ大ナルコトヲ知ルドクトル、非ワルト氏ノ擬定セシ
 如ク恐クハ下利症ノ痢疾門ニ侵入スルアルベシ然レ余カ
 考ルニハ往時ノ申報中虎列拉病トシテ分類セラレタル症
 モ方今ニハ下利症又ハ痢疾ニ分類スル者アラフ故ニ往時
 諸下利病ノ死亡數ヲ當今ノ死亡數ニ比較スルハ有要ノ件
 トス
 年紀、男女、人員等ニ關涉シタル死亡數ハ病原論篇ニ記載セ
 ラレタリ

鑒別

著明ノ症ニ在リテハ識別容易ナルモノニシテ泄瀉、吐逆、情然タル容貌、筋肉抽掣、乍爾ノ虚脱、夥多ノ發汗等以テ虎列拉症タルコトヲ認得スルニ足ル。泄瀉期ニ在リテハ之ヲ覈定スルニ較、困難ナリ或ハ之ヲ膽液性下利、虎列拉病下利ト誤認シ或ハ刺激性藥又ハ毒物ニ由リテ起リタル洩瀉ト誤認シ或ハ某熱症ノ初起ト誤認セラル。コトアリ然レ專ラ鑒別法トシテ憑藉スヘキ所ハ泄瀉ヲ生ゼシ原因ノ確乎トシテ認取スヘカラザルト疼痛絞痛、欠如スルト又ハ其輕微ナルト大便ノ液形ニシテ白色ナルト腸ヨリ饒多ニ液汁ノ迸射スルト急ニ衰憊ヲ來スト數、早晨ニ發病スル等之ナリ倘シ病者褐色ノ糞塊、太ク水液ヲ通

スル歎或ハ絞痛、或ハ疝ヲ有スル歎或ハ不食ナル食物ヲ食スル等原因ノ認ムヘキアルトハ鑒別頗ル容易ニシテ其病タル恐クハ通常ノ下利症ナルベシト雖モ尙ホ數時間注意シテ其病者ヲ看護セシコトヲ要ス虎列拉性下利ハ其始メ虎列拉ヨリモ寛和ニシテ一般ニ便中膽汁ヲ含有シ數日間疾病ノ持久ヒル后モ尙ホ然リトス而シテ此症ニハ稀ニ甚シキ疼痛アリ然レ毎ニ其初頭ニ於テハ虎列拉症ト看做シテ療法ヲ施サシコトヲ要ス吐逆ハ鑒別ヲ扶クト雖モ時アリテハ虎列拉症ノ初頭數時間欠如シ又往々下利症ニモ現在スルコトアリ虎列拉症ノ吐逆ハ一般ニ液体ニシテ無色ナレモ膽液性下利ノ吐ハ數、不消化ノ食物又ハ膽液物トス熱症ノ初起ニ發スル下利ハ屢大ニ衰憊ヲ來シ爲メニ其初

頭之ヲ虎列拉症ノ初發ト區別スルハ困難ナルヲアリ然リ
雖其衰憊一般ニ劇甚ナラス虚脱症ニ陥ルノ偏向アル
モ深甚ナラズシテ暫時ニ發熱期ヲ來スモノトス
総テ病院ニ於テ治療ヲ負擔スル醫士ハ初起ニモ尙ホ其容
貌ニ由リテ指示スル徵候ノアルヲ熟知セザルベカラズ
屢病者顔面尖瘦憔悴シテ鉛色ヲ呈シ較幽悄ノ休ヲ徵スル
トアリ之ヲ訊診スルニ多クハ當時水瀉ニ苦ムトヲ懇ヘ前
夜臨床通利セシ便ハ其一半或ハ三分一褐色又ハ白色ノ液タリ
ト謂フモ未タ躬ラ虎列拉症ニ罹ルヲ知ラズ更ニ之ヲ懇
ヘザルモ是實ニ該症ノ初期タルモノトス一睇見ノ以テ人
命ヲ救フト屢之ナシトセズ故ニ患者ノ容貌ニ以上ノ變易
ヲ呈スルモノハ假令病者ノ懇フル所尙ホ輕微ナルモ又尙

ホ吾カ職業ヲ操作時トシテハ尙ホスルモ決シテ尋常ノ疾
病ト看過スルヲ勿レ
探業スルヲアリ
ホスルモ決シテ尋常ノ疾

刺戟中毒病ハ屢見ル所ニシテ或ハ不慮的ニ來リ或ハ故意
的ニ發ス故ニ尙シ虎列拉病タルヘキ疑惑ノ病者ヲ診スル
ニハ須ク毎ニ以上實事ノ念慮ヲ擁シテ審察セザルベカラ
ズ且吐逆泄瀉ヲ徵スル症ハ皆之ヲ虎列拉病ト認可スベキ
ニアラズ

虎列拉流行ノ際下利症ヲ診スルハ必ス毎ニ初診ニ於テ
其大便ヲ検査センヲ要ス印度ノ如キハ民家ニ厠房ノ設
ケ少キヲ以テ英國ニ於ケルカ如ク之ヲ檢スルニ困難少ナ
カルベシ尙シ大便既ニ厠房ニ棄擲シタルハ次ニ泄瀉ス
ル所ノ便ニ蓄藏セシムベシ所謂大便ノ検査ハ鑑別法上ニ

就テ最モ緊要ノ件ニシテ且醫ヲシテ識別ニ満足セシムル
ノ件タルカ故ニ決シテ妄却スベカラズ病者ノ品位、男女及
年紀ヲ論セズ必ズ此検査ヲ怠ルベカラズ
虚性熱ヲ以テ來院スル病者ノ往々虎列拉病續發症タル
之アルヲ肝銘シテ必ズ之ヲ審ニ鑒別セント欲スルニハ須
ク疾病發起ノ方法ニ關シテ診查ヲ行ハントヲ要ス

病理

「病休剖檢」ハ虚脱期或ハ反應期ニ死シタル者ヲ區分シテ稽
察セントヲ要ス

(イ)虚脱期ノ剖檢「虚脱期ニ在テ死シタル者ハ皮膚一般ニ淺
藍色トナリ又ハ諸部殊ニ臥側部ニ斑點ヲ畫シ屢結膜下組織ニ
血液漏泄ヲ呈シ四肢ニ皺紋ヲ印ス」体温ハ生前ニ於テ太シ

ク下降スルモ往々死后暫時間微々昂升シ而シテ后又徐々ニ
冷徹スドクトル、ゴール氏ノ書ニミストル、バルロー氏及他
ノ諸氏ハ死后ニ体温ヲ檢セシニ將ニ死ニ瀕スル時ニ測リ
タル温ヨリハ華氏ノ二三度升騰セルヲ認メタリト謂ヘリ
死后強直ハ速ニ始リテ其持久スルヤ尙ホ他ノ疾病ヲ以テ
死シタル体ノ如シ「往々筋肉ノ歛縮ヲ生ズルヲアリ稀ニハ
其力四肢ノ位置ヲ變ズルニ足ルアリ該現ハ像死后數分時
ニ始リ二三時間持重ス」腐敗變化ハ歐洲ニ在テハ特ニ急速
ナルヲ身ズト雖モ印度ニ在テハ他病ニ死シタル者ヨリハ
較速ニ始ムルカ如シ「腹腔ハ恰モ捏粉狀ノ觸感アリ上部ハ
打診ニ濁音ヲ呈ス」
「血液」呼吸器虚脱期ニ死スルトハ疾病ノ經過尙ホ短暫ナル

カ故ニ未タ有形ノ變ヲ起スニ至ラズト雖モ主トシテ認ムル變化ハ血液ノ分配上ニ在リ血液漏泄ハ屢見ル所ノ症狀ニシテ胸膜及心包ノ如キ漿液膜下、大小腸ノ粘膜炎、及脊髄硬膜周圍ニ存シ又稀ニハ他ノ部位ニ在リ

肌表ノ毛細管ハ空虚トナリ血液ハ專ラ肺ノ大脈管、心ノ右側腸ノ靜脈及其毛細管内虛充盈スドクトル、バ！クス氏ハ自著、亞細亞虎列拉病書ニ於テ血液蓄積ノ部位ヲ指示セシニ爾來虎列拉病死体剖檢ヲ行フモノハ多ク同氏ノ記載ヲ信據スルニ似タリ曾テ擬定セシ所ニ據レハ血液ノ盈滿スルハ肺臟及心臟ナリト云ヘモ同氏ハ精密ニ血液鬱積ノ眞位ヲ指示シテ謂ク其鬱積部ハ心臟右側ノ脈管及肺臟根ニ位スル肺動脈ニシテ心ノ右側ヨリ較細小ノ枝椹ニ達ス

ル点トナシ較細小ノ脈管、肺毛細管、肺靜脈、及心ノ左側ハ殆ント空虚ナリ而シテ其血液ハ通例假死症ニ於ケルカ如ク肺毛細管内ニ捕捉セラレズト雖モ尙右ノ部位ニ遠隔セザル動脈内ニ担擱セラル、モノトス故ニ解剖ニ際シテ肺臟根脚ニ於テハ自由ニ出血アリト雖モ之ニ遠隔セル周邊ノ部ニ在テハ或ハ微少ニ出血シ或ハ更ニ出血セザルアリ一血液欠如スル又同氏ノ謂ヘルニ肺ノ根脚ヲ截割スルキハ通例共截開セラレタル血管動脈ニ肺ヨリ頗ル血液ヲ逃出シ或症ニハ其量ニ巴ニシテ或症ニハ一巴或症ニハ二十四汚或症ニハ三汚或症ニハ六汚ニシテ又他ノ九人ニハ二汚乃至五汚ノ間ニ位セリ而シテ十四人ニ在テハ肺臟全ク萎縮シ就中某症ニハ恰モ胎兒ノ肺ニ擬似セリ又三人ハ萎縮頗ル甚

ク又八人ハ僅微ニ萎縮シ而シ他ノ殘餘十四人中某症ハ萎縮殆ント全シト雖モ其症ハ既往ノ肋膜炎着テ以テ較之ヲ妨ケタリト肺臟組織實質ニ在テハ假令其周圍ニ於テ間他部ヨリモ多ク赤色ヲ現ハスヲ有リト雖モ血液一般ニ缺乏ス斯ク肺中血量ノ減却スルハ其重量ノ減少スルヲ以テ證ス同氏ハ歐洲人二十二名ニ就テ檢セシニ右肺ノ平等重量十四号ニシテ左肺ノ平等重量十二号六号ナルヲ目撃セリドクトル、クレンゲンニング氏ハ健体ニ於テ兩肺ノ平等重量ヲ四十六号トシドクトル、レド氏ハ之ヲ四十三号トシテ乃チ虎列拉病患者ニ於テ其肺重ノ減却セシヲ十五号ヨリ十九号ナルヲ示セリ又其肺臟組織ハ軟鬆ニシテ倚シ萎縮セザリシモハ之ヲ按壓スレハ微々捻髮音ヲ起ス是

血液ノ毛細脈管及動脈枝極ニ達スル前ニ方リテ阻塞セラレ、ニ由リテ非常ニ貧血ノ状態トナリシモノト思考スルヲ得ベシ今肺臟ヲ解剖スルニ其面蒼白色若クハ暗黒色ヲ呈シ或ハ以上二色ヲ混交マタル色彩ヲ現ハセリ或醫ハ肺ノ後部ニ血積狀アルヲ認メタリ是恐クハ沈澱性ハイポク血積ナルベシ心臟ノ右側ハ概テ充盈擴張ノ其血液凝固ヲ起セモ未タ凝固ナラズパークス氏ノ診セシ虎列拉患者中四分ノ一餘ハ血液凝固ヲ視ズ又心臟ノ左側ハ或ハ殆ノ一空虛トナリ或ハ唯僅量ノ黒血ニ少許ノ弛緩セル凝固物ヲ混ジテ存セルアリ爾餘血積ノ部ヲ檢索スルニ肝ノ較大ナル靜脈及門脈ノ諸枝ヨリ起ル所ノ諸枝及其諸枝極ハ俱ニ粘膜面及腹膜面ニ於テ充血スルヲ視ル而シ其血色ハ概テ暗

黑色ヲ現ハセヒ空氣ニ曝觸シ若クハ小腸内ノ含蓄物ニ抵
 觸スルニ由リテ稍鮮紅ニ變換スルナリ「血液ノ分拆ハ前條
 既ニ記載シ而シテ血液凝固ノ形狀ニ就テハ數說尙ホ未ダ一
 定セズパーリス氏、ウヰルシヨール氏、ブリケット氏及ミグノット氏
 ハ借ニ咸ニ凝固ノ十分ナラザルヲ目撃シ或ハ復タ諸大
 血管ニ於テ弛緩セル凝固ノ狀ヲ目撃セシト云フ然レドク
 トル、ゲエールトチル氏ハ其脈管中ニ血液ノ凝固スルヲ尙ホ
 他ノ病ニ於ケルカ如ク十分ナリト云フ
 肺臟ニ在テハ血液ノ分配及其組織ノ萎縮ニ基ケル變化ノ
 他ハ僅ニ變化ヲ視ルノミ又心臟ノ筋織ハ一般ニ硬韌若ク
 ハ硬固ナリ
 「腹腔腹膜ノ内臟層ハ一般ニ多ク血積ス而シテ其毛細靜脈ハ

暗黒色ヲ呈ハセヒ空氣ニ曝觸スレバ鮮紅色ニ變ズ又其膜
 面ハ常態ヨリモ尙ホ鈍暗色ニシテ時アリテハ粘性ノ濕潤
 ヲ存ス

「胃及腸」ノ粘膜ハ往々血積シ小腸ノ粘膜ハ其脈絡血積充張
 シテ屢小樹形ヲナシ又其被膜中僅ニ形器的變化ヲ呈シ而
 シテ粘膜ハ水腫狀ヲ現シ其皺襞隆起スホイム氏ハ小腸粘
 膜ノ腺造構高ク起リ殊ニ回腸ノ下部ニ於テ著シキヲ示
 セリ是ヲ以テペイル氏腺及撒布腺ハ屢膨大シ乙ハ甲ヨリ
 モ著シク大ナリ又單純症ニ在テハ潰爛ヲ發覺スルヲナシ
 ト雖ヒ稀ニハ幽微ナル灰白滲出物ノ斑ヲ看ルヲアリ此等
 ノ斑ヲ名ケテ實弗埒利亞性斑ト稱ス然レ之ヲ咽喉實弗埒
 利亞ノ滲出物ニ比較スルキハ此名ヲ目シテ恰當也ト倣シ

難シ此等ノ斑ハ咽喉實弗埒利亞ノ如ク容易ニ剝除シ得ズ
 且此滲出物ハ往々劇性痢病ニ於テ回腸ノ下部三四印埒ノ
 處ニ認ムル顆粒狀斑ニ類似シ又其一層發育セシモノニ在
 テハ尙ホ痢病ニ於テ結腸中ニ發生スル濃褐色顆粒狀斑ニ
 密似セリ倘シ之ヲ剝祛セント欲スルモ必ズ多少發生セ
 ル腺質ノ表面ヲ毀傷スルニ非スハ決シテ除却シ能ハザ
 ルモノトス但シ該病ニ在テハ此類ノ斑ヲ視ルト罕ナリ然
 且大概虎列拉病ニ在テハ腸管ノ粘膜又ハ其腺ノ造構ヲ點
 檢スルニ或ハ微々血積ヲ呈シ或ハ全ク否ラズ或ハ判然ク
 ル病的變化ヲ見出スルヲナシ腸中ノ蓄藏物ハ上文既ニ記
 載セルカ如ク或ハ十分ニ之ヲ填塞シ或ハ唯小量ニ存スル
 事アリ而シテ其質ニ通常ノ虎列拉便ナルコトアリ或ハ乳酪様

若クハナルコトアリ或ハ砂礫狀ヲナシ或ハ灰白色ノ塊ヲナ
 シ或ハ多少腸中ニ粘着セル膠様塊若クハ纖維様塊ヲ混濁
 スル液ナルコトアリ又時アリテハ黃色ヲ賦シ或ハ該腸中更
 ニ潰爛ノ痕跡ヲ表セズシテ大量ノ凝血ヲ罕ニ存スルコト
 アリ
 〔結腸〕概メ結腸ニ充血ヲ呈スルコトナシ問該腸ニ靜脈ノ血積
 ヲ起スモノアリト雖モ多クハ斑々ニ區畫シテ汎衍性ナル
 鮮ナク粘膜ハ假令時アリテハ稍腫起スルモ小腸ノ粘膜
 ニ於ケルカ如ク甚シク水腫狀ヲ表スルコトナシ又其蓄積物
 中肯テ多量ニ内皮細胞ヲ混ズルニアラズ稀ニハ粘膜ノ壞
 疽ヲ誘起セシ廣キ血液滲漏シエキモヲ作爲セルヲ認ムルコ
 トアリ

「肝」大静脈ノ本幹ハ一般ニ粘稠ノ血液ヲ充盈ス而シテ其基礎
 織カイレンハ灰白軟弱ニシテ屢健態ノ同質ヨリモ縮小シ
 其膜帽ユルハ皺縮スルヲ有リト雖ヒ恒ニ然ルニアラズ
 又此器ハ往々汎發性血積ヲ起ス之アリ顯微鏡下ノ狀況
 ハ更ニ常態ニ異ナルヲナシ膽囊ハ概テ胆汁ヲ充滿ス
 「脾」ハ大抵健態ニ於ケルヨリモ小ニシテ且多クハ軟弱ナリ
 某醫ハ肝臟及脾臟ハ常ニ血積スルヲ記載セリト雖ヒ某
 醫ハ肯テ否ラズト云フ
 「睪」ハ大約常態ニ異ナラズ腸間膜腺ハ屢膨大シテ且灰白色
 ナリ
 「腎」ハ一般ニ血積シ其静脈ノ殊ニ乳頭ハ外方皮質ニ達シテ腫
 大ス内皮細胞ハ概テ其形狀自然ニ均シ而シテ斯ク甚シク顯

粒狀ヲ現スハ是恐クハ或ル普魯的印シテ水炭窒ノ化合物ニ
 ノ基礎ナノ沈澱ニ由ルナルベシ
 「腦及腦膜」ノ形狀ハ他ノ直接諸腦ヲ侵襲セザル該病ニ於ケ
 ル形狀ト同一般トス
 今虛脱期死後ノ狀況ヲ約説スルハ血液ハ其成分ニ變換
 ヲ起シ内部諸大静脈及肺動脈中ニハ血液ヲ充填シ諸毛細
 脈管ハ概テ血液大ニ缺如シ大概腸及腎臟ノ毛腸腺ノ造構
 多クハ隆凸ヲ生シ小腸ノ内皮細胞ハ死後ニ其處ヲ移轉シ
 肺臟組織ノ萎縮セルモノハ十中ノ八九トス
 「(ロ)反應期ノ剖檢反應期ニ於ケル諸變態ハ各第二期的諸般
 死因ノ性質ニ隨テ一樣ナラズ今爰ニ其諸變態ヲ詳ニ記載
 スルハ肯テ要用ナラザルナリ蓋シ反應未タ充分回復セザ

ル期ニ死セル患者ニ在テハ其諸變恐クハ虚脱期中ニ死セ
 ル者ニ比スレバ肺臟一般ノ血積小腸腺質ノ隆起及小腸粘
 膜ノ血積等益多ク増盛スルノ外其他大ナル異變ナシトス
 繼發セル熱症ヲ以テ死シタル患者ニ於テハ腸胃屢著シク
 血積ヲ現シテ其粘膜ハ軟化ス又結腸モ時アリテハ同症ヲ
 現シ其粘膜ハ間水腫シテ皺襞ヲ作り所謂實弗埒利亞性滲
 出物ヲ認ムルコアリ然モ生前榮養管ニ關スル諸症ヲ徵セ
 ザリシ患者ニ在テハ小腸ノ血積及水腫等僅少ナルコト尙ホ
 レインハルト氏及リューハステル氏ノ目撃セシ所ノ如シ
 尿毒症ノ患者ニシテ死ノ蚤ニ來ルキハ腎臟膨大シテ紫色
 ナ現シ之ヲ截割スレバ血液滲出ス尙シ死ノ晩ク來ルキハ
 腎臟水腫狀ニシテ鉛白色ヲ現シ且鉛白色ノ顆粒物ヲ浸淫

+

ス又之ヲ壁クキハ容易ニ破裂シ其内皮細胞組織ハ健体ニ
 於ケルヨリモ尙ホ不透明ニシテ脂肪球ヲ混セル顆粒物ヲ
 充ツ蓋シ此患者ニ視ル腎臟ノ景況ハ猩紅熱ノ患者ニ視ル
 所ト類似シ其他臟器ノ狀況ハ通常ノ急性尿毒患者ニ視ル
 所ニ髣髴ス又時アリテハ第二期的脈衝ヲ存シ其證據ヲ組
 織中ニ發見スルコトアリ「尿素ハ頗ル多ク血中ニ存在シドク
 トル、ガルロット氏ハ血液一千分毎ニ尿素一分、一四ヲ視シト
 云フ但シ尿素ハ心臟ノ右側ヨリ抽取スル血液ヲ以テ容易
 ニ檢出スルコトヲ得ベシ
 右ノ外尙ホ諸臟器ノ變况アレモ肯テ虎列拉病ノ爲メニ特
 異ノ徵ヲ現スニアラズ肺、胸膜、心嚢及腹膜ニ虚性脈衝ノ確
 徵ヲ看ルコトアリ
 兩肺ノ血積ヲ又腦及腦膜ハ時アリテ虚性
 特ニ甚シトス

熱因血積ノ違和ニ於ケルカ如ク血液ヲ盈滿シ全身ノ血液ハ凝聚ノ力ヲ損ス爾他間發現セル壞疽性斑、眠瘡、潰瘍、角膜炎、癩、癬、化膿性腫起性耳下腺炎、肺壞疽、血液滲漏、及紫斑ハ若ク瘰癧性等モ亦此變況ニ算入セザルベカラズ

生前ノ病理

今虎列拉病ノ諸徴及屍体剖檢ノ症狀ニ由リテ兆示シタル所ヨリ各自ノ理由ヲ説明セント欲ス而シテ原因ノ性質ハ既ニ病原論章中ニ論載ス今也一種ノ某毒何等ノ方法ニ由テ或ハ路ヲ肺ニ求メ或ハ腸ノ内面ニ據リテ血中ニ侵入セルモノト擬定ス蓋シ其毒タル恐クハ酵母ノ法ヲ以テ汎ク血液中心ニ作爲スルモノナルベシ然レ該毒ハ血液上ニ現在作用カダリチツク、イヲ以テ働クヤ或ハ自家ニ血液中ニ在テ

増殖スルヤ否ヤヲ詳ニセズ仮令方今ニ在リテハ未タ其精細ナル作用ヲ尋跡シ克ハザルモ或ハ其結果ニ就テ臆測推究スル所アリ而シテ其結果ヲ注目スベキ所ハ就中毛細動脈及小動脈ノ二大列及肺及腸ノ毛細管タルニ似タリト雖モ該毒ノ該二列中ニ感動ヲ生ズルヤ大ニ差異アルカ如シ蓋シ肺ニ在テハ虚脱期中太タ僅少ノ血液ヲ通シ腸ニ在テハ分泌期中血液諸成分ノ某物過量ニ毛細血管壁ヲ通過ス以上二列ノ運爲ヲ察スルニ神経系中或部ニ病害ヲ蒙ルニ似タリ乃チ肺ニ在テハ小動脈ノ筋纖維収縮ノ狀ヲ起セルカ如ク腸ニ在テハ小動脈及毛細動脈ニ一種ノ麻痺ヲ起セルカ如シ是ビルナルド氏ノ交感神経ヲ頸部ニ於テ截斷セルトニ經驗セラレシ結果ニ密似ス即チ其肺ニ於ケル病的作爲

ノ神經性タル所以ハ死后血液循行ニ機械的際害ノ欠如セ
 ルト或ハ病初發作性ニ呼吸困難ヲ生ズルト或ハ病ノ恢復
 スルニ臨ンテ肺ノ血行再始スルノ容易ナル等ヨリ明ナル
 カ如シ又腸ニ於ケル病的作爲ノ神經性タル所以ハビルナ
 ルト氏カ交感神經ヲ頸部ニテ截斷セシキ其神經ノ分布セ
 ル血管ヲ以テ供給セル肌表ニ於テ發汗ノ滴瀝セシ結果ト
 同形アナロタルヨリ瞭カナルニ幾シ蓋シ肺ノ諸障害及腸
 ノ分泌ハ共ニ病毒ノ結果ナルヤ將タ腸管ノ分泌起始シ爲
 メニ血中ノ液分及鹽類ノ多ク分泌セラレ隨テ其血液濃稠
 ニ變シ竟ニ以上肺ノ諸徵ヲ將來セルヤ未タ學說一定ナラ
 ズ虎列拉病虛脫期ノ諸徵ニ均シキ徵候ハ或毒ニ由テ毫モ
 泄瀉ヲ起スナクシテ發スベキナ疑ヲ容レザル所ナリ嘗

テ甲谷他ニ在リテ麻刺利亞毒ニ罹レル患者ニ於テ猶ホ虎
 列拉患者ニ於ケルカ如ク厥冷、絶脈、呼吸困難等ノ症狀數時
 間ニ亘レルモノヲ目撃セリ又壞疽ノ患者ニ於テモ稍右ニ
 類同セル症狀ヲ起スナリ然ラハ則チ某病ニ於テハ更ニ
 分泌即チ血液ヨリ液分ノ損失ナキモ虎列拉病虛脫期ノ徵
 候ニ類似セル症狀ヲ生ズルナアルニ似タリ抑モ虎列拉患
 者ノ分泌ハ該病ノ虛脫期ヲ生ズルニ必要ナラズト決定シ
 得ベキヤ未タ疑團ヲ免レズ且該病ノ極劇急性症ニ於テハ
 更ニ下利ヲ將來セザルナアルカ故ニ尙ホ虛脫期ノ原因ニ
 就テ其他ノ原ヲ檢索センナリ要ス然レ更ニ下利ナキヨ以
 テ全腸内毫モ分泌物ナシト言ヒ難シ此分泌物タル時アリ
 テハ腸管ニ流注シテ尙ホ其内ニ秘閉セラレ、ナリ須ク

其間泄瀉ト滲出トヲ混同スルコ勿レ屢生前殆ント下利等
 ノナカリシモ屍体ヲ剖檢シテ其腸内ニ液分ノ充盈スルヲ
 認視シ又他ノ疾病ニ於テハ十分ナル虚脱期諸徴ノ吐瀉ニ
 前ツテ發顯セシコ之アリ其例「ミットル、セッキス」醫院ヨリ一千
 八百四十五年虎列拉病流行ノ際之ヲ報告セラレタリ即チ
 一小兒只一回下利ヲ起シ且僅量ノ物ヲ吐スルノミニシテ虚
 脱ニ陥リ以テ該院ニ投シタリ而シテ入院后忽焉過剰ノ洩瀉
 ヲ起セリ蓋シ此患者ニ在テハ他ノ患者ト同一般ニ已ニ腸
 中分泌ヲ起セシト雖モ尙ホ其内ニ之ヲ有シ恰モ滲出物ヲ
 シンテ虚脱期ニ陥ルモノニシテ全ク虚脱期ヲ發育スルノ後
 始メテ其下利ヲ來セシモノナルベシ又報告書中許多ノ患
 者ハ更ニ下利等ヲ起サズシテ死シ或ハ虚脱期ニ至リシモ

其症候ハ吐瀉等ニ由テ体外ニ排泄物ヲ致セン病者ノ徴ニ
 類同セシト謂フ 虎列拉病種類條 蓋シ印度ニ於テハ斯ノ如キ
 患者ハ肯テ多キニアラズト雖モ僅量ノ水ヲ吐出セルノミ
 ニテ虚脱期ニ陥リ或ハ忽地死ヲ致セシ等又往々之ナシト
 セス然モ經驗ニ依レハ實地上常ニ此ノ如キ患者ヲ診スル
 コト罕ナリ右ノ外細心注意スベキ件ハ死后腸内ノ填充物
 ナ測ルニアリ乃チ夫ノ生前下利ナシト假定セシ患者モ其
 腸内充積物ヲ存スルアルヲ以テ察スレハ肯テ分泌ヲ起サ
 ヲルニアラズ是レ秘閉ニ由ルモノトス蓋シ虚脱期ニ於テ
 患者ノ靜脈中ニ注射法ヲ行フヨリ速ニ改良ヲ來スヤ虚脱
 ハ血中液分ノ缺乏ニ属スルノ意見ヲ左祖スルモノトス而
 シテドクトル、デモンソン氏ノ抗論セシ如ク該患者ノ已甚ナル

虚脱期ヨリ蘇生セルハ其注液ノ温煖ナルニ基クモナリト説明シ難シ仮令以上ノ條件ハ尙ホ細心注意ヲ要スルモ虚脱ハ腸内滲出物ニ設シ下利スルニ關スルヤ頗ル信用スベキニ似タリ又問診スル所ノ虚脱期ニ於テ其体尙ホ豊盈セル症ハ大ニ以上ノ説ニ抗スルカ如シト雖ヒ該患者ノ如キハ一般ニ發汗微々ナリ故ニ只其肌表毛細動脈ニ在テ僅ニ一分ノ排泄ヲ存セルニ由ルナルヘシ仍テ察スルニ虎列拉毒ハ或ハ肺血管上ニ作爲シ或ハ血行系及呼吸系ノ中心上ニ鎮降作用ヲナシ以テ虚脱期ヲ生ズルノ説ノ假令未ダ十分モ信ナルニ似タリ

虎列拉病ノ嘔吐及泄瀉ハ保身的「カリユ」ナルヤ將タ該毒ノ排泄的ナルヤ醫說未ダ定マラズ蓋シ有機毒ニ由テ起ル所

ノ下利タル必ス体内ニ侵入シタル其毒ヲ排泄スル歟或ハ其毒ノ結果ヲ排除スル歟甚タ疑フベキ所トス然リ而シテ該病ニ於ケル諸分泌ハ其毒ヲ排泄センカ爲メニ生ズルヤ否ニ拘ラズ其分泌ハ太々暴惡ノ治法タルヤ殆ント疑テ容ルベカラズ設シ其下利良性ノモノトナスハ虎列拉病ニシテ前驅下利ヲ有セルモノハ乃チ輕症ナラント預察スルヲ得ベシ然ルニ時アリテハ一週日若クハ一週餘日間寛麻子油ノ二三服量ニ由テ生ズルカ如キ十分ノ下利アルモ尙ホ過剰ノ洩瀉ヲ起シ了ニ虚脱シテ死ヲ致スモノアリ虎列拉患者ヲ多ク實驗セル醫ハ該病虚脱期ノ未ダ發生セザル前ニ於テ其泄瀉ヲ制止スルヲ得タル患者ハ多ク救療スルヲ得ベト云ヒ又該病流行ノ時ニ際シ酸下劑ヲ投用

スルヲ警戒セリ凡ソ衆醫ノ經驗ニ據ルニ以上ノ説ニ違
 反セシト殆ント鮮ナリト未タ虎列拉毒ハ奈何ノ方法ニ據
 リテ体外ニ排泄セラル、ヤヲ詳ニスル克ハズト雖用蓋シ
 該毒ハ何等ノ方ニ由テ分解セシレ決シテ本來ノ形狀ヲ以
 テ排泄セラル、モノニ非ザルヲ推知スルノミ
 虚脱期ニ在テハ患者ノ症候著明ナルモノニシテ乃チ血液循
 環ハ殆ント遏止シ生活官能ハ微候編ニ記示セシ如ク實ニ
 減衰シテ漸ク存スルニ至リ而シテ体内ノ化機作用ハ殆ント天
 然ノ運爲ヲナス克ハズト雖トモ或ル化機變化ハ同等ノ温
 ニ在テ脈管外ニ於テ働クカ如ク尙血液自家中ニ行ハル、
 モトス故ニ怠慢持久セザル虚脱症ニ在テハ爲メニ之ト混
 淆セル諸物質ニ其不潔ヲ賦與スルニ足ル斯ク許多ノ水分

ヲ損失セルカ爲メニ血液濃厚トナルハ必ず諸種ノ變更
 ヲ生ゼズシハアルベカラズ就中胞間液イン、テ、ル、セ、リ、ト及
 血球ニ變更ヲ起シ且特ニ其二類間ノ關係ニ變更ヲ生ズル
 ヤ必セリス、モ、ロ、カ、ル、レ、ニ、シ、ト氏ハ殆ント三十六時ヲ經タル后血中ノ
 成形的原質ハ常量ヨリモ多キヲ殆ント一半ナリ擬定セ
 リ而シテ血中無機鹽類ノ比例恐クハ初頭四時間此時間ニ在
 水分其鹽類ヨリモ滲出テ、ハ、血、中、ノ
 スルコト頗ル速カナリ除クノ外肯テ増加スルコトナク十
 八時間ノ後ニハ却テ其鹽類自然ノ比例ヨリ多ク下降シ且
 三十六時間若クハ四十八時間ノ後ニハ尙ホ一層其比例ヲ
 減ス故ニ以上ノ結果ニ據レハ血球中含蛋白質ノ比例ハ一
 半ヲ増加シ且胞間液中ニ常量ノ二倍ヲ添フ而シテ同氏ノ稽
 察セルニ血管中諸固形物ノ保有セラル、ヤ水ヨリモ大ニ

シテ又有機固形物ノ保有セラル、ヤ無機固形物ヨリモ多ク
 ク燐酸鹽類ノ保有セラル、ヤ格魯兒化鹽類ヨリモ多ク加
 里鹽類ハ曾達鹽類ヨリモ強シト又同氏ハ血球ヨリ胞間液
 ニ逸出スル滲出作用タル其球中含藏物ノ擴延斷ヘズ陸續
 スルト同一ノ理ニ出ルモノニ即チ亞爾加里鹽類中格魯
 兒化物ハ初メニ腸ノ毛細血管ヨリ滲出シ血球ヨリ漿液ニ
 滲出セル鹽ナリト推料セリ此ノ如ク血液ノ各成分間相互
 ノ關係ヲ變換セルキハ直ニ其常況ニ復スルヲ得ズ加之
 ズ假令反應ニ及ノテ更ニ液分ヲ而シ斯ク發起セル病狀ハ
 血中ニ吸収セシ後モ尙ホ然リ而シ斯ク發起セル病狀ハ
 繼發諸症ヲ誘起スルヲ補佐スル者トス
 反應期ニ於テハ血液ノ充全ニ清潔セラル、肝、腎及腸ノ内
 面ニ由リ特ニ自在ナル水液ノ吸収ヲ以テ進捗シ且其常抱

合物ハ腸中ニ尙ホ存スル鹽類若クハ故ラニ配用セラレタル
 鹽類ヲ吸収ノ舊ニ復スルモノトスドクトル、モトル、ヘット氏ハ諸
 分泌ノ回復ナクシテ反應ノ益急次ニ來ルキハ愈多ク第二期
 的熱等ヲ誘發スルニ似タリト云フ但シ該期ノ益益ニ復起
 スルキハ隨テ組織ノ變化益早ク且血中老廢物ノ飽積益早
 キヲ疑ナシ故ニ諸分泌及排泄ノ自在ニ行ハレシヨラ要ス
 ルヤ頗ル急ナリ某醫ハ虎列拉病ニ繼發セル病的作用ハ其虛
 脫期ニ於テ猥ニ投與セシ衝動劑ノ爲メナリトス蓋シ不注意ニ
 衝動劑ヲ投用シ或ハ他ノ用藥度ニ適セザルキハ未タ必シモ
 ザルニアラ或ハ愈血液ヲ侵害シ或ハ速ニ反應ヲ來タシ或ハ
 某熱病ノ發起ヲ翼クルヲアリ然レ會テ何等ノ醫藥ヲ服用
 セザルモ尙ホ第二期的諸症ヨリ苦シムモノ屢之アリ以テ

虎列拉病ハ單ニ自然ノ病勢ニ據リテ自ラ以上諸症ヲ起ス
 ニ足ルベキヲ察知スルヲ得ベシ腸中ニ存セル帶色ノ物
 ニ由テ察スルニ肝臟ノ官能ハ腎臟ノ官能ヨリモ回復スル
 一頗ル容易ナルカ如ク又甲ノ障害ヲ受クルヤ乙ノ障害ヲ
 受クルヨリモ尙ホ罕ナリ蓋シ各臟器ノ分泌作用ハ何等ノ
 機會ニ遭フハ忽チ回復ヲ得ベキ者ナリト冀望シ難シ而
 ノ其尋常作為ノ回復ヲ得シハ若干時間ヲ要セズンハア
 ルベカヲズ但シ尿ノ分泌久シク閉止セラルハ必ズ昏
 睡ヲ起シテ了ニ斃ルモノナリ然レ此ノ如キ患者モ胃腸
 ノ内面ニ據テ尿素ヲ排却スルヲ得レハ爲メニ其劇惡諸症
 ノ寛解セラレ、一往々之アリ恐シハ虎列拉病者ノ或ル繼
 發熱ニ於テ尿素ノ分泌更ニ停止スルヲナクシテ二十四時

間ニ通利セル尿量稍減少シ兼テ血中ニ「クレアチン」クレア
 チニン及其他老廢物ヲ蓄積スルヲアルベシ耳下腺腫大、紫
 斑、癩瘍及各部ノ敗血性エリツク疥癬等ハ一種ノ血毒ニ基
 キ又血中要分ヲ缺損スルハ角膜榮養ノ虧損ヲ誘起シ又
 恐クハ或形ノ壞疽ヲ將來ス然レ其原「エムボリスム」ニ由ル
 モノヲ見ス呼吸困難ノ原因ヲ別ツテ二種トナス甲ハ肺動
 脈枝梗ノ擧急収縮ニシテ乙ハ肺織ノ萎縮ナリ而シテ其動脈ノ
 収縮ニ因スル者ハ殊ニ呼吸困難一時ニ發作性ナルハ肺
 ノ或面ヲ局シテ其動脈ノ一列一時ニ収縮スルニ由ル
 又肺臟ノ萎縮ニ基クモノハ特ニ晚期ニ於テ呼吸困難ヲ持
 久セル者之カ原因トナスニ似ク然レ但シ肺臟ノ萎縮ハ必シ
 モ在在爾久スルニアラズ然レ恐クハ虛脫期ニ於テ設シ著

大ノ肺面萎縮シ吸息ノ衰弱セル間ハ持久スルコトアルヘシ
 紫斑ノ狀況ハ上文ニ記載セル原因ニ由リ又大量ノ甘汞ヲ
 服スルニ由テ生ズルコトアリ蓋シ嘔吐ヲ防遏センカ爲メニ
 甘汞一オ宛二三投與スルコト間之アリ某氏ハ甘汞四五十
 氏若クハ之ヨリ少量ナルモ胃腸ニ疊積シテ反應期ニ至リ
 更ニ吸収セラレ難キ量ヲ與フルヨリ既ニ溶血作爲トアル
 ソ、ルビヲ逞ッセル諸物ニ其溶解力ヲ副フコトアリ故ニ本病患
 者ニ水銀劑ノ大量ヲ用フルコトヲ慎シムベシ「虎列拉病」ニ續
 發セル貧血及衰弱ハ渾身ノ血質大ニ損害ヲ蒙リ爲メニ其
 血球体ヲ撲滅シ若クハ之カ復生ヲ妨害スルニ基クモノナ
 リトセバ其説明容易ナルヘシ
 又該病ニ隨發スル慢性下利及痢病ハ大小腸ニ存スル刺戟

ム

物ニ屬シ症ニ依リテハ其粘膜炎ニ潰爛及軟化ヲ生ズルコトアリ
 又其粘膜炎ニ滲淫セシ血液ノ溶化ハ該膜ニ於テ脈衝若ク
 ハ壞敗ノ斑面ヲ造リ爲メニ下利或ハ痢病ノ諸候ヲ來スル
 アリ
 嘗テ慢性蛋白尿ニ一症アリ其原ヲ繹スルコト一箇年前ニ患
 ヘタリシ虎列拉病ニ基因セリ

预后

「良徴」(泄瀉期)速ニ虛脱ニ陥ラズシテ脈搏稍力ヲ有シ容貌穩
 靜ニシテ平常ナリ某症ニ在テハ虛脱ナクシテ只經久スル
 泄瀉期ヲ以テ死ヲ致スコトアリ是恐クハ虎列拉性下利ナル
 ベシ(虛脱期)虛脱已甚ナラズ脈搏膊部ニ存シ呼吸安靜ニシ
 テ擾亂少ク函貌蒼白色著シカラス而シテ此期六時乃至八時

ナ超へス身動デヤクチエ止ンテ穩靜假寐或ハ一陣ヲ致シ血行徐々ニ回復シ体力ノ改良進捗假令徐々大便乳様若クハ灰白トナル蓋シ少許ノ下利持續セルハ肯テ害ナシ設シ小腹膨脹スルキハ却テ其下利有益ナリトス何トモバ腸内既ニ分泌セル物質ヲ排却スルノ作爲ナレバナリ且其便愈粘質或ハ膠質ナルキハ之ヲ排却スルヤ益宜シトス嘔吐及泄瀉ノ停止スルモ尙ホ僅時ヲ經テ反應ノ作爲ヲ起サレハ其徵タル更ニ切要ナラス(反應期)諸泌別廿四時間若クハ十六時間内ニ起リ睡眠快活及飲食ニ堪ユル等佳良ノ兆トス惡徵機骨動脈若クハ膊動脈ニ於テ俄然脈絶シ夙ニ呼吸困難ヲ來シ及肌表蒼白、脱汗過剩ナリ(反應期)尿閉、泰裏土諸徵ノ發現、兩眼充血、第二期的焮衝及昏睡常ニ危又恢復諸候

ノ開進スルヲ下利又ハ嘔吐ヲ歇ザルハ即チ惡徵ニシテ淡紅色若クハ血色ノ大便或ハ胃ノ出血ハ殆シテ下毎ニ必死ノ徵トス又筋力準ニ強キモ他ノ諸官能之ニ均シク改良セザルハ決シテ良徵ナシアラズ但シ該件ハ前ノ種類章下ニ就テ參考スル治法 虛脫ニ就テハ其期前療法ヲ始ムルキハ最モ成功アリ而シテ充分ノ虛脫期ニ至リテハ藥液既ニ吸收セラレ克ハザルヲ以テ醫療多クハ益ナシト謂フ然リト雖モ尙ホ醫療ハ都テ虎列拉病ニ有要ナラズ或ハ加之ナラズ其虛脫期中ハ至ク有要ナラズルモノト擬定スベカラズ蓋シ虛脫期ヲ至ク發育セザルニ及ンテハ共益ナシト雖モ其他ノ期ニ在テハ尙ホ他ノ劇性

危篤病ニ於テ得ルカ如キ藥功ヲ収ムルコトナシトセズ故ニ
 各自ニ適症ノ治療ヲ施スハ實ニ一大緊要ノ件ナリ併テ虎
 列拉病ハ單ニ吐瀉ノ疾病ニアラザルハ前章載スル所ニ就
 テ明晰ナリ
 治法ハ泄瀉期、虛脫期、及反應期ニ就テ各自ニ考究セシメ
 要ス
 「泄瀉期」泄瀉ハ可及的速ニ制止セズンハアルベカラズ何ト
 ナレハ醫療ノ大目的ハ血液ヨリ腸ニ滲出セル液物ノ通過
 ヲ遏制スルニアレハナリ「初頭投與スベキ藥劑大量ハ二人ニ
 ノ阿片トス印度ニ在テハ一般ニ甘汞一氏乃至五氏ヲ阿片
 ニ伍用ス未此甘汞ノ功ヲ奏スルヤ否ヤヲ知ザレハ亦一
 害ヲ看ズ右ノ服藥胃ニ収ルコトヲ得ハ恐クハ他ノ藥ヲ要ス

リ易ニ然レ其丸劑坐右ニ缺クハ阿片丁幾四十mヲ少
 量ノ冷水、若クハ氷水、若クハ武蘭地酒ニ和シテ服セシムル
 シ又醋酸鉛合劑其味肯テ悪キニアラザレバ之ニ少量ノ氷
 水ヲ加フレハ無味トナスコトヲ得ベシドクトル、父レトゾス
 氏ハ醋酸鉛丸ハ右ノ合劑ニ代ヘテ投與シ得ベシ然レ合劑
 ヲ用ハ功驗劣レルニ似タリ但シ此丸方ハ醋酸鉛二十氏及
 阿片一氏ヲ九十二粒トナシ一粒宛每一時トス或ハ每丸醋
 酸鉛ヲ増シテ二氏乃至二氏半トナスモ可ナルニ似タリ又
 單寧酸若クハ沒食子酸ヲ醋酸鉛ニ代ヘテ投與スルコトナ
 然レ此酸ハ較惡心ヲ生シ易シ以上載スル所ノ藥品ヲ以テ
 泄瀉ヲ制止スルコトヲ得ハ恐クハ危篤諸症ハ二三時ニシテ
 退去スベシ蓋シ此ノ如キ單純虎列拉病ニ在リテハ繼發症

ル下少シ但シ泄瀉ハ服藥后忽チ遏止スベキモノト信スベ
 カラズ大概服后尙ホ一、二回ノ洩瀉ヲ起スモノナリ實驗ニ
 由レハ概チ阿片服用后ニ収リシキ胃半時ヲ經テ下方ノ収
 斂合劑ヲ投ズベシ即チ醋酸鉛糖三十分、醋酸十m、蒸餾水六
 汚ノ合劑ヲ每半時若クハ一時ニ一汚乃至半汚宛用フ設シ
 阿片ヲ服スル后一時ヲ經テ尙ホ泄瀉ノ停止セザルキハ更
 ニ阿片二片ヲ投シ且右ノ収斂合劑ヲ持重スベシ泄瀉ノ暴
 シ持續スルキハ其合劑ヲ每半時若クハ一時ニ投與スベシ
 然レ泄瀉將ニ遏止セントシテ且脈搏佳良ナレバ或ハ之ヲ
 止メ若クハ數時間ニ一次用フベシ各般ノ藥劑ハ最モ單純
 ニシテ且刺戟少キ方ヲ撰用セシムルニ必要ナリ阿片ヲ丸
 トナスルハ刺戟烏答尼謨即チ阿片生○ヨリモ尙ホ胃ニ収

チ起スヲ稀ナリ設シ患者嘔吐ヲ存スレバ療法較困難ナリ
 此症ニ在リテハ前ノ如ク醋酸鉛阿片ノ丸劑ヲ投與スベシ
 設シ二三分時ヲ經テ吐出セラレバ其吐出物中多クハ該
 藥ヲ存ス故ニ阿片ヲ反復服用セシメノハ十分時乃至十
 五分時ヲ俟ツベク但シ其間上腹部ニ大芥子泥ヲ貼ス果ハ
 初メ投シタル丸ノ吐出セラレバ必ず疑ヒナキキハ吐后
 殆ント十五分時ヲ經テ同丸二片ヲ處スベシ設シ其吐出セ
 ラルヤ未ダ判然タラザレバ半時ヲ經テ後單ニ其丸一片ヲ
 與フベシ而シテ芥子泥ヲ剝去スル后胃部安易ナレバ醋酸鉛
 ナ溶劑若クハ丸劑トナシテ服セシムベシ但シ此溶劑ノ全
 量假令胃ニ収ラザルモ恐クハ其半量胃ニ収ルヲ得ベシ又
 胃ノ刺戟甚シクシテハ醋酸莫兒比涅半片ヲ溶水ヲ皮下ニ注

射スルコアリ單純阿片ノ胃ニ耐ル難キハ若青酸其他ノ鎮吐藥更ニ良功ヲ奏スルコト少ナシ衝動劑ハ此期ニ於テ脉搏虛弱ナルニアラザレハ之ヲ要セズト雖モ虛弱ナルハ僅量ヲ武蘭地酒ニ氷或ハ氷水優ルニ加ヘ一次ニ茶匙若干ハ二茶匙宛與フベシ又三鞭酒ハ時アリ他ノ酒類胃ニ収ラザルキ之ニ収ルコトアリ許多ノ患者ニ在テハ氷若クハ單純ノ冷水ニテ稀釋セル儘量ノ武蘭地酒由テ溶解スハ最良ノ衝動藥ナリ痙攣ハ概テ其部ニ嚼囉防喘ヲ塗擦ス或ハ手掌ヲ以テ其部ヲ摩擦スルニ由テ寛解ス設シ其劇キハ少量ノ嚼囉防喘ヲ嗅引セシムルヲ可トス諸家ノ賞用スル阿片ノ服量ハ勿論一定ナラズ現症輕易ナルハ二氏至ラズニ投與スベシ某醫ハ尙ホ之ヨリモ少量ヲ以テ毎半時若ク

ウ

六二時ニ與フルコト良トス然レ初メ三其大量ヲ與ヘテ屢之ヲ反覆スルコトナク即チ初頭三時間ニ患者服藥ヲ吐出セザレハ全量三氏ヲ與ヘ之ヨリ多量ヲ與ヘザルヲ宜シトス設シ患者服藥ヲ吐出スレハ須ク其吐出セシ藥量ヲ斟酌シ適宜ニ服用セシメズンハアルベカラズ一般ノ規則ニ隨ヘハ初三時間ニ阿片三氏醋酸鉛十氏乃至十五氏ヲ全量トス而シテ病勢減退ノ症候ヲ現スルハ或ハ服量ヲ減少シ或ハ全ク之ヲ去ルベシ又某症ニ在テ虛脫期ノ急ニ現ルベシナク泄瀉尙持久スルキハ第三次ノ服藥后三時間ヲ經テ更ニ阿片半氏若クハ一氏宛凡ソ毎三時乃至四時ニ用ヒ二回ニ及ブベシ且右ノ鉛合劑必要ナルコトヲ察スレハ毎二時ニ半汚宛五六次運用スベシ又虛脫期ノ既ニ始マラントスル

モノハ初頭ノ阿片三氏ヲ用ヒ後全ク之ヲ止メ設シ眞ニ
 該期ノ急進スル狀ヲ見レハ第三次ノ服量モ尙ホ之ヲ廢セ
 ザルベカラズ
 「虛脫期」十分ニ虛脫期ノ發育セルキハ全ク阿片ヲ避ケ宜シ
 ク鉛糖ヲ用フベカラズ而シテ腸管ノ分泌恐クハ十分ニ遏止
 シ或ハ現ニ利出セル大便ハ前ニ其管内ニ流注セシ殘物ヲ
 ルコヲ認ムルキハ決シテ患者ノ危篤若クハ虛脫ヲ促スベ
 カラズ極惡ノ虛脫期ニ在テハ諸衝動劑ハ瑣々タル裨益ヲ
 モナスコクハズ依的兒及安母尼亞ハ適宜ニ稀釋シテ之ヲ
 用フルハ害ナカルベシ故ニ設シ胃ノ之ニ堪ルコヲ得ハ每
 半時ニ其小量ヲ與フルモ可ナリ又時アリテハ武蘭地酒ノ
 水ヲ以テ稀薄シタルモノ爾餘ノ衝動劑ヨリモ能ク胃ノ堪

ユルコアリ然レ此期ニ在テハ衝動劑ヲ服用セシムルニハ
 大ニ細心注意シテ判決スベシ設シ該藥ヲ要スルモノハ必
 ズ脈搏上ニ其影響ヲ現スモノトス故ニ之ヲ用ヒテ脈搏少
 シク恢復シ或ハ再ヒ振興シ又之ヲ廢スレハ則チ脈搏ノ復
 故シ或ハ絶止スルキハ宜シク留意シテ之ヲ持重スベシ否
 ラザレハ注意セザルヲ此ノ如キ亞爾箇保兒性衝動劑ヲ固
 執シテ與フルコ勿レ但シ脈搏ノ衝動藥上ニ屬スルヤ確乎
 トシテ診認セラルコト往々之アリ「武蘭地酒及葡萄酒ノ如
 キ衝動劑ノ良續ヲ奏シ得ザルキハ次期ニ至リテ必ズ其弊
 害ヲ來スヤ實ニ憐ムニ堪ヘタリ蓋シ該藥ハ多量ニ胃中若
 クハ腸中ニ滲リ設シ吸收作用ヲ始ルキハ運血ニ達シ未ダ
 諸分泌ノ起ラザルニ先ダテ速ニ不適當ノ反應ヲ生シ已